

万国の労働者階級・被抑圧民族は団結せよ！

赤い通信

第6号

1972.2.10

主張 昨年下半期の内外情勢の特徴と沖縄・三里塚諸闘争の
幾つかの教訓

戦線報告・闘争方針 国公立大学学費値上げ阻止闘争 京大C戦線
沖縄への自衛隊派兵阻止に向けて
刑法改悪—保安処分粉碎

西成—釜の労働者の冬の闘い 反戦連合

国際共産主義運動講座 2 中国革命とわれわれ

レーニン研究会政治機関誌

ボルシェヴィズム通信

レーニン研究会政治機関誌

第 6 号

1972. 2. 10

目 次

2. 緊急アピール 1 「2. 11全関西大集会への圧倒的結集を訴える」 レーニン研
6. 緊急アピール 2 「うち続く不当弾圧・殺人罪適用策動粉碎！」 レーニン研反弾圧委員会
9. 主張 「1972年、ボルシェヴィズムの旗を掲げ、更に奮闘して、日本革命的左翼の危機をわれわれの力で突破しよう——昨年下半年の内外情勢の特徴と沖縄・三里塚諸闘争のいくつかの教訓——」
- 戦線報告・闘争方針
51. I 檄「京都での学費闘争の大爆発に続き、全国学費闘争に勝利せよ！」
—— 京大C戦線・全学戦線
53. II 「全国学費闘争を牽引し、学生戦線の混迷を克服する中から、ボルシェヴィキ派の革命的學生運動を構築しよう！——レーニンの學生運動論——」
65. III 「沖縄への自衛隊派兵実力阻止！
日帝の侵略反革命の最初の破産をかちとれ！」(上)
79. IV 西成一釜の労働者の闘い——反戦連合南大阪地区
82. V 「刑法改悪—保安処分粉碎！」
85. 国際共産主義運動講座 2
「中国革命とわれわれ」
第2章 「中国革命の原動力とコミンテルン」
高田 宏・山本次郎
104. ☑出獄にあたっての決意表明
7. 26三里塚闘争戦士

- ボルシェヴィズムの旗をかかげ「幼年期」の左翼反対派的政治を一掃して真の革命党を組織しよう！
- 大衆路線を活動の基礎とし、軍事路線を堅持し、両路線を支える鉄の団結をかちとろう！
- 社会主義と労働運動を結合して、資本主義的奴隷制度を廃絶しよう！

京都大学値上げ阻止全学闘争委員会連合の呼びかけによる

2-11 全国学費闘争勝利―自衛隊沖繩派兵実力阻止
集中的弾圧粉砕

△全関西大集会▽への圧倒的結集を訴える！

△レニ研究会▽

全関西、全国の労働者、学生、市民の諸君！

日本共産主義運動五十年目にあたる一九七二年は、全国一二〇学園における学費値上げ阻止闘争の大爆發で幕を切っておとした。昨秋、武装闘争と大衆路線を結合し、死を賭して闘い抜いた三里塚―沖繩闘争の成果で、無期限スト、バリケード封鎖等、あらゆる戦術でもって闘い抜かれていた。とりわけ関西の地においては、京大、同志社を先頭に多くの学園で闘いが組織され、同大決戦は大衆的実力闘争により機動隊を粉砕し、全国学費闘争勝利の地平を切り拓くであろう。我々は、各学園での闘いを一つに結実させ、六八年、六九年全国学園闘争―全共闘運動を上まわる、ポルシェウイキ派の革命的学学生運動の巨波を創出し、中小未組織労働者を中心とした鋭い力で、官公労、民間大企業労働者の闘いをも含む戦闘的、階級的労働運動の展開を「春闘」を中心

に、それ自身をのりこえて克ちとり、自衛隊沖繩派兵を実力阻止できる労学市民の統一した闘いと戦線を構築せねばならない。

日帝―佐藤政府は、昨秋、沖繩返還協定批准を、社共の議会主義への包摂と革命的左翼の暴力的封じ込めによって強行し、五月十五日沖繩返還―自衛隊沖繩派兵をもって、全面的アジア侵略反革命を遂行しようとしている。インドシナ革命戦争を先頭としたアジア人民の革命闘争を強行突破せんとする日帝―佐藤政府は、日米反革命同盟を再編強化しつつその体制を構築せんとしている。決定的な権力再編を、沖繩の侵略前線基地化、自衛隊の帝国主義軍隊としての完成としてなしきらんとする日帝―佐藤政府は、帝国主義労働運動の育成と社共の帝国主義への果しない屈服の強要、「法と秩序」、差別、分断支配による労働者人民の反革命的統合と、「国益・国防」イデオロギーと在日アジア人民に対する民族的抑圧をもってしての抑圧民族としての統合を、市民社会末端―中枢に貫徹せんとしている。更に労働者人民の闘いの要である革命党―そこに至らんとする革命的左翼、とりわけ最左翼に対する組織壊滅攻撃に完成させようとしている。

が、日帝―佐藤政府の企みは、市民社会のあらゆる所からの労働者人民の鋭い反撃にあっている。

三里塚農民は九・一六機動隊壊滅戦の成果を深くかみしめ、青行隊に対する弾圧をはねのけ、第一期工事粉砕の闘いに突き進んでいる。狭山差別裁判徹底糾弾、石川青年即時奪還の闘いは、二月結審のもくろみに対し部落人民を中心に広大に組織されている。三月、入管法案、外国人学校法案国会上程を控え、入管体制粉砕の闘いが社会深部から組織されようとしている。自衛隊の帝国主義軍隊としての完成に対する闘いは、叛軍―反基地闘争を軸にして着実に進んでいる。全国のあらゆる所で反公害の地域闘争が展開されている。刑法改正―保安処分粉砕の闘いは、患者、家族をまきこみ、大きく、三月法制審議会粉砕へと盛り上ろうとしている。

これらの闘いの一切は、日帝―佐藤政府の侵略―反革命―国内の権力再編の中心軸―自衛隊の沖繩派兵を絶

対阻止する闘いに集中させねばならない。沖縄人民は急速に誰が敵であり、何に向って闘わねばならないかを
把みとってきており、「日本軍」上陸をなにかなんでも阻止すると決意を新たにしてゐる。それ故にこそ、本
土労働者人民は派兵前段階で、自衛隊に対する徹底した闘いをいどまねばならない。社共の社会排外主義への
転化が労働者人民の前に全面的に暴露されるこの時にこそ、革命的左翼は広大な政治領域を獲得し、広範な人
民の怒りを組織し、大衆路線を堅持し、それと結合して大胆に武装闘争を展開せねばならない。

昨秋、三里塚―沖縄闘争の激動以降、権力の弾圧は、刑法改正―保安処分新設、破防法適用、フレームアッ
プ、デッチ上げ逮捕、長期拘留とますます露骨になつてゐる。革命的左翼、とりわけその最左翼を組織殲滅し
日本階級闘争から抹殺せんとしてゐる。そのスキをついて、自衛隊の沖縄派兵を強行せんとしてゐるのだ。権
力側の反動攻勢に対し、圧倒的な人民の力での反撃が準備されねばならない。政治的ヘゲモニーを労働者人民
の手にとりかえさねばならない。それを、革命的左翼、とりわけ最左翼の手によって実現せねばならない。

その為には、革命的左翼は様々な左翼反対派的体質を自ら揚棄し、世界革命の主戦場を帝国主義心臓部に
いて切り拓くべく、日本における蜂起―労働者権力の実現に向つて驀進せねばならない。とりわけ、最左翼に
存在するテロリズム、暴力主義への傾斜、事実上の経済主義への屈服の傾向を克服し、武装闘争と大衆路線を
統合。発展させる中から、地下労働者党建設をかちとらねばならない。その目的に向けた現在の重要な課題
として、昨年六月の全国全共闘、反戦の決定的崩壊以降の混乱と運動の分散化を、「一つの目的」に向かつて
系統的運動に組織し直さねばならない。暴力的党派闘争を、労働者人民に対する革命的左翼の政治指導の深化
拡大に敵対する形で強行せんとする傾向をのりこえ、最左翼を中軸とした反帝統一戦線の再編をかちとらねば
ならない。そのことによつて、革命的左翼のもとに結集する、あるいは結集せんとする様々な大衆団体、大衆
運動に対し、共産主義者として最も責任ある態度をとらねばならない。

二月一日、日帝―佐藤政府は「建国記念日」と称し、民族排外主義と「法と秩序」とで、日本労働者人民
を国家に従わせようとしてゐる。戦前の侵略戦争を美化し、国内の反革命的統合をファシズムに求心化してい
く一つの軸として「天皇制イデオロギー」の全面復活、靖国法案制定、民族教育の鼓舞、在日朝鮮人民に対す
る民族的抑圧の強化が急激に進行してゐる。我々は、イデオロギー論争、政治暴露にとどまることなく、日帝
―佐藤政府の侵略反革命に対決する諸戦線での闘いを結合し、インドシナ―中国―朝鮮を貫く赤い反帝統一戦
線と、合流せねばならない。

この間の反動攻勢の持続化のもと、自衛隊沖縄派兵を強行せんとする日帝―佐藤政府に対し、早急に、侵略
―抑圧―反革命に対決する一大反帝統一戦線を形成し、大衆的反撃を開始しよう。

目ざめつつあるプロレタリアートの全勢力と、日本の共産主義者の全勢力とを結合して、日本における生命
あるもの、誠実なものを引き寄せる単一の地下労働者党建設に向け前進しよう。

二月一日を、日本共産主義運動五〇年の歴史を賭し、七一年の死闘の成果で、日本革命勝利の一大金字塔
をうちたてる第一歩の日としよう。

全関西、全国の同志・友人諸君の圧倒的結集を訴える。

うち続く不当弾圧・殺人罪適用策動粉碎！

レーニン研 反彈圧委員会

- ⊗ 権力―政治警察による相次ぐ不当弾圧を許すな！
- ⊗ 事後逮捕・起訴・長期勾留の同志奪還のため、カンパの集中を！
- ⊗ 政治警察との闘いの為の思想的・組織的準備を前進させよ！

全国の同志諸君ノ 読者の皆さんノ

七一年の沖繩・三里塚を軸とする日帝心臓部の革命的労働者人民の闘いへの決起と、我がレーニン研究会の下に結集する先進的労働者・学生・高校生の断乎たる進撃の前に恐怖した敵―権力―政治警察は、「レーニン研をなげなんでも壊滅させる」を相言葉にして狂気の弾圧をかけてきている。

われわれは、一月五日の「一一／一九北大阪武装制圧闘争」を理由とした同志二名の不当事後逮捕―長期勾留に嚴重に抗議すると同時に、この間のわれわれレーニン研に対する弾圧を明らかにして、権力―政治警察の攻撃と断乎として闘い抜くことを宣言する。

七月の三里塚農民放送塔撤去実力阻止闘争を京学連の学友とともに全国の農労学の最先頭で闘った京大C戦線の同志に対して不当逮捕―起訴―長期勾留（四ヶ月）の弾圧を加えてきた。そして、六年間の闘いの全成果をかけて闘い抜いた九月三里塚第二次決戦の死闘に対し、マスコミを総動員して、デマ―フレイム・アップによって京大C戦線をはじめとする革命的左翼に対して「殺人者集団」キャンペーンを行ない、「殺人罪適用」の策動をおしすすめ、九／一六闘争の革命的意義を圧殺し、三里塚闘争の更なる発展を押しとどめんと、青行隊、先進的高校生延べ三六名（一月一八日現在）を不当に逮捕しさせた。また、権力のマスコミを駆使したデマ―フレイム・アップは、「朝霞自衛隊員殺害事件」、「成田―警視総監公舎爆破闘争」と関連させてわが会への弾圧を行ない、活動家の下宿への攻撃を不当にもかけてきている。

今や、インドシナ革命戦争の更なる勝利的前進、帝国主義支配の世界的動揺の中で、沖繩返還を軸にアジアへの侵略・反革命を遂行せんとする日帝にとって、国内の革命的左翼の闘いを圧殺する事は死活の問題となりつつある。打ち続く爆弾闘争、機動隊激滅戦に恐怖した権力―政治警察は、今までの赤軍派、京浜安保共闘に対する組織壊滅戦に加え、「爆発物取締罰則違反」等の名目で、赤軍派・京浜安保共闘、R.G.二六名を全国特別指名手配し、不動産屋、町内会をも動員して「アパートローラー作戦」を行なっている。また中核派に対しては、破防法適用、集会・デモの禁止等の不当弾圧を加えているのだ。更に逮捕者に対しては、昨年一二月より改悪された「被疑者留置規則」を適用し、拷問を行い、連日十時間を越す取り調べを行なって、自白を強要し、かつ、活動家の転向、抹殺を図っている。

本年一月の「公安三課」の新設、機動隊の増強、装備の強化、日本版「黒百人組」の組織化そして打ちつづく反革命の嵐を前にして、六〇年階級闘争の地平に舞い戻らんとする合法主義、日和見主義者や、大衆路線を忘却して権力の恫喝に屈してしまふ部分を革命的左翼の隊列から一掃しなければならぬ。組織に対する破防

法、個人に対する（新設されんとしている）保安処分を軸とする、日常的にかけられる権力―政治警察の狂気の弾圧に対して、われわれは、革命的警戒心をいついかなる時にも忘れることなく、「非合法」を語ることをもって事足りりとするロマン主義を排し、敵の壊滅攻撃に対する思想的、政治的、組織的準備を更に推し進めねばならないだろう。

全ての同志諸君！

烈火の階級闘争の坩堝の中で、自らを鋼鉄のごとき精神を有する、堅忍不拔の共産主義者へと高め上げよう！
大衆路線を活動の基礎とし、軍事路線を断乎堅持し、両路線を支える鉄の団結をかちとり、敵の全ゆる攻撃を打ち砕こう！

蜂起を組織する地下労働者党建設へ向けて前進しよう！

獄中で政治警察と断固とした闘いを展開している二同志を即時に奪還するため、全ての同志諸君、読者の皆さんが圧倒的なカンパを寄せられるよう訴えます。

カンパの送り先

京都市左京区東竹屋町京大熊野寮B棟三〇七

レニニ研

反弾圧委員会宛

主 張

『 1972年。ホルシェヴィズムの旗を掲げ、更に奮闘して、日本革命的左翼の危機をわれわれの力で突破しよう。』

——昨年下半期の内外情勢の特徴と沖繩・

三里塚諸闘争の幾つかの教訓 —— 』

目 次

はじめに

第一章 戦後世界体制を画期する激動せる内外情勢の特徴

第二章 昨秋沖繩・三里塚諸闘争に対する政治路線上の教訓

第三章 昨秋沖繩・三里塚闘争に対する軍事路線上の教訓

第四章 会組織の飛躍の革命的意義と直面した諸困難

第五章 誕生すべきホルシェヴィキ党の中核的組織としてふさわしい規律を確立しよう。

はじめに

一九七二年、われわれはこの年を日本革命運動と労働運動の発展の歴史の中で輝かしい画期的年とせねばならぬ。

一九七二年、この年は、六九年日米共同声明にもつき日米帝国主義によって沖縄施政権返還がなされんとする年であり、いよいよ日本人、否、全てのアジア人民に対する極めて猛猛な攻撃が加えられんとしている。

帝国主義の七十年代アジア反革命体制の基調の確立といえるこの七二年沖縄返還は、インドシナ侵略反革命戦争政策の破綻を象徴とする内外にわたる政治・経済危機をかかえこんだアメリカ帝国主義の七十年代世界反革命戦略の一環としてあり、又一方、日本帝国主義にとっては、戦後その下で延命し、復興してきた自己史の上に立って、日米帝国主義の「利害」対立の調節、アジア侵略反革命のどす黒い野望の足掛りとしてある。

七二年沖縄返還——これこそ、第二次世界大戦後帝国主義心臓部の「戦後革命」の挫折にもかかわらず着実に勝利していった中国、朝鮮革命の「精神」の直接的継承者、即ち、今日最大の貴重な犠牲を払って闘っているインドシナ三国人民を先頭とした国際プロレタリア革命、世界革命の新しい前進状況と、一方現代資本主義の寄生性と腐朽性の一層の深化、帝国主義諸列強間の矛盾の顕在化状況を見据えた日米帝国主義によるところの戦後支配体制の再編への指向であり、日本人、全てのアジア人民を血の海に引きつり込まんとする日米同盟のより侵略的反革命的なそれへの再編、強化の画策に他ならない。

日本帝国主義の今日の政治委員たる佐藤は、六五年八月、いみじくも「沖縄が帰ってこなければ、日本の戦後は終らない」と述べたが、然り、戦後世界体制は、今、音をたてて崩壊しつつあり、換言すれば、新しい「戦前」——勿論現在のわれわれは、その爆発の具略・反革命の挫折を闘いとするものとして展開されなければならないだろう。

更に又、一九七二年は、日本共産党が結成されてから丁度半世紀五十周年にあたる年である。

第一次帝国主義戦争の破局の中で遂にロシア革命が勝利し、そして世界労働者階級の解放闘争が未曾有の高揚をみせた時代、わが国では一千万人を越える民衆蜂起へと発展した「米騒動」や八幡製鉄所、川崎造船所等の労働者の大ストライキ、農民の小作争議と日本人の闘いが爆発したその時代、一九二二年七月十五日に、レーニンによって指導された世界革命の統一司令部——コミンテルンに援助されて日本共産党は創立されたのである。

日本共産党は、日本で最初のマルクス主義政党として、社会主義と労働運動を結合させるものとして結成され、当初から天皇制国家権力の強権的支配、警察、右翼の白色テロルや非道な弾圧の集中砲火を浴び、その内部から敗北主義者、変節者、日和見主義者を産み出したが、又、二七年テーゼ、三一年テーゼ、三二年テーゼのジグザグにあらわれたようにコミンテルン内部に流入したスターリン主義（アハーン主義）に対して何等の革命的批判とマルクス主義の原則によるその克服をなしえなかったが、にもかかわらず、日本で最も誠実で献身的な共産主義者、自覚せる労働者、革命戦士を結集していたといえる。

戦後革命の挫折と「五〇年分裂」を右翼的に「教訓」化し、日本共産主義運動の劣悪要因のみを集大成した代々木「共産党」の指導者どもは、それは、国際共産主義運動では、スターリン主義によつ

体的形態について予測出来ぬが、——が始まりつつある。

こうした激動し急展開する世界の只中に存在するわれわれは、敵と友と我の軍勢配置正しく見極め、自己の歴史的使命と階級的責務を自覚し、それぞれの部署につき戦闘を持続し発展させるため、昨年以上に奮起しよう。

特に、今春、自衛隊の沖縄派兵、日本帝国主義軍隊の沖縄人民に対する再度の「蹂躪」が画策されているが、これに対してわれわれは、自衛隊沖縄派兵阻止闘争を、本年の全人民政治課題の重大な柱の一つとして設定し、爆発しつつある学生の全国学費値上げ阻止闘争、燃えあがる労働者人民の種々多様な闘いと共に、断固その闘いを組織化し、その最先頭で闘いぬき沖縄人民と共に、日本列島を「派兵阻止」闘争でもって掃がせねばならない。

インドシナの労働者、農民、革命的知識人は、自己の思想と肉体でもって、人類史上最強の帝国主義を窮地に追いこめ、その七十年代世界反革命戦略——ニクソン・ドクトリンの一角たる「ベトナム化政策」を破綻させんとしているではないか。

又、中国政府と中国共産党も、手直されたニクソン・ドクトリンの狙い、アメリカ帝国主義とニクソン政府の「米中関係正常化」「対中接近」の欺瞞性と反動性を、曇りなく指摘しているではないか。

ベトナム、インドシナの共産主義者と人民が歩んで来た茨の道を日本のわれわれが決して歩めぬはずはない。

七二年自衛隊沖縄派兵阻止闘争を中心とする沖縄闘争は、日米反革命同盟の再編、強化と全面対決し、帝国主義心臓部におけるニクソン・ドクトリンの破綻を又、乗り出した日本帝国主義のアジア侵

てその成長を育まれ、「モスクワ宣言」「モスクワ声明」によってほぼ成文化された現代修正主義、社会帝国主義潮流の日本版といえるのだが——自らの日本共産主義運動に対する裏切りには全くはおかむりして、厚顔無恥にも「党創立五〇周年の記念日をむかえるにあたって、われわれは、この日を、わが党の革命的伝統を継承、発展させるとともに、歴史によってためされた、労働者階級の前衛党であると同時に『民族と国民の党』（国民政党?!——論者）であるわが党の姿をいっそう広範な人びとにしめし、半世紀の闘争をつうじて到達した歴史的成果を基礎に、七〇年代の任務をなすとけるのにふさわしいあらたな躍進をめざす記念日としなければならぬ」（七一年八月二〇日中央幹部会決定）などと主張している。

ベルンシュタインほどマルクス主義を論難する程の勇氣のない代々木「共産党」は、巧妙にもマルクス主義の言葉でもって——もつとも最近では「アロ独」や「人民」なる「危険思想」をあらわす言葉は放棄しつつあるが——米の歴史における今日の代々木「共産党」の動向で注目すべきなのは、革命論の核心的諸点で、やはり半世紀近い日本合法マルクス主義の「革命的伝統」、正しく言えば、戦前は天皇制国家権力の専制的支配への思想的実践的屈服、戦後は社会党左派、左翼社民二体制内左翼としての首尾一貫した日和見主義的伝統を「誇る」労働派・協会派「マルクス主義」の主張にはほぼ同質化し、その事によって、彼等の日本共産主義運動の歴史の右翼日和見主義的歪曲し偽造、敗北主義者の居直りの総括を許容していることである。（米脱落 四八頁）

世界革命の統一司令部、新しいコミンテルンを闘い取ることを放棄し、それどころか「統一司令部」一般に反対し、各国共産主義者の

相互不干渉までプロレタリア国際主義を墮落させた代々木「共産党」の「自主独立論」は、既に数十年も以前に、日本合法マルクス主義者が、右翼日和見主義の問題意識からとり続けてきた反コミンテルンの態度と軌を一にするものである。

「筋金入り」の合法マルクス主義者は、今日では、代々木「共産党」の「国会を通じての平和革命論」に対して左人と、先輩として次の教えを垂れるのである。

「日本共産党は、平和革命≠非流血革命（一滴の血も流れないと云う意味の）と、単純に理解しているのである。平和革命といえども、それは武装蜂起によらないだけで、労働者階級を中心とする労働階層の組織された力の行使であることにはかわりはない。だから集会やデモやストライキなどのような大衆運動の場におけるトラブルや多少の流血は十分ありうるし、革命政府樹立後の「民主主義的警察」による新しい社会秩序の防衛の際もまた、一滴の血も流れないという保障はない。

このような事態を一切予想しない国家権力の平和的移行を想定すれば、それは、『話し合い』による議会的な政権獲得の道でしかなくなる。そして、この道は、社会主義革命には永久にいきつかないう道なのである。『反共宣伝を粉碎する』つもりで、革命まで粉碎してしまふ危険性を『決議』は内包しているといわざるをえない。』（「大系国家独占資本主義⑧」と）。

「コミンテルンは、(1)暴力革命をあらゆる国における国家権力の移行方法として規定したこと、(2)プロレタリアート独裁の実践的形態をソヴェト形態にかざったこと、(3)世界社会主義革命をコミンテルン傘下各国共産党支部がコミンテルンの指導のもとにソヴェト

白色テロルの暴虐の嵐の中でも、共産主義の赤旗を守りぬき、日本帝国主義の強盗戦争を弾劾し、飢えと悲惨の中で、労働者、勤労大衆の利益を擁護し、その解放の為に身を賭して闘った誠実な有名無名の革命戦士達の理論的実践的苦闘の全遺産の継承者でなければならぬ。又、そのように必らず生長せねばならぬ。

日本革命的左翼こそ、国際的には、五六年スターリン批判、「ハンガリー事件」とつきつぎにスターリン主義の神話が崩壊し、しかも、各国共産党既成指導部が「スターリン批判」と称しつつ、スターリン主義を継承し、いよいよ右翼日和見主義、修正主義に純化せんとしたそのどす黒い逆流に抗して、それと対決し、マルクス主義の革命的原則と、ロシア革命と世界プロレタリア革命の指導精神であるレーニン主義の復権を闘い取らんとするものとして誕生したのであり、国内的には、四五年十二月日本共産党第四回大会採択の「世界解放の軍隊としての連合国軍」規定、更に、「発展した」翌四六年第五回大会の「占領下平和革命論」、それに対する五〇年コミンフォルム批判、アメリカ帝国主義の弾圧の強化ときびしい分派闘争、中国革命の機械的輸入による五一年綱領とそれにもとづく武装闘争の挫折等々こころした日本共産党指導部のジグザグは、戦後革命を悔めて挫折させ、日本共産主義運動を決定的に弱体化させたが更にその上に五五年六全協やソ連共産党二〇回大会、フルシチョフ主義に影響された五八年「七回大会報告」「党章草案」で、右翼日和見主義と修正主義を完成させんとした日本共産主義運動の既成指導部に対する左翼的批判者として、革命的分派として、誕生したのである。

勿論、今日、われわれが過去の幾つかの文書で整理してきたより

共和国をつぎつぎに樹立し、最終的に国際ソヴェト共和国を創立することによって達成できるとしたこと、(4)議会に関するテーゼにみられるようにブルジョア議会をブルジョア独裁の単なる粉飾形態としてとらえたこと、(5)真の革命主体を形成するために第二インターナショナル系の運動を徹底的に排撃したこと、などの点にその特徴をもつということができよう。これらの特徴は、基本的には、コミンテルンがレーニンの理論を指導理論とし、十月革命の経験の総括のなから創設されたことに由来するものであるが、同時に、当時のヨーロッパにおける革命運動の発展状況に大きく規定されているといえる。すでにみたように、……十月革命の経験を不当に一般化したり、先験的にソヴェト運動をおしつたりしたことの結果ではないのである。その意味では、ソヴェト運動が退潮したばかりにはそれぞれの特長での歴史的、社会的条件にもっとも適合した別の運動が追求され、プロレタリアート独裁の実践的形態も別の形態をとることがあろうというのはいまことに当然のことであるといつてよいであろう。——この反マルクス主義、反レーニン主義の意図に満ち溢れた言葉は、伝統的な体制内左翼、労働派—協会派の数十年間にもわたる一貫した主張なのだが、もしこれだけを読むならば、この主張と赤旗「四・二九論文」等の今日の代々木「共産党」の主張と区別するは極めて困難なことであろう。

労働派—協会派の合法マルクス主義潮流は問題外として、今日、確実に議会議政党、国民政党内に純化し、社会排外主義、社会帝国主義の道を進む代々木「共産党」も、如何なる点においても、決して日本共産主義運動の革命的伝統の継承者ではない。

日本革命的左翼こそ、天皇制国家権力の執拗な血の弾圧、拷問、

に、その理論的、実践的未熟性、自然成長的な狭い階層、特に学生インテリ層に依拠した運動特有の若干の主観主義的、左翼反対派的政治を指摘しうるが、しかし、六〇年安保闘争以来の日本階級闘争を先頭で牽引してきた潮流は革命的左翼以外一切存在しなかつたこと、又、五八年「七回大会報告」「党章草案」で原型を与えられ、六一年八回大会で採択された現綱領に基づく代々木「共産党」がいよいよ議会議政に純化し、日本革命運動と労働運動の発展にとって反動的役割を果していることを見るならば、日本革命的左翼結成の根本的趣旨の極めて革命的な意義は明白である。

たとえ、新左翼でありえても、既に革命的左翼から脱落した革命マル派は、七一年十二月「解放」紙上の「ハンガリー革命十五周年論文」で自己暴露したように、新左翼運動の出発の根本的趣旨を、スターリン批判、ハンガリー革命を直接的契機とし、ロシア革命を突破口とする世界革命の永続的勝利を、スターリン主義とその後継者による世界革命運動の歪曲に抗して、如何に闘いとるかとして扱えないで、単なる「反スタ運動」一般に押しとどめようとしている点においても彼等は極めて反動的である。

又、後進資本主義国の帝国主義段階への推転の際、独占資本の強蓄積は、農村の封建的諸関係を、後進的遺制として利用しながらなされるという宇野学派の一定の問題提起をもつて、ただちに、講座派と労働派の論争はのりこえたなどと恥しげもなく、称する黒寛の態度（『資本論以後百年』）にも、彼が如何に、労働派学者も驚く程の革命論と密接不可分の国家論、階級分折と権力規定がすっぱりぬけ落ちた経済主義者であるか、実践上の日和見主義者であるかを伺うことができる。

一方、日共八回大会綱領を正しいと規定する日共左派を中心とする、毛沢東主義潮流、日本におけるマルクス主義の革命的原理を持たず、スターリン・コミンテルンの誤った指導と闘い、中国革命を勝利に導き、現代修正主義と対決し、コミンテルンの左翼的総括をなさんとする中国共産主義者のあの革命的気概をも持ち合わせず、そして何よりも自分の頭を自分の肩でかつごとくしなさいこの潮流が将来の日本革命運動の担い手に生長しえなさいのは明白であるし、更に、今日革命的左翼に一応合流はしたが、過去一度たりとも理論的実践的闘いを通して日本階級闘争の新局面を切り開いたことのない旧フルシチョフ、トリアッチ主義、構改派の一潮流も全く同様である。

又、分断された戦線で闘いつづけている労働者、先進的活動家は労働者自立派の革協や、インテリ自立派の叛旗派等の経済主義、無政府主義潮流にも一切の幻想を持ち合せてはいないに相違ない。

こうした日本左翼戦線の現況の中で、われわれは、革命的左翼存立の根本的趣旨に立脚し、その革命的伝統を継承し、そこに流入した小ブル主観主義とねばり強く、且つ一歩たりとも譲歩することなく闘いぬき、ボルシェヴィズムを勝利させねばならない。

日本革命的左翼内部での口先きだけでない真正正路のボルシェヴィズムの勝利のための闘いと、全戦線での代々木「共産党」との思想的政治的組織的闘いとを更に強化し、革命闘争の烈火の中で打ち鍛えられた日本労働者階級の真の前衛党を組織しよう。

一九七二年こそ、その確実な第一歩を踏み出す年だ。

一九七二年初頭において、全会員が、以上の七二年の歴史的意義とわれわれの任務を特に、自覚し、一九七二年とって頑張ろう！

左点にわたって、自ら、その「未完成」を指摘し得る。

にもかかわらず、「若さ」が、精神上、肉体上の「未完成」でもって、決して「病氣」たりえないと同様、それは、ならわれわれの「危機」ではなす。

社共の帝国主義への屈服、体制内化が雪崩をうって進行し、その指導の下で日本階級闘争が押しとどめられ、その発展が阻害されている現実——にもかかわらず、革命的左翼が、日本労働者階級、全ての自覚せる労働者、活動家に対し、その進むべき道を正しく指し示しているとは毛頭言い難く、それどころか、いよいよ混乱と混迷を深め、革マル主義や自立主義の反ボルシェヴィズムの流入を許してしまっている、そして、そのことが又、代々木「共産党」、宮本をして半世紀にわたる日本共産主義運動の革命的伝統の継承者である等という僭称を許容してしまっている現実——こうした現実が、直接に、日本革命運動の今日的危機を意味しているのではない。

では、真の危機とは何か。

それは、こうした現実を、真に否定すべきそれ、克服すべきそれとして把え、かかる現実を招来させた歴史的背景、その根拠をマルクス主義的に搜り出し、七〇年代日本階級闘争の進撃のための跳躍台として教訓化せんとする人間、政治組織が絶無といえる状態にあること、これこそが、今日の日本革命運動の危機に他ならない。

一九七二年こそ、必らず日本革命運動、革命的左翼の今日の危機閉塞状況を打破し、ボルシェヴィズムの勝利へ道を獲得する年とせねばならぬ。

そして、この下に、今、全国到る所で爆発しつつある資本主義的奴隸制への労働者人民の憤激を組織化し、その不退転の闘いによつ

ところで、昨年七月から十二月迄の六ヶ月間の内外情勢の戦後世界体制を画期する激しい展開の中で、わが会的情勢把握の正確さ、革命の全局を指導せんとする意識性、綱領的立場にもとづく政治・組織路線の正しさは、あらゆる側面から明らかになっている。

特に、昨秋、日本革命的左翼の陣営に、主観主義、日和見主義が蔓延し、「無原則性」が「党派性」として大手を振ってまかり通り諸党派の組織的指導力が弱体化しているという日本革命運動の悲しむべき現実の真只中で、われわれが、例え未だ極めて小さな一歩であるとしても、確実に勝利への道を歩み始めていることは、大いに誇るべきことである。

三里塚現闘活動、武装せる三里塚農民と連帯して闘われた七月農民放送塔、地下壕死守戦、五年有余にわたる三里塚闘争の一大決戦であり、そして英雄的精神、創意工夫、武器の三つを正しく結合するならば、機動隊を殲滅し得る確信と勇気を日本人に与えた第二次取用阻止闘争、騒乱罪適用体制に抗して断固として闘いぬかれた十ノ八闘争、沖縄人民と連帯し、御堂筋を炎で埋めつくした十一ノ一九沖縄闘争、医療労働運動、医学生運動への取りくみ、又、資本・権力の暴力的圧殺の策動に屈することなく、労働者の当然の生活と権利の為に火の出るような闘いを続けている平和台病院や全港灣関西地本建設支部の戦闘的労働者の仲間と団結した闘い等々、更に又、幾つかの重要な地方、地区での会組織の確立の為の準備、新しい政治領域での活動の確立の為の準備、新しい政治領域での活動の着手、これ等は、昨年下半年期におけるわが会の思想的政治的深化、組織的前進を、はっきりと物語っている。

勿論、われわれは「異常」といえる程「若さ」組織であり、様々

で、「沖縄返還」を踏み台として画策されつつある、より侵略的、反革命的に再編された日米同盟の新段階の下での日本帝国主義のアジア侵略、反革命のどす黒い野望に決定的痛打を浴せねばならぬ。

そして、わが国におけるこのボルシェヴィズムに指導された労働者人民の烈火の闘いの前進は、間違ひなく、いよいよ勝利への地歩を固めたインドシナ人民、アジアを中心とした旧植民地国、半植民地国人民の反帝民族革命の解放の雄叫びに呼応した帝国主義心臓部のプロレタリアートの永続的反乱の世界史的序幕として表われるに相違ない。

これこそが、現代修正主義者、日和見主義者、日本における社共や革マル等が、絶対に否認せんとする七〇年代階級闘争の基調であり、一九一七年ロシア革命を突破口に切り開かれた、人間が人間を搾取し抑圧することのない世界、共産主義の勝利に向っての過渡期——世界——その世界は、労働者陣営からいえば一九二〇年代後半から五〇年代前半にわたるマルクス主義の革命の原則なきスターリン主義のジグザグ路線、コミンテルンの変質、及びそれによって成長の道を開かれた現代修正主義、社会帝国主義によって少なからず無残な姿をとったが——「戦争と革命の時代」の真の基調なのである。

われわれの任務は明白である。会員一人一人の「革命の現実性」の確信とそれへの情熱、そして会組織の鉄のような固い団結でもって、信じられない程の困難にもかかわらずあらゆる戦線でボルシェヴィズムの勝利のために闘いをねばり強く着実に推進しぬぎ、来るべき日本革命の大会戦、内戦の勝利のために、最も意識的に党と階級を配置せねばならぬ。

これが勝利への道だ！

「一步一步勝利するということを知れば、究極の目的についての確固さと具体的な現実の動きを観察するうえで、の明敏さとを正しく統一することが出来る。それは原則性と政策上の柔軟性を弁証法的に結合する芸術である。」

またそれは、漸次性から飛躍への発展の法則を革命的指導の過程に運用することである」。(レ・ズアン「ベトナム革命の基本問題と主要任務」)

第一章 戦後世界体制を画期する激動 せる内外情勢の特徴

昨年下半年の重大な情勢の展開は、昨年ニクソン訪中計画、新経済政策の発表直後のわれわれの主張、情勢把握(「米中会談」)をめぐる新しい世界革命の前進と日帝心臓部における我々の重大な任務「ボル通五号」掲載の正確さ、鋭さを証明したが、その後の諸事件、世界革命運動の前進と沖縄・三里塚闘争を中心とした昨秋期の爆発した日本階級闘争の経験をも加えて、国内情勢、国際情勢の重要な特徴を次の七項目に整理してみよう。

I 国内情勢

① 爆発した昨秋沖縄・三里塚諸闘争と日本階級闘争の特徴として佐藤政府・自民党は、沖縄、本土人民の反対の声と反対運動を全く無視して、十一月十七日衆院特別委で沖縄返還協定を打ち切り採決し、十二月二三日の参院本会議でそれは可決、承認され、又

沖縄関連法案も同月三十日成立してしまつた。

だが、五・一九ゼネストを上回る約十万人の参加者によって闘われた一・一〇沖縄全島ゼネストや本土の革命的左翼に領導された一・一四、一・一九首都、関西の沖縄闘争を先頭にして沖縄返還協定粉碎闘争が全国に波及して展開され、その闘いは「機動隊殲滅」を合言葉にしたその闘いの尖端部の非和解性においても、又、社共の議会議議の指導によってその戦闘的展開こそ押しとどめられたが十九日の二十万人の大衆行動、四四単産ストにあらわれたようにその大衆性においても、画期的な闘いであり、更に、沖縄闘争の序幕を切り、機動隊に血の鉄槌を下した三里塚農民と支援労働者、学生の大闘争による三里塚第二次収用阻止闘争、一連の爆弾闘争やテロル戦、又、国鉄労働者のマル生粉砕の闘い、関西を中心として中小未組織労働者の執拗な闘い、水俣病補償をめぐる反公害闘争等の労働者、農民、学生の大闘争をみれば、——たしかに、④でみるように、革命的左翼の小ブル主観主義の開化、反帝統一戦線の崩壊、運動全体の細分化、分散化、孤立化等の「指導の危機」はいよいよ顕在化したのだが——昂揚は、日米帝国主義者の日米同盟のより侵略的革命的再編・強化にかける反動的野望に強力な打撃を与え、特に、米帝と結託し、アジア侵略・反革命の道を進む日本帝国主義とその政治委員会・佐藤政府に一大痛打を浴びせたと云える。

戦後世界体制の崩壊の開始、内外にわたる政治的経済的危機の深化の中で強行される日本帝国主義のアジア侵略・反革命の道は、国内では、ほんの一握りの独占資本家の更なる特権的利益の確立、労働者、勤労大衆からの搾取と収奪の強化、生活破壊、強盗戦争への徴は次の様に要約できるだろう。

④ 沖縄返還協定反対の声の中で動揺した佐藤政府・自民党に助け船を出し、協定衆院通過に一役買った公明党、民社党は論外として社共も議院内茶番に手をかし、「強行採決」への態度にあらわれたように、彼等が六〇年安保闘争以来のこの十年間に如何に右傾化、体制内化し、労働者階級を裏切りとしていたのかを、全人民の前に自ら暴露したこと。(③参照)

② 更には、残念なことだが、特に六月全国反戦、全国全共闘(八派共闘)の分解以降、革命的左翼陣営内部に原則なき内ゲバの顔発にあらわれたように日和見主義、主観主義が流入し、昨秋後半期顕著になったことだが、二派にしても、四派にしてもその集会和デモは縮小再生産され、末端の運動では、更に細分化され、この数年間の日本階級闘争で重要な位置を占めた反帝統一戦線がほぼ崩壊したことである。

その上に、日本革命運動と労働運動の発展の利益を厳格に擁護し日本階級闘争の進むべき道を一貫して指し示す真のボルシェヴィキ的前衛の登場が、真面目な活動家によって希求されながらも未熟であり、こうした現状に即的に反撥する部分があり、反前衛主義——無政府主義、経済主義への傾斜を深めつつあることである。

又、七月、九月三里塚闘争で明らかになったが、既に革命的左翼から逃亡し、革命的闘いに常に背後から誹謗中傷し、闘いの成果を右翼的に収約してきた革マル派も、大衆的動力力は急速に低下しつつあるが、特に、彼等がその危機を革命的左翼への反革命的暴力的襲撃の強化に転化しつつあることは見のがせない。(④参照)

② 更に、残念なことだが、特に六月全国反戦、全国全共闘(八派共闘)の分解以降、革命的左翼陣営内部に原則なき内ゲバの顔発にあらわれたように日和見主義、主観主義が流入し、昨秋後半期顕著になったことだが、二派にしても、四派にしてもその集会和デモは縮小再生産され、末端の運動では、更に細分化され、この数年間の日本階級闘争で重要な位置を占めた反帝統一戦線がほぼ崩壊したことである。

その上に、日本革命運動と労働運動の発展の利益を厳格に擁護し日本階級闘争の進むべき道を一貫して指し示す真のボルシェヴィキ的

前衛の登場が、真面目な活動家によって希求されながらも未熟であり、こうした現状に即的に反撥する部分があり、反前衛主義——無政府主義、経済主義への傾斜を深めつつあることである。

又、七月、九月三里塚闘争で明らかになったが、既に革命的左翼から逃亡し、革命的闘いに常に背後から誹謗中傷し、闘いの成果を右翼的に収約してきた革マル派も、大衆的動力力は急速に低下しつつあるが、特に、彼等がその危機を革命的左翼への反革命的暴力的襲撃の強化に転化しつつあることは見のがせない。(④参照)

④ ところが、「指導の危機」の頭在化にもかかわらず、日本帝国主義の露骨な反動的攻撃に抗して、いよいよ極めて根の深い大衆的憤激が工場、職場、労働者街や又農村、学園、社会のあらゆる領域から形成されつつあり、今後衰える傾向はみられないこと。

昨秋の沖繩闘争の山をこした十二月の首都圏では、二派集会、四派集会を合計しても数千人規模であったが、これ以外に、所謂「ノンセクト」といわれる活動家、自己を反代々木・革マル、革命的左翼と自覚する活動家の数は、二派集会、四派集会の合計の数倍はいると推測されるし、こうした現象は、全国到る所で存在しており、しかも、この数年間に顕著になってきた現象である。

農民や漁民の反基地、反公害闘争、様々な市民運動、労働組合運動、部落解放運動、入管闘争などの労働者人民の闘いの多くは、確固たる共産主義政党との結合、指導もなく、自発的に担われておりしかも重要なものは、少しでもその闘いが前進し、例えば、警察や民間右翼、暴力団と衝突でも起れば、直ちに社会党や共産党の議会主義、体制内的本質を見抜き、それへの幻想を棄て、潜在的ではあるが、われわれとの結合を求めんとしていることを共通の特徴としてゐるのである。(④ 参照)

われわれの手のとどかぬ所で、労働者、勤労大衆の資本主義的奴隷制への、日本帝国主義とその政府への怒りは高まりつつある。

② 日本帝国主義の経済的、政治的動向について。

アジア階級情勢の急展開とアメリカ帝国主義の世界反革命戦略の手直しの下での沖繩返還を目前にした日本帝国主義の動向とその「政府危機」の特殊な性格についての政治的側面を中心とする分析は、「ボル通、第五号、主張」でなされているので、ここでは、昨年下半年、拡大を計らんとするだろう。

こうした中で、十二月九日粗綱不況カルテルが公取委で認可され、それに続いて石油化学、繊維、紙・パルプ業界も不況カルテル結成へと動き出している。

③ 更に、日本資本主義は、永続的を矛盾を孕んだ対米輸出の維持・拡大へ努力するとともに、一方で当然にもアジア諸国への進出の拡大をはかるだろう。しかも、日本資本主義は、ニクソン・ドクトリンやニクソン「新経済政策」のアジア諸国へのドル援助削減、日本への肩代り要求に後押しされ、又、アジア反共諸国がいよいよ対日依存を増すことによりことに日本資本主義の死括問題である海外資源確保のためにも、又、反共政権へのテコ入れのためにも円援助を通じて円ブロック形成の動向を経済的、政治的侵略を一層強めるに相違ない。そしてこの過程は、世界最強の帝国主義ですら失敗した役割を、日本帝国主義が担っていくものであり、日本帝国主義はますます対外的危機を累積させるだろう。

④ 更に、アジア反共諸国の政治的不安定、中小企業問題、農業問題の未解決な日本のその地域への大幅出超によって、日本資本主義は一方で中国市場への指向も強めるだろう。

その上、アメリカ帝国主義の对中国政策の転換、中国政府承認の国際的動き、しかも、その動きに對抗して、独自の对中国政策を展開する能力を日本帝国主義は持ちあわせていないという現実によつて、右の指向は更に拍車がかかけられるだろう。

事実、昨秋中国国連加盟の決定後、雪崩れをうって財界の日中貿易四原則の受入れが常識化しつつあり、既に新日本製鉄、日立製所等をも受入れた。

半期、いよいよ明らかになつたわれわれの敵の動向を、経済的側面を中心にして、その特徴をあげてみよう。

昨年八月のIMF体制の事実上の崩壊といえるドル防衛政策を契機とする国際通貨危機の再燃は、帝国主義諸国間の公然隠然の激しい闘いを経て、一応、十二月十七日ワシントン会議で妥協点に到達し、日米関係では、一ドル＝三〇八角、円の一六・八パーセントの大幅切り上げとドルの七・六パーセントの切り下げが決定された。既に指摘してきたように、国際通貨危機の爆発は、各国資本主義経済の持続的拡大と不均等発展に大きな基礎をおいた各国国際収支の不均衡の拡大であり、世界資本主義は国際基軸通貨としてふさわしい力を持った一國通貨を失った以上、昨年十二月は一応妥協点はみつかったが、今後永続的に、常に変動を余儀なくされる各国の国内経済的諸関係の基準としての通貨調整という解決不可能な問題をかかえこんだといえる。

こうした情勢は、日本帝国主義、日本資本主義のさし当って動向に如何なる影響を与えるだろうか。

① それはまず、日米間の個別利害の対立は、円大幅切り上げをみたように、戦後の特殊性として世界資本主義の統一市場の維持は各国資本主義にとって至上命令であり、事実、日本にとってアメリカ市場は全輸出市場中約三〇パーセントをしめている故に、三〇年代のように直ちに市場分断、ブロック化として進行せず、日本資本主義は、必死で六〇年代後半の独占企業の強大化、中小零細企業の徹底整理、農村の分解、労働者人民からの搾取、収奪の強化、首切り合理化攻撃、労働運動の右翼的再編成を更に押し進め、重化学工業重点の国内経済体制の確立でもって、重化学工業製品の対米輸出

こうしたことを考慮するなら、日本帝国主義とその政府の对中国政策を中心としたアジア外交政策は、極めて偽善的な二面政策として展開されると判断できる。

彼等は、昨秋自民党内親中派の「反佐藤」への活発な動きにみられたように今後、台湾問題の取り扱いをめぐって一層混乱を深めるだろうが、しかし、一方では、「日中友好」ムードを振り撒き、小平平和主義的野党を抱込みつつ、現実には、沖繩返還協定成立への自民党の「閉結」にあらわれたように沖繩を侵略・反革命の前線基地として日「韓」台反革命体制を、特に日「韓」反革命体制を死命線とし、着々と強化していくに相違ない。

最後に、昨秋、自己の七〇年代危機の性格、日本階級闘争の国際的拘束性に自覚的であった日本帝国主義ブルジョアジー主流は、国際情勢の急展開と日本階級闘争の激化による乗り出した侵略・反革命路線と国内動員体制の確立の歴史的試練を、反主流をうまわる包括的政治をもつて、また、野党諸政党を沖繩の上からの国民統合帝国主義民族への統合へ思想的に屈服させ議会的体制内の反対派の地位へおしこめることにより、社共の影響力から解放された激化しつつある階級闘争と結合し始めた革命的左翼の組織遺滅、その運動の暴力的圧殺に全力集中して乗り切ったといえるだろう。

③ 議会内茶番劇に加担した社共と、露呈させたその反動的な本質

ところで、昨秋期の「労働者陣営」はどうだったろうか。

アメリカ帝国主義と結託し、いよいよ大きな矛盾を孕みながらもその基調でもってアジア侵略・反革命をなすきらんとする日本帝国主義、戦後史を画期する情勢の急展開の中で、ブルジョア・マスコミからもその無能ぶりを指摘され、動搖を続けた佐藤政府、この日

本労働者階級の当面の最も主要な敵に対して、何等の打撃を与えるどころか、沖繩返還協定粉砕闘争の戦闘的大衆的昂揚に恐れ、敵のうす汚れた野望に協力の手をさしのべたのが民社党、公明党であり一方、それに一定の反撥を示しながらも、「議院内多数派」によだれを流して、労働者人民の敵の策動に対する激しい怒りを「整然たるデモ」で抑圧しつつ歪曲し、議院内茶番劇に加担したのが社会党共産党である。

昨秋期の野党諸政の振舞いこそ、今日の社会諸階級の動向を見事に代表するものであり、それだけではなく来るべき革命か反革命かの時代において彼等がそれぞれパレードのどのあたりの地点でろうろするかを暗示するものであった。

民社党、公明党はどうであったか。

十一月十七日、沖繩問題だけでなく、日中問題、通貨問題、織維問題等の山積みされた「難題」をかかえこんだ政府・自民党は、衆院特別委員会でも不当にも沖繩返還協定を抜き打ち強行採決にもちこんだが、それに対する抗議の「佐藤打倒」の大衆闘争が昂揚し、自民党内の若手議員を中心として反佐藤の動きが活発化するや、政府・自民党主流派は、社公民共闘を切り崩しにかかった。

そして、民社党と公明党は「自民の強行採決は民主主義のルールを踏みにじる暴挙であり、わが党は強く抗議しその撤回を求める。……わが党は協定の本会議通過ならびに残余の関連法案の衆院通過を阻止し、同時に佐藤内閣打倒を徹底的に推進する。」（公明党大野国対委員長談話）などという舌の根のかわかぬ内に、「非核兵器ならびに米軍基地縮小決議案」の決議なる船田議長幹旋案に抱きこまれ、二四日衆院本会議で何事もなく沖繩返還協定は可決されたので

「野党再編成」の中で引き裂かれ危機的状況にある社会党は、沖繩闘争の初めから党内危機の隠蔽、折衷方針として、院内、社公民共闘、院外、社共共闘として決定しており、社公民共闘があつさり議長幹旋によって切り崩されるや、ならなすすもなく立ち振舞っていただけである。

又、「わが党は、すでに、民族民主統一戦線勢力が国会で多数を占めて平和的、合法的に人民の政府をつくることをめざすことをあきらかにしている。」（十一回大会決議）という主張でも明らかでない、いよいよ完全な議会議案主義政党へと純化した代々木「共産党」は、中国共産党の修正主義ぶりを激しく批難されている故に、昨秋佐藤政府を播ぶつた「日中問題」については、乗り気ではなく「もっとも重要なものは、沖繩協定反対……」（五中総）とぼやきつつ、社公民共闘追求の動揺しつつ社会党にとりすがって「反共『野党再編』か、それとも革新統一戦線か……」（五中総）と迫りそして、社共首をそろえて沖繩返還協定衆院通過を拱手傍観していたの周知のとおりである。

院外社共共闘の大衆行動でも、六〇年安保闘争の国会を包囲した戦闘的デモとは問題にならぬ程のお焼香デモの連続に対して、「これじゃ、佐藤は倒れぬ」という戦闘的労働者の当然の声に社共は一貫して冷水をかけ、資本主義的奴隷制が不可避に産み出すこうした矛盾の解決の方策をなにか議院内のみあるかのような幻想を労働者人民に撒き散らしたという意味で、彼等は昨秋議院内茶番劇に全面加担し、現在のブルジョア独裁の粉飾形態として機能している議会を更に神聖化させその独裁に協力しているという意味では極めて反動的に立ち振舞ったのである。

ある。

こうした彼等の振舞いは、彼等の掲げる「民主社会主義」や「人間性社会主義」が反動的な社会主義に他ならないことを示して余りある。

彼等及び、それにとみに同調しつつある江田派を中心とした社会党（右派）の共闘、社公民共闘なるものは、同盟、I M P・J C等の「労資協調」「合理化」「賃金上昇賛成」「アジアの繁栄」日本の繁栄を旨とする帝国主義的労働運動や、民間運動の空洞化と右翼的再編成の実質的担い手である労働貴族、労働官僚——その正体は独占資本に買収された「資本家の手代」である——に、その主要な社会的基礎を置くものである。

彼等は、ただただ如何に資本家に労働力を高く売りつけるか、如何に帝国主義心臓部で「特権的地位」にありつくか、といった限りで、反政府、反資本のポーズを取るが、われわれは、この社公民共闘を、公然たる社会排外主義、社会帝国主義（口先だけの社会主義実践上の帝国主義との城内平和）と規定してよい。

第一次大戦後、偉大な革命家、カール・リープクネヒト、ローザ・ルクセンブルクの虐殺の、ドイツプロレタリア革命の絞殺の下手人は、ドイツ社会民主党员、「社会主義者」のノスケであった歴史を忘れるべきではない。

いや、身近かな所では、昨年、水俣病公害患者によるチツソ資本への「ささやかな」抗議行動に対して、非道な暴力的襲撃をかけ、チツソ資本の防衛に狂奔したあの労働貴族、労働官僚の血走つた眼を想起すべきだ。

では、社会党、共産党はどうであったか。

われわれは、特に日本共産主義運動の革命的伝統の継承者であり、マルクス主義政党だと自称し、且つ、実践的には反動的な状況下「共産党」との思想的組織的闘い、彼等の影響から労働者人民を解放す闘いの任務を決して過小評価してはならぬが、しかし一部にある「社会ファシズム論」のスターリンも驚くような「社共」反革命なる規定は、正確でなく、実践上、われわれの運動の中に日本帝国主義の擲猛な攻撃に対する敗北主義的傾向を招来させざるをえないことを指摘しておく。

又、昨秋の三里塚でも、社共は、政府・公団の反対同盟農民の切り崩しの側面からの援助者であったが、今日の社共とは、その社会的基礎、政治的役割の面からいえば、帝国主義の露骨な「併合、民族的抑圧、反動」（レーニン「帝国主義論ノート」）の政治的攻撃人民からブルジョア民主主義的権利すら奪わんとする攻撃に対する小ブル民主主義的反対派としてあり、又、帝国主義との域内平和、換言すれば、社会排外主義、社会帝国主義への道を確実に歩みつつある徹底した右翼日和見主義に他ならない。今日でも、労働者、学生の間が深化し、小ブル民主主義的反対派としての彼等の存在する政治的基礎が脅かされるや否や、幾つかの戦場闘争や、全国学園闘争でみせたように、彼等は、権力、警察と結託しても、闘う者に反革命的な武装襲撃をしかけてくるが、これこそ、もつと大規模になるだろうが将来の彼等の醜悪な姿の今日的表現といえる。

昨秋期の沖繩・三里塚諸闘争は、いよいよこうしたことを明瞭に示してくれただけである。

④ 小ブル主観主義・小児病を開花させた革命的左翼とそれによる昨秋日本階級闘争、反帝統一戦線の危機

昨秋日本階級闘争の中で、日本革命、プロレタリアの解放の大事業の成否は、わが革命的左翼の双肩に、そのプロレタリア前衛への成熟如何にかかっていることを多くの先進的部分が痛感したに違ぬ。

胎動している革命が世界的権力中枢部、帝国主義心臓部へと収束を始め、帝国主義心臓部の支配者と人民の矛盾が顕在化せんとする客観的情勢の中で、昨秋期の日本階級闘争は、社共による闘いに決起せんとした労働者人民への議会主義的偽闘、社会排会主義化の逆流、又、帝国主義国家権力による反動的嵐——恫喝と懐柔の方法を駆使した日和見主義潮流の体制内への抱きこみ、革命的左翼に対する政治的孤立化策動、強権的警察支配と自警団の組織化による闘いの暴力的圧殺、革命的左翼への組織破防的攻撃の試み等——にもめげず、九・一六、十一、一四、一九闘争のようにその最尖端部では警察支配を打ち破ったことであらわれただけ、極めて根強く、且つ、戦闘的に展開された。

にもかかわらず、われわれは、昨秋期の革命的左翼の指導をめぐる日本階級闘争は、次の克服すべき現象を露呈させたことを銘記せねばならない。

① 革命的左翼の中で小ブル主観主義、真正正銘の小児病的活動、活動態度が全面開花し、この共産主義運動を取しめるような傾向が昨秋沖繩・三里塚諸闘争が潜在的に孕んでいたエネルギーの爆発的外化、その真の階級の闘争への健全な発展、持続的展開を押し、運動全体の細分化、分散化をもたらしたこと。

昨秋今日のわれわれの陣営内の小ブル主観主義、小児病は、勿論多種多様なあらわれをとっているが、昨秋の問題としては少くとも、次の三点を挙げておかねばならない。

一つは、昨秋期、革命的左翼内の最も戦闘的、左翼的翼が、「軍事」や「非合法」への小ブルロマン主義の色彩を更に濃くし、警察の集中的砲火と自らが招いた召還主義、或いは遊撃戦主義に半無政府主義によって、その闘として一層の組織的解体状況におちこみ、又、一方では、革命的左翼内に今日の日本革命運動の分散性、手工業性という客観的現実を「容認」し、それを経済主義、無政府主義イデオロギーによって更に合理化するが如きものはや革命的左翼として規定しがたい反ホルンシュエイズムの翼が一定の政治的位置を占めていたことである。

第二は、ホルンシュエイズキとして当然の日本革命運動と労働運動の発展の利益に、自己と組織の活動を従属化せんとする厳格な態度が放棄され、原則なき党派闘争主義、例えば、一日にして昨日の統一戦線・統一行動の相手を「反革命」規定するなど手前勝手で、今日の階級闘争の発展の利益に無責任な党派闘争主義がはびこり、それが、六月全国反戦・全国全共闘（一八派共闘）が分裂して以降、とみに革命的左翼の運動の細分化、分散化を招き寄せ、そして反帝統一戦線のほぼ完全な崩壊状況は、アジア侵略・反革命のり出しつつある日本帝国主義に対する最も有効な——勿論、今日われわれが持ち合はねばならない労働者人民の反戦的、民主主義的闘争、抗であれ全ての今日の反抗を組織することを著しく困難にさせた。

昨秋沖繩・三里塚諸闘争は、日本革命の勝利への道である単一のホルンシュエイズキ党建設とその下の反帝統一戦線の強化に関する厳格

で断固たる態度、特にそれは、今日では、ホルンシュエイズムの勝利のための革命的左翼内党派闘争一戦線に関する終始一貫した態度及び、革命的左翼の下にある「入管」、「叛軍」、「部落」、「保安処分」等の大衆諸団体の運動とその発展に対する共産主義者としての責任ある態度が、いよいよ重要になってきた事を示してただろう。

第三は、このような実践上の小ブル的浮動性、理論上の今日の新左翼運動の歴史的試練の性格に関する無知、ホルンシュエイズムか、それとも観念的反スタ主義によってそれに反対するののかという分岐点の無理解に基礎をおく「原則なき党派闘争主義」は、当然にも、「原則なき暴力的党派闘争主義」としてあらわれた。

昨秋の「内ゲバ」——少くとも、既に革命的左翼から逃亡した革マル派による革命的左翼に対する反革命的武装襲撃はその範疇から除くべきだが——の政治的評価、党派闘争と党派闘争・対立の「処理の形態」に関するわが会の見解は、第五章で詳述するが、昨秋の「原則なき暴力的党派闘争主義」は、敵を喜ばせ、攻撃の口実を与え、真面目な先進的労働者の革命的左翼への深い失望を招いただけでなく、何よりも、「日本革命運動と労働運動の発展の利益を擁護する為、現情勢の下での党派闘争・対立の最良の処理の形態、手段とは、なにか」という共産主義者として当然の問題意識から切斷された「内ゲバ」は、日本共産主義運動の底しれない墮落と頹廢——日本帝国主義国家権力への敗北主義だ——への道を開いていったといえる。

② ④で述べた革命的左翼の小ブル主観主義、小児病的傾向の開花特に「原則なき党派闘争主義」「原則なき暴力的党派闘争主義」は

日本革命運動の細分化、分散化、活動の手工業性・活動の非系統性をもたらしているが、この現状は、「個別戦線で闘う者は、個別戦線の窓から世界をみる」といった経済主義、無政府主義の繁殖の温床となり、しかも、諸党派の小ブル主観主義、小児病的傾向、革命運動の領導に関する浮動の態度、「ひきまわし」の態度、「内ゲバ」等は、先進的部分の共産主義運動一般に対する失望と即目的反撥を生み出し、その一部を「無党派」性どころか、頑迷な「反前衛主義」「反党主義」に追いやっており、更に、新左翼と称する多くのインテリ評論家どもが、又、叛旗派や革労協等が「混沌の美学」や「党・大衆」運動の止揚等と煽りたて、プロレタリア的組織性、プロレタリア規律性、プロレタリア的持続性、プロレタリア的断固さ等のプロレタリア的態度の全てに事実上反対していることがそれに拍車をかけている。

革命的左翼の諸党派の組織的弱体化、にもかかわらず革命的左翼と自称する膨大な量の党派活動家の存在、しかも、彼等の活動の、過去の革命家達が困難を乗り越え築きあげた革命的共産主義運動の血の遺産を継承せぬが故にもたらされるところの「前進」しては常に同一の「失敗」を繰り返すといったシジフォスの性格等々——こうして今日の日本革命運動の細分化、分散化、手工業的、非系統的活動の現状を打破し、バラバラになり、「方向感覚」を喪失し始めている労働者陣営の全戦線を統合し、二つの目的のために各戦線のエネルギーを集中させ、資本主義社会への労働者人民の全反抗を組織し、敵の強力な要塞に大攻勢、大砲火をかける為、昨秋期の情勢は、右に述べた悲しむべき現状を「合理化」し、それに「屈服」する傾向、「反代々木、反スターリン主義」の顔をした反ホルンシュ

ヴィズムとの思想的、組織的、政治的闘いが、一方の形而上学的的「マルクス主義」を播き散らし、蜂起に敵対する革マル主義との闘いとともにも、いよいよ重大になってきたという事を物語っていたらう。

② 最後に、昨秋期の総括的特徴は、①②で指摘した革命的左翼の小ブル主観主義、小児病的傾向の開花にもかかわらず、全国到るところで日本帝国主義とその政府に対する労働者人民の不满と反抗の烽火はあがりつつあり、又、その闘いの多くは、完全に議会主義化し、体制内化した社共の影響力から離反する傾向にあり、仲々、「共産党」の日本帝国主義と域内平和を結ぶための「民族民主統一戦線」とは全く異なる強大な反帝統一戦線の客観的基礎が成熟しつつあること、それに比して日本労働者階級の前衛、真の革命党建設は余りに立ち遅れており、未成熟であったことである。

沖繩返還を目前にした日本労働者階級は歴史的転換点に立っている。

七二年沖繩返還によって、日本帝国主義は自己の戦後史を清算し再び、日本民衆を駆りたて、全てのアジアの民衆を血の海にひきつり込まんとしており、公然たる人民の民主主義的権利の破壊、「併合、民族的抑圧、反動」政策を押し進めている。

又、国際通貨危機としてあらわれたように各国資本主義列強の対立・競争の情勢の下で、日本独占資本は、搾取、収奪体系の強化、労働条件・生活条件の改善、農民層の零落化を進めている。

こうした攻撃は、当然にも労働者人民の独占資本家に対する、安保Ⅱ日米反革命同盟に対するその下でアジア侵略、反革命を進めている日本帝国主義とその政府に対する様々な不満と反抗を巻き起し

ており、彼等の社共の「無能」への失望とともに反帝統一戦線の客観的基礎は成熟しつつあり、わが国のこの反帝統一戦線の結成はアジア人民の「反米帝反日軍統一戦線」に込める七〇年代日帝心臓部の階級闘争の歴史的任務として、特に、真の共産主義とその組織の自覚的任務としてあらわれるに相違ない。

昨秋期の激動した国内情勢は、こうした事を、端緒的に示しており、この為にも、なによりも、マルクス主義の原則を擁護し、その日本における創造的展開を闘い取り、強力な単一の革命党を建設することが決定的に重要で、且つ、その前提的任務であることを示したのである。

Ⅱ 国際情勢

① 「多極化外交」―戦後帝国主義支配体制の崩壊の始まり
―略―

② 「ニクソン訪中計画」―ニクソン・ドクトリンの手直しの本質を暴露したアメリカ帝国主義
―略―

③ インドシナ人民を先頭とした世界革命の発展の現段階と国際共産主義運動の危機―その革命的翼の限界について
―略―

(注) 「情勢分析の客観主義(―任務方針の主観主義)」の克服の為に、われわれは、会組織の確立時から六〇年代日本革命的左

翼の運動の発展途程の継承を限定的に陳述し、幼年期特有の左翼反帝政治の克服という問題意識の深化を聞いてきた。そして、この闘いの一環に大衆運動主義―党自然生長論との闘いがあつたのはいちもい

どころが、こうした極めて実践的問題意識を基底とするわれわれの精魂を傾けたボルシェヴィズムの勝利のための闘い、党建設のための闘いに対し、一部なら、「党を放棄した」「大衆運動主義だ」「組織論がない」等と雑言が吐かれていたが、もしこれが悪意あるデマゴギーでなければ、こうした雑言の当人こそ、唯物弁証法なき現象主義的思考しか出来ぬ頭脳の持ち主か、或いは、大衆運動主義の空虚な影としての召還主義者Ⅱ大衆蔑視の輩であることを指摘しておく。

ところで、一般に、大衆運動主義―党自然生長論と一体化して存在するのが「情勢分析の客観主義(―任務方針の主観主義)」であり、こうした事の克服の必要性は既に十年前、第一次共産同の分派闘争の中で叫ばれていたが、今日に到る迄、その根拠を正しく、理論的に掘り下げ実践的克服の道を獲得せんとする闘いは皆無と言つてよ。

われわれは、過去、今日の、新左翼運動内に貫して存在する大衆運動主義、反前衛主義Ⅱ経済主義批判を通じ、同時に、レーニン「カール・マルクス」(全集二一巻)等の著作に啓発されながら、マルクス主義革命理論―戦術理論を整理して来たが、その中に過去の誤まれる

情勢分析の前提へ、批判的・情勢分析の方法論的・情勢分析の諸問題があつた。

(1) 「情勢分析の客観主義」(―任務方針の主観主義)の批判

① 情勢分析の対象たる「社会階級は、いつでも、その時代の生産および交易の関係の、一言でいえば経済関係の産物である」(エンゲルス「友デューリング論序説」全集二十巻)

従って、資本制生産・交易の諸関係に規定された社会諸階級、資本主義社会の構造の分析は、確かに「経済学」を主要な武器とすること。

② たが、「経済学」を武器とした資本主義社会の構造の分析、社会諸階級の直接的、経済的存在の分析は、ただちに、われわれの主体的活動の方法と内容の決定のための即ち戦術の土台としての情勢分析ではなく、相互に闘う生きた社会諸階級の分析は、その存在を、直接的、経済的存在自身の展開された姿から捉え返されなければならぬ。

具体的に言えば、それは、相互に闘う生きた社会諸階級存在の分析は、この存在の変革的実践への潜在的可能性を規定する要因、例えば、多種多様なイデオロギー(勿論反動的、ブルジョア的、小ブル的―イデオロギーをも含めて)や現存する諸政党の指導Ⅱ人らかの意識性を媒介としてなされること。

③ 以上要約すれば、情勢分析は、資本制生産交易の諸

関係に規定された社会諸階級の「経済学」的分析や社会諸階級の間の物質的、精神的諸関係を総括する国家、それを規制する国家組織等の分析、即ち、「国家論」的分析によつてなされるが、情勢分析が、レーニンが「カール・マルクス」で指摘したような真に動態的なもの、実践の武器とならうるためには、次の事柄が——大衆運動主義者、経済主義者は必ずこの事柄を忘れるのだが——注目されねばならない。即ち、情勢分析の際、分析せんとする主体の規定性、即ち、革命過程の客観的総体性と、それを貫く主体的活動、その両者の弁証法的視点、換言すれば、「われわれは如何なる革命をやるうとするのか」といった革命論が潜在的前提となつてゐること。（われわれの革命論が、単なる「蜂起必要論」でなく、「蜂起の陣型」構築への主体的活動論、レーニンの言う「プロレタリアートの階級闘争の戦術」論であることに注目せよ。）

こうした事柄は、マルクスが「国民経済学批判序説」等で暗示した。唯物弁証法を方法とするマルクス主義認識（「実践」）論からすれば、当然の帰結であるが、又「社会民主党綱領草案」にあらわれたように、レーニンにおいて、この事柄は極めて鋭く理解されてゐる。

「綱領は三つの主要な部分に分かれてゐる。第一の部分では……労働者階級が現代社会でどんな地位を占めてゐるか、労働者階級の工場主との闘争がどんな意味と意義をもつてゐるか、また、ロシア国家における労働者階級の政治

的地位がどんなものであるかということが、示されてゐる。

第二の部分は、党の任務が説明され、党がロシアにおける政治的諸流派にたいしてどんな関係にあるかということが、示されてゐる……」（「社会民主党綱領草案と解説」全集二巻）

従つて、この事が理解されれば、「客観主義的情勢分析」は、主観主義の実践（自然発生的実践）によつて招来すること。われわれの周辺に未だ存在する傾向、「得意になつてデタラメなおしやべりをしたり、「二三、四」といふように現象をならべたてること」（毛沢東「われわれの学習を改革せよ」）が、如何なる主体の欠陥にもつづいてゐるのか、如何なる実践上有害な事態を招くのが明白となる。

革運派—マル戦派—岩田弘グループ、今日影響力はほとんど喪失したこの承譜は、日本新左翼運動の典型的な経済主義的潮流の一つなのだが参考のために彼等の「情勢分析」なるもの『為替戦争と階級戦争』（川上忠雄、佐藤浩一執筆「季刊労働運動」1号）を分析してみればよ。

第二章 昨秋期沖繩・三里塚諸闘争に対する政治路線上の教訓

この章では、昨秋期の爆発した日本階級闘争、沖繩返還協定紛争、三里塚第二次取用阻止闘争等の様々な大衆闘争に対する、わが会の政治路線上の総括及び幾つかの教訓を整理してみる。

ここでは、われわれの政治路線の総括、教訓化を、昨秋期の大衆闘争の重要なスローガン問題、スローガン論争に限定して試みるがその際、まず、次の二点が確認されなければならぬ。

その一つは、「佐藤政府打倒」のスローガンをめぐる論争は、単なる昨秋期の日本労働者人民が自己の闘いを集中すべき政治的環の設定、当面せる戦術的有效性に關する領域のみならず、それを起点にして、マルクス主義国家論上の諸問題、即ち、国家権力とその政府の区別と連関等の権力規定に關する重要な理論的諸問題と、権力奪取に向けた系統的主体的活動、マルクス主義革命論上の領域に迄わたつてあつたこと。

そして、われわれによる意識的左の論争の展開は、今日の革命的左翼諸党派内部に濃厚に存在する小兒病的主観主義、及び「無党派」活動家を中心してあるところの自己の活動の政治的任務、目的についての無自覚、客観的には無政府主義（「経済主義」）この日本階級闘争の発展にとつて今日極端化してゐる二つの傾向との断面たる闘争でもあつたことが銘記されねばならぬ。

第二は、「ニクソン訪中計画」発表後の「日中国交回復」ムード

のつかり、激動する情勢の中で、小平平和主義的幻想と帝國主義美化論をふりまき、沖繩闘争を事実上放棄した社会党、又、一方中国共産党からその右翼日和見主義、修正主義を公然と批判され、「四つの敵」の一つに教えられているが故に、用心深く「中国問題」を避けんと策を弄したにもかかわらず、七月二十八日社会党全国書記長会議で成田委員長に、その「消極」性を批判されるや、その顔色を失い「インドシナ問題や沖繩・安保問題を事実上、第二義的なものとして過少評価しようとする」（「ニクソンとアメリカ帝國主義」）等と愚痴つた代々木「共産党」、この両党の「沖繩問題か中国問題か」といふ恐ろしく愚劣な、正に論争ならぬ論争は問題外としても、昨秋期、激動する情勢の中で、沖繩問題、中国問題、インドシナ問題を總体的に把握し、それに基づき、革命的暴露、煽動をおこなひ、各々の政治課題の闘いの独自性を踏えつつ、矛盾を深めている日米反革命同盟の新段階の下でアジア侵略、反革命を遂行せんとする日本帝國主義とその政府に全面対決する闘いの真に進むべき方向を呈示したのは、一体如何なる潮流によつてなされたのか。漸して「自主独立論者」や「反帝・反スタ」自主独立論者の手によつてではなし。

こうしたことに見られる昨秋期のわれわれの政治路線の正しさはこの間のわれわれの観念的反スタ主義との理論闘争を通じて獲得したマルクス主義の地平、これこそ裏打ちされてゐることが確認されねばならぬ。

1 「佐藤政府打倒」スローガンとそれをめぐる論争の教訓

昨年七月十五日、突然のニクソン訪中計画の発表、深まる国際収

支の悪化、経済危機を前にしての八月十五日のニクソン新経済政策演説、わが国の繊維業者の反響を押し切つてなされた十月十五日の日米繊維協定仮調印、ニクソン政府と佐藤政府の反中国画策にもかかわらず、十月二十五日国連総会におけるアルパニア案の勝利、更に又、中国政府の対日積極外交を通じて佐藤政府孤立化政策、こうした中で、「佐藤政府の危機」は形成された。

しかも、この「佐藤政府の危機」は、「ボル通り号」でも指摘したように、戦後世界体制を画期する激動せる情勢の下での、深化しつつある日本帝国主義の七〇年代戦略の危機に裏打ちされているものであった。

「だから、七〇年代初頭の沖繩返還を通じた佐藤政府と日帝のアジア侵略・反革命の道は、米帝の七〇年代世界反革命戦略・ニクソン・ドクトリンの「環」としてあり、そして、その「順調」な実現——米帝のアジアからの戦術的後退——を大前提として打ち立てられており、従つて日帝独自の「世界反革命戦略」が未だ全く不確定なままの、いわば、六〇年代「対米協調」政治の延長にあつたのである。

だが、一度、米帝の七〇年代世界反革命戦略の表現が、ベトナムインドシナ革命戦争によって暗礁に乗りあげ、米帝がその政治的経済的危機の深さ故に自己の特殊利害を一挙につき出し、七〇年代世界反革命戦略を転換し、手をおしするや否や、日米共同声明以降の日米反革命同盟の再編・強化過程の日米帝間の矛盾は、顕在化し、日帝独自の七〇年代「世界反革命戦略」が鋭く問われ、佐藤政府の「対米協調」政治の決定的限界を露呈させたのである。」（「ボル通り号」、主張）

こうした歴史的现实の中で、「政府問題よりも権力問題が重要だ」とか、「政府問題よりもっと生き生きとした、みずみずしい人民の政治が必要だ」とかを主張し、「佐藤政府打倒」のローガンに反対する傾向は、これから述べる様に、右の日和見主義者に対する自然発生的反響を代表しており、客観的には、それへの敗北主義としてあるのである。

a 「政府問題より権力問題が重要であり、「佐藤政府打倒」のローガンは、革命的左翼の運動を、自民党内政権交代の圧力として利用される。」という主張の誤謬について

① 議会主義者への敗北主義と、小児病的主観主義によるレーニン主義的政治暴露・煽動の否定。

昨年十一月二六日発表された中国共産党中央委・政府とベトナム労働党中央委・政府の共同コミュニケの双方は米日反動派による日本軍国主義復活に反対して朝鮮人民、日本人、アジア各国人民、全世界人民とともに最後まで戦いぬく決意を固めている。（「読売新聞」十一月二七日）という力強い宣言や、「ことばの上だけの表現では（日中）政府間交渉は始められない。佐藤政府ではたとえこの条件をのむといつても認められない。」という周恩来発言（十一月十一日、東京都知事および日中交回復国民会議代表団との会談）にあらわれたように、われわれの想像を絶する様なインドシナ人民の苦闘の進撃、中国政府、共産党の一連の積極外交等のアジア人民の闘いの前進は、アメリカ帝国主義の七〇年代世界反革命戦略・ニクソン・ドクトリンを破綻に追いやり、その手直しを余儀なくさせ

ところで、昨秋、この（客体的な）「佐藤政府の危機」を、確かに社共の議会主義的「指導」と、わが革命的左翼の今日の危機、故に、われわれは、日本の労働者人民の主体的力量の前進によって文字通りの「政府危機」へ、ブルジョア政治の根底的危機へ転化させアジア侵略・反革命へ乗り出した日本帝国主義に対する最初の打撃を与えなかつたが、勿論、この事態は、決して飛び越えられぬ日本革命運動と労働運動の今日の発展段階という厳然たる現実によって深く規定されているのは、言う迄もない。

われわれが最も問題にすべきなのは、革命的左翼と自称する党派及び活動家の中に、昨秋期の沖繩闘争、三里塚闘争、人民の様々な性格を持った不屈の闘いを具体的に「佐藤政府打倒」へと結集することに反対する傾向があつたことである。

こうした革命運動の基本原則の一つを公然と否定する悲しむべき傾向が誕生した歴史的要因は次の点にあることは推測に難くない。

即ち、「政府危機」「政府移動」「政府打倒」とかの所謂「政府問題」は、六〇年安保闘争以来の日本階級闘争の中では、「資本家階級全体にたいし、またこの階級を支持する政府にたいして、闘争を開始するときにはじめて、労働者の闘争は階級闘争になる。」（レーニン「われわれの当面の任務」全集四巻）という意味での真の階級闘争として、反政府—政治闘争として労働者階級によって獲得されず、それは、「赤じゅうたん」の限定された政治領域に無残にも押しとどめられ、「予想通り」の議会内茶番劇の問題として、或いは社共等の議会主義者の専売特許として、又、「プロ独」を語りつつ日本における政治権力の奪取を抽象化する新左翼日和見翼の「原則的闘い」としてしか存在しなかつたことである。

且つ、復活した日本帝国主義との対決姿勢を強め、佐藤政府の危機が急速に対外的に形成され、国内でも真の「政府危機」を形成している種々の要因が出そろつていた昨秋期において、人民の攻撃すべき目標を具体的に指示し、全ての「悪」の根源は資本家階級とその政府にあることを宣伝、煽動し、闘いを組織すること、これは共産主義者とその組織の最も基本的活動ではなからうか。

労働者の賃金、労働時間、労働条件—生活条件をめぐる経済闘争沖繩返還協定や中国敵視政策、三里塚第二次収用等の種々の反人民の諸政策との闘い、今日の全ての人民の「漠然」とした資本主義への反抗を「政府問題」をめぐる闘いへと組織化し、自己の敵を理解させ、しかも、社共の議会主義的、改良主義的指導とは異なる革命的左翼の独自の政治暴露を通じた煽動と、独特の闘いによってである。「広大な政治領域にプロレタリア人民をふみこましめ」ることは、来るべき「内戦の時代」で、ブルジョア政府を打倒し、革命政府を樹立するための、われわれと階級の重大な政治的訓練ではなからうか。

唯一、「帝国主義的現政府を主要な敵として攻撃を集中してならない場合とは、もっとも主要な敵、主要な危険が政府およびその勢力とは別の反革命政治勢力として存在し、政府を倒すことがその反革命を増強させ、革命を破綻することになる場合だけである。」（佐野茂樹氏、七一年九月発行パンフ）

われわれは、「資本主義なるもの」、「帝国主義なるもの」を敵と規定し、それと格闘できないし、又当然にも労働者人民に呼びかけることもできない。

a の主張は、次にみるように、理論的には、権力—警察、軍隊等

と規定とするように、マルクス主義国家論を歪曲して、レーニン主義的な宣傳と、「全人民的な暴露」による、労働争の組織化という共産主義運動の基本原則を、社会主義者による日和見主義風の「佐藤政府の反動」を容認する社会主義者への敗北主義であり、最後に、社会主義、小児病的傾向の一つのあらわれである。

「経済的暴露が工場主にたいする宣戦布告である」として、政治的暴露は政府にたいする宣戦布告である。そして、暴露カンパニアがいつそ広くまた強力にならねばなるほど、開戦するため、宣戦を布告する社会階級がいつそ多数でまた断固としていなければならない。この宣戦布告はますます大きな精神的意義をもってくる。だから、政治的暴露は、すでにそれだけで、その敵対する制度を解体させるも、つとも強力の手段、敵からその偶然的もしくは一時的な同盟者をひきはなす手段、専制権力の常時の参加者たちのあいだに敵意と不信をまく手段の一つであるのだ。(「レーニン」左記をなすべきか」全編五巻)

「革命的左翼の勢力が今日のように弱体化を、政府打倒を主張するのは、ポスト佐藤を狙うブルジョア勢力や議会主義者の後押しをするだけだ。」などという、全人民的政治暴露、煽動に關する段階思考、弁証法なき形而上学に対しては、更に次のレーニンの言葉を引用してわれわれの見解に替えるだけでよいだろう。

「戦闘組織や大衆のなかでの政治的煽動が、一般に、いつでも、無条件に必要かどうかという問題についての自分の見解を、二四時間にはさておいて、二四ヶ月以内でも変更するおもうのは、なんの原則もたない人々のみである。ここで状態の差異、時機の変遷に

従って、政府移動をもって直接的に国家権力移動へとすり替える代々木「共産党」の「革命論」は、或る種の「クーデター革命論」であり、又、それは、資本制社会の破壊と人類史の新しい一頁の開始は、なによりも幾百万、幾千万の労働者人民の英雄主義の発揮、政治生活への参与としてしか成立しないことの否定、徹底した大衆蔑視の思想を背景にしているのである。

その第二は、国家論において、国家(権力)と、その実体としての国家組織の機能の關係、国家組織が国家権力によって産み出されながら、国家権力を規制するということ、又、「社会から生まれながら社会のうえに立ち、社会にたいしてますます外的なものになつてゆくこの権力が、国家である。」(エンゲルス「家族、私有財産および国家の起源」)や「国家は階級対立の非和解性の産物」(レーニン「国家と革命」)といったマルクス主義国家論の重要な命題を否定し、又、革命論においては固先の「政府移動の国家権力移動へのすり替え」論を前提にして、労働者人民による旧国家組織の暴力的破壊という権力移動、革命の形態を否定している点である。

この事は、十一回大会決議「合法的自衛隊解散論」等を見れば明らかであり、そこでは、革命運動は、純粹の議会内多数派獲得運動へと矮小化されてしまっている。

さて、われわれが、代々木「共産党」批判に比較的長く拘つたのは、その主張が、代々木「共産党」に対する極めて即目的反撥とあり、理論的にも、代々木「共産党」と共通した根を持つたマルクス主義国家論(「革命論」)の歪曲としてあるからである。そのうちに、その主張においても、次の二点において誤っている。

「求めることは馬鹿げたことだ。」(「何から始めるべきか」)代々木「共産党」への即目的反撥に基礎をおき、共通した方法的欠陥にもとづくマルクス主義国家論(「革命論」)の歪曲。代々木「共産党」八回大会綱領の日和見主義性は、「アメリカ帝國主義をそれに従属した日本独占資本」という「二つの敵」論の二つの要敵たる後者の前者へのすり替えといった権力規定をめぐって、その把握に在るが、そこには、当然にも、次の二点に要約できる般的なマルクス主義国家論下革命論の公然たる歪曲が存在している。

その第一は、国家論において「国家(権力)」と「政府」の区別と連関を否定し、後者を前者に無媒介的に同一化することによって革命論において、政府移動をもって直接的に国家権力移動へとすり替えている点である。

資本家政府「民主連合政府」「民族民主統一戦線政府」「社会主義政府」という代々木官僚の描く「革命論」は、労働者階級の資本家階級全体とその政府への最大の政治闘争(「武装蜂起」)を背景として換言すれば、労働者階級の政治的自覚「資本主義社会のブルジョア独裁を殲滅して産み落される「幻想的な共同社会性」(「ドイツ・イデオロギー」)としての国家権力の否定(「旧社会」規制した国家組織の破壊)を背景として、労働者階級によって「政府移動」が意識的に開いとられること、そして、開いとられた「政府移動」をもって国家「権力の移動」の基礎過程が完成すること、といったマルクス主義国家論「革命論」の諸原則の完全な歪曲の上にのみ構成された代物なのである。

「国家」および「政府」の区別と連関が放棄され、代々木「共産党」議会議主義者への敗北主義を前提にしつつ、丁度、代々木「共産党」とは逆に、「政府」をして、直接的に「国家」へと還元し両者を無媒介的に同一化しているのである。ここからの革命論上の帰結は、政府移動なき国家権力移動論なのである。

かかる諸君は、一九一七年ロシア二月蜂起の口火を切ったプロファ工場労働者が「不穩分子の廉で誅首された労働者の即自再雇用、出来高払い賃金の一律五〇引きあげ」というスロウカ影響の賛成するが、「ツァーリ政府打倒」と叫ぶのには「反対又は棄権でもするのだから」か。

或いは、蜂起したロシア労働者、農民、勤労大衆が、文字通りの「階級支配の隠弊のための」偽瞞的な中間政府だったケレンスキー臨時政府に対して、「パン、土地、平和」に続けて「ケレンスキー臨時政府を倒せ」と叫びながら武器を握った。つまり、「政府打倒は叫ぶべきでない」等といふよりも忠告するのであるのか。

従って、又、かかる諸君にあっては、ブルジョア地主政府とブルジョア国家(権力)や、労働者・農民政府と労働者国家(権力)の相互連関に關する諸問題などは、理論的考察の対象すらなりえないだろう。

「政府」の「国家」への直接的還元、神聖の無媒介的同一化という誤れる「国家論」によって、その主張は、やはり、代々木「共産党」と同様に、国家(権力)と、その実体としての国家組織の機能の關係について無理解であり、それ故、「国家組織の破壊」をも、て、則、「国家権力移動」として規定する誤

日本革命の発展を促していることである。

ンについて

略一

ら、「日本帝国主義の具体的攻撃課題として露の軍事であり、政府打倒は関係がない」という主張の誤謬。

この主張は経済主義者と「無党派」思想家、一部に見られた。

前者は、個々の労働者の企業主、雇い主への闘い、帝国主義の不可避に差み出す反動的諸政策の一つ一つへの闘い、これらの闘いの「部分性」を、日本帝国主義とその政府への「全体的」闘いへと高めることに反対し、プロレタリア独裁に反対するものである。

後者は、自己の政治的任務、自己の闘いの目的に適合する無自覚、性にもとづくものであり、「階級闘争」に参加するが必ずしもプロレタリア独裁を目指すとはいえないものである。これらは、自覚的であれ、無自覚的であれ、客観的に無政府主義である。

2、「日」韓」台反革命体制の強化粉碎ノ

中華人民共和国承認ノ

日台条約粉碎ノ

日「韓」条約粉碎ノ」のスローガンについて

略一

る、「米帝をアジアから叩き出せノ

ベトナム共和臨時革命政府の「七項目提案」

断固支持ノ

日帝のサイゴン政府援助反対ノ」のスローガ

又、爆弾を闘争手段としなくても、機動隊殲滅をかち取った闘いは、警官を死亡させたものだけでも、九・一六三里塚第二次収用阻止天神崎周辺における農労学共闘の闘い、十一・一〇沖縄現地の闘い、十一・一四渋谷における沖縄闘争がある。

ブルジョア・マスコミのセンセーショナルな言葉を借りればわれわれの経験している「爆弾時代の登来」「本格的テロ、ゲリラ時代」は、日本共産主義運動の歴史を顧みれば、日本帝国主義の満州侵略の前夜、三十年始めの「武装共産党」と全協による武蔵メーデーを頂点とした一連の武装闘争の時期、又、朝鮮戦争時下の「五一年綱領」にもとづく日本共産党の一連の武装闘争の時期（今日代々木「共産党」がこの総括を一切放棄していることについては「日本共産党の四五年」参照。）にづくものであり、現在、警察の強権的支配によって若干の後退を余儀なくされているとはいえ、六七年以来の反戦反安保沖縄闘争の爆発の延長にある昨年の武装闘争は、勿論前記の時期と社会情勢は異っているが、その持続的展開力でも、大衆的展開力でもあらわれているように、決して前記の時期の闘いの規模に劣るものではない。

昨秋、最も特筆すべき武装闘争は、既に指摘してきたが、九・一六機動隊一個小隊殲滅を頂点とする九月下旬の武装した三里塚農民、支援労働者、学生の第二次収用阻止闘争である。

犬を三人も殺ったという軍事的戦果の規模の大きさとという点だけでなく、真にそれを支えた「人民の政治」の煮つまり、高度化の点でも、従って又、その社会的影響力の広がりや深さ、全国到る所で苦闘している労働者階級の先進的部分への精神的鼓舞の巨大さ、健康さの点でも、更に又、革命家とその組織に与えた教訓の豊富さ一

第三章 昨秋期沖縄・三里塚諸闘争に対する軍事路線上の教訓

I 昨秋燃えあがった武装闘争、機動隊殲滅の意味したもの

昨秋の日本階級闘争の特徴を捉える際、忘れてならないのは、特に、その最突端の闘いでは徹底した武装闘争としてあったこと、強権的警察支配を部分的に打破したことであり、従って、われわれは一般的に政治方針・政治路線上の教訓に付け加えて、「量化された政治」の側面から、即ち、軍事方針・軍事路線上の教訓をも是非獲得しておかねばならない。

昨年六・一七沖縄返還協定調印阻止闘争で鉄パイプ爆弾が炸裂して以来、主要なものだけを列挙するなら六・一七成田空港警備会社爆破、八・七警視庁総監公害爆破（未遂）、同日成田警備爆破、九・一六成田大清水交差点、かん爆弾爆発、等、三里塚闘争を焦点として爆弾闘争が連続し、それは沖縄闘争にも引き継がれ、一連の爆弾テロとして闘われた。

十二月二七日発表された「公安白書」によれば、昨年「使われた爆弾は、五七件三二四個、うち三三件三六個が爆発」したという。

とりわけ、六九年秋以降、革命的左翼の最も戦術的、左翼的が患っている主観主義的軍事論の病気の克服の処方箋を与えたいという点でも、全ての点にわたって、九月武装した三里塚農労学共闘の第二次収用阻止闘争は輝かしい地平を持っており、教訓的である。われわれは、この闘いの中から、次の三つの主要な特徴を総括しなければならぬ。

① 「人民の政治」の煮つまり、その中間主義的政治を一切許さぬ迄の高度化を孕んだ三里塚農民の武装闘争は、「左翼陣営」内部の日和見的翼と革命的翼を分類し、日和見主義政党の果している今日の役割り、来るべき大会戦の時代に彼等が必ずや自己暴露する振舞いを、如何なる脆弁をも許さぬ程明瞭に全人民に暴露した。

「空港反対」は一応主張したが「空港新幹線」には賛成するという社会党・反対同盟を誹傍中傷し、「平和塔」買収の金額争いに闘いを押しとどめんとした代々木「共産党」・政府・公団の恫喝と「金」による反対同盟の切り崩しと一体化し、「説得」して回った両党、又、「あれは、小ブルII農民の土地闘争にすぎない。」等と手前勝手な規定し三里塚闘争から逃亡しながら、「決戦」に登場しなくては自己の反動性が公然化するという危機感に駆られ、そして、三里塚周辺地域をうろろろした革マル派、一方、取香はあちやんの裏山に団結小屋を構え、強力な支援体制、援農体制を確立し、闘う農民と一糸みだれぬ団結で、数日間にもわたって、三里塚農労学共闘の最先頭で闘い抜いたわれわれ、そして革命的左翼の諸党派等々。

② 六七年十・八羽田闘争以来の革命的左翼に領導された青年労働者、学生の烈火の反戦・反安保闘争に励まされ、又、逆に励まし

共に生長してきた三里塚農民は、九月第二次収用阻止闘争でも、不
退転の武装闘争の主体として登場し、全国の労働者階級の最良の部
分を勇気づけ、「武器、英雄的精神、創意工夫」の三つを正しく結
合させるなら必ずや敵権力を打破することができるという確信を
与え、昨秋沖繩闘争の爆発の序幕を切った。

いや、その闘いは、昨秋沖繩闘争の爆発の序幕を切っただけではな
い。

それは、日本革命運動史上の記念すべき一頁であり、将来の日本
階級闘争の戦士たちによって常に想起されるものに相違ない。

われわれは、或る歴史家の次の論評に完全に同意する。
「これは、第二次大戦後の日本人のたまたかにおいて最も最初で
あった。戦後の歴史で、一つの集団の闘争が、全国全人民の支援
をうけて、長期にわたって権力の暴力と対峙したのは、三里塚のほ
かには五二一五四年の内灘基地反対闘争、それに続く砂川闘争、
五九年一六〇年の三池炭坑労働者の闘争、そしていまなお十年にわ
たつてもたたかわれている北富士農民の闘争が主要なものであるが
人民が実力で機動隊の攻撃に出たことは、三里塚が最初である。

第二次大戦後の近代の日本人の闘争の歴史をかえりみても、か
つての非合法の共産党の指導した時期にも、このように闘争はなか
った。小作争議も実力闘争となり地主屋敷の焼き打ちなど、「百姓
一揆」的に発展したことがあるだけである。さらにその前の大正・
明治の時期にも、米騒動や鉱山労働者の蜂起や足尾銅毒被害農民の
警官・憲兵隊との衝突、桂軍閥内閣反対の東京全市警察焼き打ち(い
わゆる日比谷焼き打ち)など、人民の実力闘争の伝統は脈々と
存するが、生活を守るといふ条件的要求から出発して、軍国主義権

力ないし専制権力に反対する政治的自覚を明確にもって、あえて権
力の暴力、警察・軍政にどんた人民大衆の闘争は、一八八四年の
秩父農民の革命的蜂起のほかにない。」

④ 三里塚農民と支援労働者、学生による武装闘争は、六九年來
徹底した強権的警察支配によって押しとどめられ、歪曲を強いられ
てきたプロレタリア軍事を質量ともに飛躍的に高め、その冷厳な事
実によって、わが最も戦闘的、左翼的翼の革命家とその組織にの
びこんだ軍事(一非合法)へのロマン主義、左から政治闘争の核心
的課題に突き刺さりぬ主観主義的武装闘争をはっきりと批判した。

三里塚の武装闘争は、「爆弾以上の武器による闘いが武装闘争だ」
とか「党は政治闘争、武装闘争、大衆は経済闘争、平和デモ」等と
いうマルクス主義軍事(一政治)論と無縁で、子供じみた馬鹿げた
見解を嘲笑っているのではないだろうか。
闘いこそなによりも偉大な教師である。

Ⅱ 昨秋明らかになった革命的左翼の軍事路上の 危険な傾向

わが会は、昨年六月沖繩闘争で、機動隊数十名を負傷させた爆弾
闘争の直後に、その爆弾闘争を断固支持すること、浮浪人的軍事に
反対して、かかる武装闘争を三里塚・沖繩闘争の具体的政治課題に
結合させること、かかる闘いを日本革命運動と労働運動の発展の為
に従属化させ、系統化させることの重要性を主張し、又実践してき
た。

にもかかわらず、武装闘争の指導、意識性という側面からいえば

昨秋の武装闘争の多くは、極めて危険な傾向を示しており、われわ
れは、その担い手達の「英雄主義」を斟酌して、その傾向を黙視し
見過すことは誤っているどころか反動的であること考えねばならな
い。

われわれは、「階級闘争は、階級と階級との戦争であり、階級支
配の癡絶を目指す共産主義運動は、人類史数千年の階級支配の『暴
力』を『暴力』によって一掃するものであること』というマルクス
主義軍事論の無理解、自己の平和主義的、合法主義的実践を棚上げ
して、武装闘争の担い手に、もっともらしい「忠告」を垂れる日和
見主義者と同席するものではなく、武装闘争に限らず、革命家、共
産主義者たらんとする全ての人々の貴重な理論と実践を教訓化せんと
するものであったし、現在も、将来も、然りである。

昨秋の先進的部分の「テロ」へのあこがれ、「軍事」への期待
感は、六九年秋の全国津々浦々で闘った無数の青年労働者、学生の
「攻勢」への熱い息吹きを背景にした一それ故、当然で、健康と
いえる——「テロ」への、「軍事」への期待感と必らずしも同質で
はなく、一部では、混乱する革命的左翼の諸党派への失望と、警察
力による閉じこめられた闘いの状況への自然発生的不満の発露とし
ての性格が、従ってテロリズムへの傾斜が見られる。しかも、革命
的左翼の最左翼の部分が、これを真のプロレタリア軍事へと正しく
指導し、発展させるところか、この状況をSとして、更に、子
供じみた主観主義的軍事を弄ばんとしている極めて危険な傾向が顕
在化している。

その傾向は、日本階級闘争の深化が、その指導部に要求する課題
に、革命的共産主義運動の未知の課題に、日和見主義者のように左

んら回避することなく、真正面から対決し、その進路を、痲猛な国
家権力との格闘を通して試行し、模索してきた部分の、真のボルシ
ェヴィズムへの成長に伴う病気である。

沖繩返還を目前にし、日米反革命同盟の新しい段階の下で日本帝
国主義が再び「アジアの盟主」として登場せんとする重大な情勢の
中で、この病気に中間的態度をとり、事実上承認することは、最も
英雄主義と自己犠牲精神を持ち合わせているに相違ない部分の壊滅
的打撃を、日本革命運動の取り返しのつかないほどの打撃を許容す
るという意味で、極めて反動的である。

病気は、適當の薬が投与されれば直るものである。
この混乱と危機と嚴格に闘うこと、このことは、われわれの、革
命と党のための現在の核心的任務の一つである。

日本革命における軍事問題を現在の実践において、更に共産主義
的活動全般に、如何に位置づけ、展開していくかをめぐって産み出
されている混乱は次の二つの傾向に分類される。

① 軍事無政府主義—戦闘団主義—遊撃戦主義。

赤軍派は、六九年秋以來種々の傾向を變遷してきたが、現在の赤
軍派、或いは、日共革命左派—「安保共闘」と合同した「連合赤軍」
が、この傾向の代表的部分である。

この部分は、自己の実践、共産主義者の当面の任務を、労働者階
級を援助し、労働者階級の権力を打ち立てること、具体的に安保—
日米反革命同盟粉砕、日本帝国主義打倒、米帝を日本から叩き出す
こと、によって、日本労働者政府を樹立することと設定し、それに
むけての活動と闘いの中に軍事を位置づけ実践することを放棄し、
軍事が自己目的化され、戦略化されてしまっている。この意味で、

戦略上の軍事無政府主義といえる。更に、組織上では、その部分は軍事無政府主義と結合してボルシェヴィキ党の建設の任務の過少評価、共産主義者、革命家の組織を建設し、わが国の到る所で憤出して労働者人民の資本主義的奴隷制度への反抗を全て一つの目的に結集させ、来るべき決戦の時代に向けて党と階級を系統的に配置することの否定、「党」の事実上「軍」への解消、といった点で戦闘主義に陥ち入っている。

又、戦術上では、前者と同様に結合して、遊撃戦主義としてある。日本列島の離島にいたるすみずみ迄強固な単一のブルジョア国家権力、単一の中央政府、によって支配されているわが国における共産主義的戦術を、半封建半植民地国であり、民族ブルジョアジーによる全国民的支配が十分に確立していなかった中国での革命形態、土地革命を基礎にした赤色根拠地建設と、反革命との露骨な軍事的拮抗、恒常的武装闘争、遊撃戦の持続的展開という中国共産主義者が模索し闘いつた戦術から、特に、戦術形態から直接的に類推するのはマルクス主義者の態度ではない。「中国の赤色政権はなぜ存在することができるのか。」「中国革命戦争の戦術問題」等の毛沢東の著作参照）この遊撃戦主義は、著しい主観主義的武装闘争と共産主義者の労働者、勤労大衆の中での——きつと長期にわたり、又小ブル投機分子は脱落するに違いない——持続的活動、宣伝・扇動とそれによる闘いの組織化の任務の放棄としてあらわれている。

以上、戦略上の軍事無政府主義、組織上の戦闘団主義、戦術上の遊撃戦主義、この三つの契機は相互に規定し合っており、一つの「全体性」を構成しており、この土壌は、「単純なる軍事的見地」、マルククス主義政治・軍事論の歪曲であるといえる。

われわれは、彼等の「権力移行の形態を蜂起として規定すれば待機主義になる」という見解を聞くだけで、軍事活動でなければ共産主義的活動ではない、換言すれば、鉄砲を持たなければ、寝てしまってもかまわないといった、彼等の共産主義的活動に関する理解の貧困を知ることができよう。

② 軍事召還主義と観念の「非合法党建設」

この傾向の典型は、共産同十二・十八路線である。「連合赤軍」の右の傾向を「のりこえた」と称し、「綱領と党」、「権力・党・階級」を対置した共産同十二・十八路線をここで簡単に分析してみよう。

「革命的マルクス・レーニン主義の復権・反スタマルクス主義の止揚」の理論的「成果」の評価は、次の機会にゆだねるが、結論的にいえば、この路線は、自然発生的な軍事と非合法へのロマン主義を背景として、赤軍派が序々に右の傾向に純化していったことを正しく批判・教訓化することなく、常に、自己のこの小児病を不問にし、避けて通ることによって、「権力・党・階級」と「見当を問はずに提起しながらも、現実には、過去の共産同及び新左翼運動の観念主義的総括——宇野、黒田、ローザ、ルカーチ等、革命家も思想家も、学者をも、時代背景や政治的役割も正しく考慮することなく、不完全な「総括」故に、その理論的成果は実践上の教訓としてなっていない——又、次にみるような党と階級を混同したところ（軍事）召還主義、雲上の「非合法党建設」、規律の形骸化に陥っている。

ここでは、驚嘆に値するほど一貫して、唯物弁証法が死に絶えている。

「国際反革命軍、体系との対決」こうした言葉は、彼等が、「権力規定」を云々したが、わが国の諸階級の分析、敵階級の規定、その支配を規制している官僚組織、警察、自衛隊、特殊には米軍等の分析、権力規定のための問題意識を持ち合わせていないことを示しているのではないだろうか。敵権力の規定が、単に「帝国主義軍隊・警察」に設定されているとしか判断しようのないその主張は、唯物弁証法を方法的基礎とする国家論のマルクス主義的理解と無縁ではなからうか。

だからこのことから帰結される革命論は、当然にも素朴な「警察殲滅、軍隊解体論」に「蜂起必要論」だけであって、最高の政治闘争の闘争手段としての武装蜂起、その為の陣型を如何に現在から闘いとしていくのかという問題、プロレタリア階級闘争と変革的実践の問題、レーニンの言葉では「プロレタリアの階級闘争の戦術」の問題の考察がすっかり抜け落ちてしまっている。この領域でも唯物弁証法はみられなす。

又、「蜂起必要論」は、単なる「非合法党必要論」しかもたらさない。プロレタリア階級闘争と変革的実践の諸問題、「プロレタリアートの階級闘争の戦術」の諸問題といったマルクス主義革命論を前提にして始めて、如何に「革命の幹部」を養成し、組織化し、「非合法党」を建設するのかの回答を獲得しうるのである。

「社会民主主義的意識と組合主義的意識」の同一化、政治闘争の武装闘争へのすり換え、或いは両者の対立化、党派闘争・対立、「暴力的」処理の形態の混同、合法と非合法の対立化の傾向等々。

特に、その路線の最も危険な傾向は、共産主義運動の「死」を意味する小児病的な軍事召還主義である。

先に指摘した軍事と非合法へのロマン主義、その理論的反映としてのマルクス主義的方法的基礎たる唯物弁証法の放棄は、雲上の「党建設」路線、徹底した軍事召還主義をもたらし、それは党は武装闘争、労働者大衆は平和デモ、或いは、インテリは政治闘争、労働者は経済闘争といった馬鹿げた機械的見解であり、彼等が常に、闘いを放棄している限りは、組織のサークル化、武装闘争を展開すれば、具体的政治課題と結合しえぬが故の軍事政治主義——戦闘団主義——遊撃戦主義化といった両者の間を動揺するのは当然の實踐上の帰結であり、又、労働者大衆と結びつかず、正しい政治方針を持ち合わせない「党建設」は当然にも組織規律の形骸化を生み出すものである。

「プロレタリアートの革命党の規律はなにによってたもたれるのか？ それは何によって点検されたのか？ なにによってうちかためられるのか？ それは第一に、プロレタリア前衛の意識、革命に對する献身、その忍耐、自己犠牲、英雄主義によってである。第二に、彼がきわめて広範な労働者の大衆、まず第一にプロレタリア的勤労大衆と、だがまた非プロレタリア的勤労大衆とも結びつき、彼らに接近し、必要とあればある程度まで彼らと分けあう能力によってである。第三に、これらの前衛が行なう政治的指導のただしさにによって、彼らの政治的戦術によってである、——ただし、これはもともと広い大衆が自分の経験にもとずいて指導のただしさを納得するという条件の下である。これらの諸条件がないと、実際に、ブルジョアジーをたおし、全社会を改造しなければならぬ先

進的階級の党たるにふさわしい革命党の規律は、実現できないのである。これらの条件がないと、規律をつくりたさうという試めは、不可避的に、つまらぬものに、無意味な文句に、道化にかわってしまふ。」(レーニン)「共産主義における「左翼」小児病」)

再び繰り返そう。

この戦國的、左翼的翼の軍事をめぐる病氣は、成長に伴う病氣であること。
われわれは、蜂起への今日の前哨戦の中で味方陣陣に生れた「幼年期」特有の混乱の一つであるこの病氣と、プロレタリア的嚴格さプロレタリアの持続性をもって、理論的、組織的、政治的に対決し教訓化し、しかも、こうした傾向の誕生の理論的、実践的根拠の解明、教訓化だけでなく、貴重な血の犠牲を払って蓄積された「軍事と非合法」をめぐる技術的側面をも全て教訓化し、又、日本階級闘争の烈火の試練の中で打ち鍛えられることによって、プロレタリア解放軍としてふさわしい剛毅な「党風」を確立し、誕生すべきボルシェヴィキ党の中核的組織たりうるに相違ない。

Ⅲ 昨秋、わが会の軍事路線上の諸問題と軍事水準の高度化のため

一略

敵対するに違いない日和見主義、合法主義の黒田・革マル主義潮流この典型的な公然たる反レーニン主義の道、或いは、それ等への中間主義の道を歩むのか、それとも革命的左翼の「世界革命、プロレタリア革命、レーニン主義の復権」の革命的伝統を継承し、それを真のボルシェヴィズムに鍛えあげる道を歩むのかとある。

十余年の日本階級闘争の歴史は、かつて「黒田か、雁、陰明か」という、問題設定自身誤つてはいるが思想上指摘されたものが、今日では、より具体的にそれらの政治的評価、日本階級闘争におけるそれらの客観的役割と結合して、その「対立」の真の意味を指摘しうるようにさせている。

経済主義・半無政府主義の反レーニン主義潮流は、組織上混乱としていたが、総体としての特徴は、ボルシェヴィズムとスターリン主義を同一化し、ボルシェヴィズムの核心点を公然と批判し、反代々木の「党派性」を、種々の流行の文学的言辭で飾りたてながら、歴史・世界認識の不可知論、変革の実践や共産主義的活動の相対化・非系統的活動の否定、「『党』大衆」運動の止揚「云々の組織的活動への否定的態度、プロレタリアの規律性、ねばり強さへの反撥とつた小ブル的側面に置いていることを特徴とする。

黒田・革マル主義の反レーニン主義は、来るべき日本革命を帝國主義心腹部の革命と、旧植民地・半植民地国の革命の結合として捉えず、排外主義的イデオロギーを播き散らし、新左翼運動を、スターリン主義批判を媒介にしてロシア革命と世界革命の精神であるレーニン主義の復権を聞いとる点におかず、帝國主義打倒なき「反スタ運動」におしこめていた点でも、又、理論的にも、「國家の実体主義的理解」なる言葉にあらわれたレーニン「國家と革命」の否定

第四章 会組織の飛躍の革命的意義と直面した諸困難

一略

第五章 誕生すべきボルシェヴィキ党の中核的組織としてふさわしい規律を獲得しよう。

I われわれはどういう遺産を拒否するのか

—新左翼運動の革命的翼と日和見翼の分岐点について

五〇年代後半に誕生した新左翼運動の十余年の歴史の重みは、特に、六七年秋以降の激動期を経ることによって、六〇年安保闘争の直後では端緒的、潜在的であった新左翼運動の革命的翼と日和見翼の分岐点が、——現在、党派的に細分化し、無数の政治サークルが散在し、相互に抗争しあい、誕生しては消えたりするといった、「戦国時代」にもかわらず、——いよいよ明瞭になってきている。「ボル通り号」で既に指摘したが、新左翼運動の日和見翼と革命的翼の重要な分岐点は、しかも、浮動的なものでなく、日本革命運動の全歴史の中で、潮流的分岐点は、革労協や叛旗派や一部の新左翼評論家どもが代表する経済主義・半無政府主義の潮流、又、マルクス主義を形而上学化し、「戦國的唯物論」を放棄し、蜂起にも

「党の機能主義的理解」なる言葉にあらわれた「蜂起を組織する党」の否定、「党の政治主義的理解」なる言葉にあらわれた「職業革命家の組織」の否定、「党は共産主義の母胎」なるベルンシュタイン流の共産主義の減少化等々でも何うことができる。彼等の全共闘バリケードからの逃亡は、将来の労働者評議会のバリケードからの逃亡を示唆しているといえるだろう。

又、経済主義・半無政府主義潮流への中間主義流派、大衆運動主義・党自然生長論的部分の典型的党派は、マル戦・岩田弘グループ情況派、旧構改二派、特に共労党等をあげることができよう。

党派評価は、その党が、日本の規定と革命の性格を、——抽象的なプロレタリア革命の強調だけでなく——如何に具体的に理解しているか、又、決戦に向けて如何に革命党を組織し、階級を打ち鍛えようとしているのか、又、現在の情勢を如何に理解し、任務を設定しているのか、現在の日本階級闘争に如何なる態度をとっているか等々と総体的にみればならぬ故に、新左翼運動の革命的翼と日和見翼の分岐点の性格や現在の諸党派の位置についての詳細な分析は別の機会にゆずることとする。

われわれの進路は明瞭である。

われわれは、過去の新左翼運動の反レーニン主義的遺産を全て残らず拒否する。

われわれは、一点の曇りもない確信をもって、ボルシェヴィズムの道を、日本革命と世界革命の勝利への道を進撃する。

a、新左翼運動の分岐点の理解を放棄することの日和見主義について

革命的左翼諸党派の組織的細分化、無数の政治サークルの存在、

主観主義的傾向の全面開花、こうした危機的現状にわれわれは、ただただ見をうらばれて、然とし、その後で確実に胎動している共産主義運動のボルシェヴィズムか反ボルシェヴィズムかの潮流的
分岐を見逃すこと、或いは、その分岐を、その困難故に、理論的に
も、組織的にも、実践的にも自覚的に聞いて、押し進めることを放棄
することからも無縁であらねばならぬ。

一部では、例えば旧M.L.同盟系の一部の諸君がそうだが、「大衆
路線」と称して、労働者大衆のもとで活動することをもって「安住」
し、今日の革命的左翼内の党派闘争・党派論争・党派再編の意味す
るものに肉薄し、又、その混迷の政治的背景を把て教訓化し、真の
革命党を組織する意識性を放棄する傾向がみられる。

こうした共産主義的意識性の抜け落ちた「大衆路線」は、俗流大
衆路線であり、それは又、いかに真面目で、献身的活動であつても
国家権力に対する敗北主義である。

「マルクス主義の日本の確立」は、決してただ単に労働者大衆の
下で活動することで自生するものではなく、現在の日和見主義的諸
傾向と執拗に対決し、マルクス主義の革命的原則を確立するため
闘うこと、このことよつて始めて、われわれは日本におけるマル
クス主義の創造的展開を、日本革命の思想を獲得しうるに相違ない。
レーニンのロシア革命思想、ナロードニキとの闘ひ、メンシェヴィ
キ、エスエル、或いは、第二インター系諸党派との鋭い対決、政治
的グループ分けを起点にしたプロレタリア階級闘争の全体的把握を
想起せよ、

り、「戦争派」か「人民派」かの分類の不正確について

「戦争派」と「人民派」とへの、軍事主義と大衆運動主義とへ
の二極分解とその根底的止揚としての革命党の建設への志向——日
本の革命的左翼をつらぬくこのような歴史的分化・再編の傾向性、
否、単一のプロレタリア世界革命勢力の形成にいたる長い道のりに
おいてすべての国の革命的左翼勢力において、同時代的に発生して
いるこのような対立と闘争は、わが党内闘争に投影しかつわが党内
闘争によつて代表されているのである。」

これは、昨年十二月二日「統一」紙上に発表された共党中央
常任委「統一」編集局の声明である。

八九年春以来の共産同の分解とその実践上の混迷を教訓化し、又
学生戦線では、バリケードなき全共闘運動のバルチザン派と人民派
への分解の真の意味を総括し、実践的指針として、一貫して、共産
主義的活動、大衆路線と軍事路線とを、政治闘争と武装闘争、武装
蜂起とを、一言でいえば、プロレタリア政治とプロレタリア軍事と
を対立化させる傾向と闘つてきたわれわれにとつて、この共産党の
「何周遅れ」かの、しかもひどくふやけた党内闘争にはうんざりす
るが、しかし、「戦争派」、「蜂起・戦争」か、或いは、「人民派」
かといった点に、日本新左翼運動の潮流的分岐をみようとする見解
が広範に存在するので、論評してみよう。

結論をいへば、階級闘争の軍事問題に如何なる態度をとるのかと
いう問題は、軍事が「政治の最高の表現である」という意味で、一
つの政治問題ではあるが、しかし、この「戦争派」か「人民派」の
分類は、極めて現象的で、部分的であり、今後紆余曲折を経ながら
も、鮮明な潮流的分岐を浮き出すに相違ない日本共産主義運動の現
在の本質的、総体的分岐を表現しているものではない。

われわれが興味を持つべきなのは、この分類の当事者自身が誤つ
た革命観を持つており、ボルシェヴィズムの深い意味を理解してい
ないことである。

「みじくも、レーニンが『なにをなすべきか』の著作で浮動的な
経済主義とテロリズムは親類であることを指摘したように、或る場
合は「軍事派」と「人民派」は同一の病根を持つものである。

例えば、全共闘バルチザン派は、「軍事派」でも「人民派」でも
あるが、この流派は、既に述べた反レーニン主義の一つの道たる経
済主義・半無政府主義潮流の中にいれられるべきである。

「軍事派」か「人民派」かを現象的に分類し、両者のどちらかに
自己の唯一の「党派性」をかけてきたものにとつて、蜂起を呼びか
ける十月のレーニンの姿と、一九二〇年「左翼小児病」、二一年コ
ミンテルク三回大会等の大衆の中へ、反動的労働組合でも活動せ
よと説くレーニンの姿は、永遠に分離したものととして映るに違いな
い。

革共同中核派と革マル派を同列化して分類することの誤まり
「革共同両派打倒」という主張は、革労協、共産同戦旗派や一部
の無党派活動家にみうけられるが、これは誤っている。

この主張は、一つは、革労協や一部無党派活動家のように、「中
核派も革マル派も小ブル的疎外物たる党至上主義である」とつた
経済主義、半無政府主義の視角からなされており、特殊に共産同戦
旗派は、「第一次共産同に帰れ」と称して、黒田哲学や反帝・反ス
タ戦略等革共同イズムを輸入することよつて、革命的左翼の現在
の飛躍の課題、革共同第三次分裂とわが中核派の現在の訓練と動揺

の歴史的性格が見抜けず、それ故の御都合主義的視角からなされて
いる。

中核派は、新左翼内反レーニン主義の一潮流たる黒田・革マル主
義とボルシェヴィズムとの中間主義、特に思想的、中間主義であり、
再び、「帝国主義と植民地問題」が革命運動の戦略的課題となつて
きた情勢は、又、この数年間の激闘の中で示した中核派の余りに反
動的な革マル派との実践的分岐の姿勢は、当然にも中核派の綱領的
出発点たる黒田哲学や反帝・反スタ戦略の空洞化を公然のものとし
た。

入管闘争で、革マル派によつて「アクロの毛沢東主義への屈服」
（これは許しがたいほどの愚劣な問題意識からなされているが）と
批判され、又、入管闘争を闘っている先進的部分から直感的にせよ
中核派の反帝・反スタ戦略批判が高まるや、中核派は、過去の武井
健人による中国赤色帝国主義流の主張をはおかひりして「毛沢東
主義の内在的批判」（中谷論文）と称してみたり、彼等の反帝・反
スタ戦略の屋台骨は揺れ揺れ動いてゐる。（「ボル通2号武井中
ソ論争論批判」参照）

帝国主義心臓部の日本革命が、旧植民地、半植民地国の革命運動
と連動し、爆発する情勢が近づけば近づくほど、又、中核派が革命
的左翼の陣営にとどまらんとし、革命的左翼と革マル派との党派闘
争が激烈に左れば左るほど、黒田理論と血を分けた中核派の危機と
動揺は急速に深化していくだろうことは推測に難くない。

誤解のないように、最後にこのことを付け加えておこう。
われわれは、現在の革命的左翼の党派間統一戦線の現状を固定化

し、そこに「革命的翼」と「日和見的翼」の本質的分岐を流しこむ逆転した方法を、実践上の日本革命運動と労働運動の発展の利益に無責任な御都合主義的態度をとるものではない。

われわれは、現在の階級運動全体の利益を代表し、ボルシェヴィズムの勝利を闘い、この為に極めて柔軟な統一戦線と統一行動を意図的に追求するものである。

われわれは、「日和見的翼の武装反革命への転化」なる恣意的主張よりは、次の無党派活動家の素朴な概嘆に味方する。

「やれやれ、昨日の革命的左翼が、数日で『反革命』になるとはまあ、党派は気まぐれだから、その内また変るさ。」

■ 原則なき暴力的党派闘争主義とボルシェヴィズムの勝利のための党派闘争・対立の処理の形態について

a、われわれによる社共の議会主義化、体制内化を粉碎し、日本労働者階級の真の前衛党を生み出す闘い、新左翼運動の分岐をめぐる闘い、革命的左翼の党派闘争・党派再編の闘いのもつ政治的性格は既に述べた通りだが、われわれは、特にこれにつけ加えて、現情勢で、ボルシェヴィズムの勝利のため、党派闘争・党派再編は、如何なる手段でなされなければならないのか、革命的左翼内部の党派闘争・対立は、如何なる形態で処理されるべきなのかを明らかにしよう。というのは、昨秋期、「内ゲバの季節」といわれたように、かつてなかつた程の「内ゲバ」が顕発し、又、日和見主義者による革命的武装襲撃が画策され、党派闘争・対立の処理の形態をめぐる問

内部の原則なき「内ゲバ」を同視することは誤っている。その理由は、これ迄の論述で理解できるだろうが、革マル派なる「先進国主義」の愚劣な組織は、権力には徹底した日和見主義でありながら、早大等でみせているように他党派はおろか、彼等に当然にも反発するべし運に到るまでテロ、リンチを加えるといった、「党派利害」に關しては極めて「戦闘的」な組織である。

彼等は、運動の先進的部分が何故、反革マルとなるのかを自己の共産主義的指導と政治路線の問題として把え返し、検証しようとする姿勢すら全く欠落した口先だけの「プロレタリアの主体性」論者である。

第二は、昨秋の「内ゲバ」に共通する傾向は、既に述べた新左翼運動の今日の試練、政治的分岐点に一切無自覚のまま、更にその上に、現情勢で党と運動の発展にとって、最も有効な党派闘争・対立の処理の形態は、何かという共産主義者として当然の問題意識を欠落して、革命的左翼の党派間統一戦線に対する、党建設と日本階級闘争に対する小ブル浮動の見解をとっていることである。

或る場合は、党派闘争に「内ゲバ」なる見解までみられる。こうした見解も、勿論、誤っている。

さて、われわれは、現在の情勢で、革命的左翼内部の党派闘争・対立の処理の形態の問題について、誤解を恐れず、わが会の基本原則と姿勢を明確にしておく。

たしかに、処理の形態だけを抽出して論じることが、「一般論」にながれる危険があるが、何もかわらず、われわれは、「内ゲバ問題」が、わが陣営の中で公然と政治問題として取り扱われていないという現状では、やはり一定の意義をもっているに判断する。

題が、極めて重要な政治的問題となってきたからである。

われわれは、現在、この原則なき暴力的党派闘争主義を「誤まっている」と思いつつ沈黙していたり、「必要悪だ」といった中途半端な態度をとってはならない。

というのは、共産主義の運動は、真理でないもの、正しくないものを、最も憎悪するものであり、誤謬を切開せず、隠蔽し、克服しようとする態度を許さない。

又、共産主義の運動は、その目的と手段についての価値判断の二元論を存在させるものではない。

「必要悪だ」という見解は、資本家どもの「目的は解るが、手段は間違っている」といった目的と手段に関する価値判断におけるブルジョアの二元論である。

われわれの運動の発展にとって必要なもの、これはすべて「正しい」のであり、阻害物となるもの、これはすべて「悪い」のである。ところで、第一章で述べたように、われわれは暴力的党派闘争一般を論評することはできない。

敵の攻撃、先進的階級の政治的自覚の発展段階といった情勢の煮つまり、又、暴力的党派闘争の当事者の政治的性格、対立の性格等々が考察されないで、暴力的党派闘争一般に反対することは、又、絶対平和主義に席をゆずるものである。

われわれは、ここでは、昨秋期みられた暴力的党派闘争をめぐる誤つた見解を簡単に指摘し、われわれの現在の情勢の下での党派闘争・対立の処理の形態に關する基本的原則を明確にしておく。

まず第一に、革マル派による革命的左翼に対する計画的な反革命的武装襲撃と、六七年来の日本階級闘争を牽引してきた革命的左翼

第一は、われわれは、革命的左翼内部の共産主義者とその組織の間との闘争・対立の処理の形態に關して、暴力的手段を使用することにはは無条件に反対し、又、革命的左翼の革命的伝統の歴史に、小ブル浮動的な「内ゲバ」の習慣は一切存在しないという「作風」を刻みこむために闘わなければならない。

われわれのボルシェヴィズムの勝利のための闘いは、党派闘争・対立の処理の形態をめぐる問題をも当然含まれるものである。

当然、階級対立の一つの表現として党派対立がある以上、「非暴力」一般に意味附与するのはマルクス主義的ではない。

自覚したプロレタリアートは、現在の社会の全ての道徳や倫理的規範に対して否定的態度をとるのである。だが又、プロレタリアートは資本主義社会で没落する小ブルの一部が陥っている、唯物(タダモノ)主義、自然主義にもついた素朴なヒヒリズムや、安楽椅子に坐ったショウベンハウエルの厭世哲学の信奉者でもない。

プロレタリアートは、資本主義社会を根底から覆し、新しい社会の経済、政治、文化、思想、倫理の組織者である。

勿論、特に、資本主義社会の下でのプロレタリア運動、革命運動における、共産主義者の行動の規範を「書齋」の中で規定しようとするのは馬鹿げている。

だが、われわれのさきに示した原則と姿勢は、「内ゲバ」が日本革命運動と労働運動の発展のための阻害要因としてあり、われわれが必ず克服すべき課題として歴史的に直面しておりそれ故に、その「作風」は意識的に闘い、とるべきものとしてであると指摘しているものである。

考えてもみたまえ。こうした小ブル浮動性の一つの現象しての原

則なき暴力的党派闘争主義は、もしそのまま、強力な国家権力を獲得した時代を想定すれば、スターリンの粛清をはるかに上回る陰惨な事態を招き社会主義の建設を挫折させるものとしてあらわれるのではないだろうか。

第二に、われわれは、党派闘争とは異なるが、それと密に不可分な問題であるところの、革命的左翼の諸党派による先進的部分、大衆への強制的態度に反対し、われわれは、説得と教育の手段によって、先進的部分と大衆を獲得しなければならぬ。

原則なき暴力的党派闘争主義は、革命運動への貧困な思想、共産主義的指導と大衆路線に対する硬直した態度からも、もたらされてくるものである。

このことは、先進的部分と大衆が、誤まった思想と指導に影響されているのを容認することではない。

われわれは、労働者大衆は、必ず、真のマルクス主義、ボルシェヴィズムを発見しそれと結合するものであるという深い確信に満ちているのである。だからこの確信の下で、われわれは、日和主義者には信じられない程、徹底して、ねばり強く、執拗に、説得と教育の手段でもって先進的部分と大衆を誤った思想と指導から解放し、われわれの下に獲得しなければならぬ。

最後に、日和見主義組織による暴力的手段によるわれわれの組織への実体的攻撃、革命的な大衆闘争への敵対は、必ず粉砕されなければならない。

こうした反革命的武装攻撃に対して、「われわれは、権力との闘いが最も重要であり、日和見主義組織はわれわれの大衆の左闘いの組織化の過程のりこえられるべきである。」という普遍の原則を掲

げて、その攻撃を放置するのは決定的に誤まっている。
レーニンの革命的現実主義は、「普遍の原則」を持つていては、でなく「特殊化」の原則をも、一言でいえば、「結節環」の思想をも持つていて。

或る情勢では、日和見主義組織の反革命的武装襲撃・敵対に対して、われわれの全精力を投入した鉄鎚を下すことが階級的責務となる場合もある。

例えば全共闘運動の歴史が教えているように、彼等のその行動を粉砕することによって、又、唯一、そのことによつて、革命的に大衆闘争を牽引し、権力に打撃を与えることがあることを胆に銘じておかねばならない。

われわれの「外ゲバ」には革命の原則があり、——権力に対する闘いですら運動全体の利益を代表する——という原則があるように、——従つて又、われわれの「外ゲバ」は常に、その闘いの革命的・政治的意義を公然化し、「ゲバ」一般に反撥する部分へ説得、教育がなされるものでなければならぬ。

刻々と変化する階級相互の關係、諸党派の政治的評価、党派間対立の性格、その処理の緊急性等の複雑な諸条件の下で、われわれは最も適切な党派闘争・対立の処理の形態を発見し、断固として実践することが如何に困難であるかを熟知している。

だが、このことに関するわれわれの基本原則は、——又、われわれの活動と闘いの全てがそうであるが、——労働者階級の解放のための運動全体の利益を、換言すれば、日本共産主義運動におけるボルシェヴィズムの勝利・革命党建設と階級運動の発展の利益を、しかも、浮動的なその場その場の集會やデモの利益からだけ考える

のでなく、——代表すること、唯一、このことだけである。

Ⅲ ボルシェヴィズムの勝利をにかけて、烈火の七二年 日本階級闘争を牽引しよう！

a、今、全国を警察テロルの嵐が吹荒れている。

帝國主義世界の一層の危機の深化の下で、アジア侵略・反革命をなすとけんとする日本帝國主義は、先行的に国内反革命体制、特に戦前・警察支配を上回る強権的警察支配を確立し、革命的な共産主義運動の組織的破壊を画策している。

昨年、津浦、三浦、叛軍、入管諸闘争、日本階級闘争の最先頭で、領導してきたわが会の方強い前進に対して、国家権力、警察は、全く不当な組織的攻撃をかけた。

つい先日、昨年十一月、官選返還協定粉砕北大阪制圧闘争の「指導者」という名目で、われわれの二名の同志を不当逮捕し、更に又、ブルジョア・マスコミを使って、われわれへの「爆取」や「殺人罪」適用攻撃の準備を強めている。

いや、わが会だけではなく、昨秋期の中核派への実質的な組織的破壊法適用にみられるように革命左翼総体への権力・警察の攻撃は一段とエスカレートしてゐる。

かかる攻撃に対して、われわれは、常に一つ一つの攻撃を正しく教訓化し、革命的警戒心を高め、秘密活動の領域を一層拡大し、そしてたによりも次の課題を中心にして日本階級闘争の怒濤の進撃を組織化することによって、断固として反撃しなければならぬ。

- ① 自衛隊沖繩派兵実力阻止 / 沖繩返還協定・実質化粉砕 /

(次号ボル通臨時増刊号参照)

- ② 全共闘運動を教訓化し、全国学園ゼネスト・占拠で国公私立大学授業料値上げを粉砕しよう！
- ③ 三里塚農民と共に、第一期工事粉砕 / 一番機を飛ばすな / 攻撃的叛軍闘争を推進し、核武装、海外派兵、徴兵制、治安出動を目指す自衛隊の帝國主義軍隊化を粉砕しよう！
- ④ 在日アジア人民に対する分断、抑圧、同化、追放体制 / 入管体制粉砕！
- ⑤ 部落差別を許すな / 狭山差別裁判徹底糾弾 / 石川青年即時奪還！
- ⑥ 刑法全面改悪 / 保安処分粉砕！
- ⑦ 「不況」名目の合理化、首切り、賃金カット等労働者へのしわよせを粉砕しよう！ 七一年春闘に戦闘的階級的労働運動で勝利しよう！
- ⑧ 米帝をアジアから叩き出せ！
- ⑨ 南ベトナム共和国臨時革命政府の「七項目提案」断固支持！
- ⑩ ニクソン「八項目提案」粉砕！
- ⑪ 日「韓」台反革命体制の強化粉砕！
- ⑫ 日「韓」条約 / 日台条約粉砕！
- ⑬ 中華人民共和国即時承認！
- 等々

b、われわれの軍隊を、職場・工場を基礎に全人民の中へ /

c、一九七二年を、ボルシェヴィズムの勝利への進撃の年とせよ。
以上の七二年の闘いと組織活動の勝利を保証するところの鍵であり、われわれの前提的任務は、なによりも、われわれの共産主義的主体としてのより一層の確立、七〇年代日本帝国主義心臓部の死闘を指導しぬくにたる「革命の組織」としての思想的政治的水準を獲得することである。

一九七二年、この年を、労働者陣営の中では、全戦線にわたって其共の社会排外主義、社会帝国主義への純化との闘いを強め、又、新左翼運動の一つの反レーニン主義の道、活動や活動態度にあらわれた小児病的諸傾向とも闘いぬき、日本労働者階級の最良の分子をわれわれの下に結集し、ボルシェヴィズムの勝利への進撃の年としてより。

現在のわれわれの闘い、ボルシェヴィズムの勝利と真の前衛党建設の闘いの歴史的意義とは一体何だろうか。

国際共産主義運動ではどうか。

それは、レーニン主義を放棄し、マルクス主義を形而上学化させたスターリン主義によってその成長と完成の道を与えられ、旧コミンテルン系諸党指導部に巢喰っている現代修正主義潮流の影響から国際プロレタリアートをとき放ち、新しいコミンテルンとロシア革命に続く永続的な世界革命の完遂を闘いとるものとしてある。

又、日本共産主義運動ではどうか。

それは、国際的な現代修正主義潮流と日本で歩調を合せた代々々「共産党」の杜民へ底知れない深い墮落、労農派・協会派等の日本合法マルクス主義潮流への完全な屈服に抗して、真のプロレタリア前衛党を組織する闘いであり、同時又、スターリン批判を直接契機

も、強盗戦争に「協調」した「合法左翼」どもによって、虚ろに云々されただけであつた。

そして現在の日本帝国主義の復活、戦後世界体制の崩壊の開始―帝国主義間矛盾の顕在化、アジア民衆の反帝民族革命の飛躍的前進といった情勢の只中で日本帝国主義のアジア侵略・反革命の動向は、いよいよその心臓部における反帝統一戦線の成熟の客観的可能性を与えるに違いない。

永続的国際通貨危機にあらわれているように資本主義列強間の対立、競争の激化は、必ず日本独占資本による産業構造の再編成、合理化、労働条件―生活条件の改善といった労働者からの擲取、収奪の強化を招き、そのことは、労働者大衆の資本主義的奴隷制への反抗の激化を不可避とするし、又、「農業自由化」や日本資本主義のアジア反共諸国との経済的結合や国独資国内政策は、農村を荒廢させ、農民層の零落化をもたらし、農村にも危機を累積させる。

更に、日本帝国主義者による労働者人民からの民主主義的諸権利の剝奪、露骨な「併合」、民族的抑圧、反動」への攻撃は、反戦、反基地、叛軍闘争や、種々の民主主義的課題をも含んだ闘いを爆発させるだろう。

しかも、「社共統一戦線」がその反動性を露わにし、闘う労働者人民のそれからの離反が、一層進行することによって、革命的左翼の指導による労働者人民の無数の「闘う意志」の組織的表現としての反帝統一戦線が現実的課題としてのぼってくるのは疑うべくもな

い。そして、この帝国主義心臓部の反帝統一戦線は、既に提起されているアジア人民の「反米帝・反日軍統一戦線」の一環として闘い取ら

とし、スターリン主義批判を媒介にして、日本におけるマルクス主義の革命の原則とレーニン主義の復権という革命的左翼の根本趣旨を継承することもに、階級闘争の試練の中でその「幼年期」特有の左翼反対派的政治と小児病的傾向を掃蕩して、真のボルシェヴィズムへの打ち固め、鍛えあげていくものである。

戦後史を画する沖繩返還の年のわれわれの階級的責務は重大である。

日本帝国主義は自己の戦後史を清算し、日米同盟のより侵略的革命的再編・強化をもって、再びアジア侵略・反革命に乗り出しつつある。

そして、今後、日本共産主義運動は、再び、一九三〇年代初頭と類比しうる、敵しい、試練を迎えていくに相違ない。(勿論、われわれのこの見解は、反帝反スタ戦略故に、戦後アジアの階級闘争と帝国主義の動向の特殊性の考察を欠落させた中核派の「三〇年型危機へのラセンの回帰」の見解とは異なるものである。)

一九三〇年代初頭、日本共産党は、天皇制国家権力による世界に類例の少い専制的攻撃にさらされ、又、白色テロルの嵐によつて、いや六回大会の影響を受け、社会ファシズム論的な戦術上の誤謬を犯すといった主体要因をも加重することによつて、ブルジョアの仮面すら投げ棄て遂行された日本帝国主義の中国大陸での強盗戦争に対して、強力な労働者人民の反撃を組織することもなく壊滅してしまつた。

そして、擲猛な日本帝国主義の侵略戦争と対決する革命的統一戦線は、その指導的部分たる共産主義政党的の壊滅状態故に、現実的課題となりえず、ただその後のコミンテルン七回大会の人民戦線戦術

れるだろう。

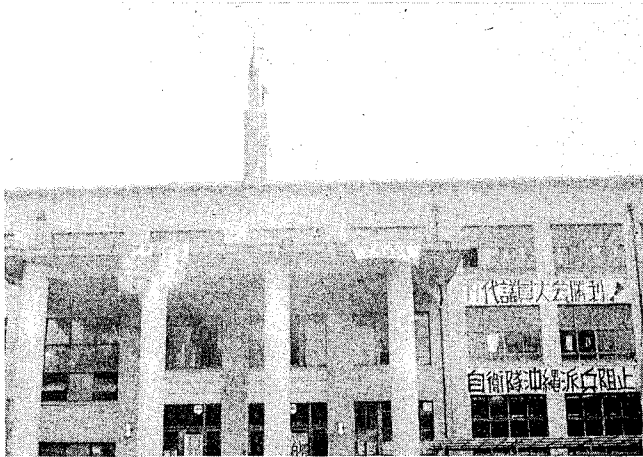
真の革命党の政治的組織の指導力の貫徹した統一戦線とは、帝国主義国家権力の強大な攻撃に対する労働者人民の防衛的契機を出発点にしつつも、共産主義的指導に媒介されることによつて、全ての労働者人民を帝国主義と根柢から対決させ、政治的に訓練するといった極めて明確に攻撃的性格を持った組織戦術である。

いまでもなく、現在客観的可能性としてある反帝統一戦線を、蓋然性へと、現実性へと転化し、それによつて実際に強力に闘いが展開されるためには、革命的左翼内部でボルシェヴィズムが圧倒的に勝利し、その革命的伝統の歴史の重みが全戦線で定着化し、プロレタリアの分子の最良の部分を下に結集していることを前提にする。

おわれわれの七〇年代初頭の革命的左翼の危機を打ち破り、単一の革命党を組織する闘いは、まさにこうした歴史的意義をもつものであり、その成否は、革命的左翼が、三〇年代日本共産主義運動の主体を乗りこえた思想的政治的水準を獲得しうるか、否かとしてある。わが会は、誕生すべきボルシェヴィキ党の中核的組織として確立されねばならぬ。

われわれは、文字通りの第一歩から、しかも革命的左翼内部にすら小ブル主観主義、日和見主義の諸傾向が大手を振ってまかりとがり、極めて嚴重な政治警察の支配と攻撃が強さつつある下で、真の革命党を建設するという異常な困難に直面している。

それ故、マルクス主義の革命的原則を確立し、この困難な現状に一步一歩打ち勝っていくためには、なによりも各会員の自己の活動への階級的自覚、「破私立公」の精神、不撓不屈の忍耐と英雄的実



闘う意志

(京都レーニン研機関紙)

第15号 1月10日発行

第16号 1月25日発行

1部 30円

残部僅少ノ

党建設者

(首都レーニン研機関紙)

創刊号

反戦通信

(反戦共闘会議機関紙)

創刊号 12月1日発行

第2号 12月15日発行

第3号 1月15日発行

1部 30円

踐とよらねばならぬ。

われわれは、革命の昂揚と沈滞の波の上に漂よう浮草的小市民で構成された泡沫の組織ではない。

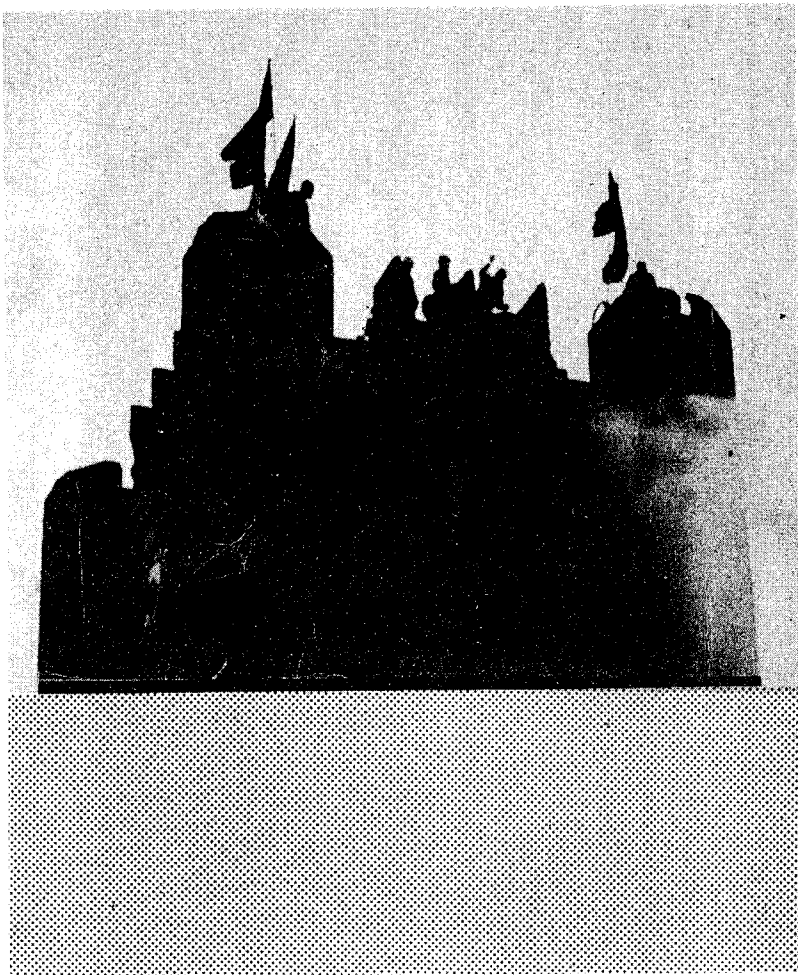
われわれは革命の進行が如何に緩慢であれ、プロレタリア的持続性と首尾一貫性でもって、何年かかろうとも真の革命党建設の任務を心得ているボルシェヴィキであり、歴史の審判への徹底した樂觀主義者でもある。

団結を強め、ボルシェヴィズムの勝利をかけて烈火の七二年日本階級闘争を牽引しようノ

全国の先進的労働者、学生諸君ノ
われわれと共に闘わんノ

米一頁の脱落部分

「ブルジョア思想に共通する「二元論」(或いは「多元論」)を方法的武器としつつ、「二つの敵論」、「敵の出方論」等を主張し、その修正主義と右翼日和見主義を隠蔽せんとしている。彼らの国際共産主義運動における歴史的位位置は先に指摘したとおりだが、日本共産主義運動ノ



闘争報告・方針

戦線報告・闘争方針

I

檄

京都での学費闘争の大爆発に続き、全国学費闘争に勝利せよ！

—— 京大C戦線・全学戦線

全国の労働者・学生諸君！ 京都における学費闘争の爆発を先頭になつて切り開いている我々京大C戦線・全学戦線より、全国の学友諸君が我々の闘いを引き継ぎ、国公立大学の学費値上げを断固として粉砕する闘いに決起されることを訴える！

日本帝国主義—佐藤政府は、一月十二日の臨時閣議で国立大学の学費の三倍化を決定し、労働者人民に対するあくなき収奪と革命的学戦線に対する攻撃をかけてきた。これに対し、我々は一月十五日教養部の中核たるA号館封鎖をもつて反撃の火蓋を切つた。我々のこの突出した闘いを受け、一月十九日には、史上空前の代議員を結集して教養部代議員大会が行なわれ、我々の領導する教養部ストライキ実行委員会の無期限バリケードストライキ案が圧倒的に可決された。同日、経済学部でも無期限ストライキが決定され、教養部とともに全国の国公立大学のトップを切つてストライキに突入した。京大では、全学闘争機関として学費値上げ阻止全学闘争委員会連合（全闘連）が結成され、現在、全十学部中五学部の無期限ストライキを含め、実に九学部でのストライキが克ち取られ、学費値上げ阻

止に向けた全学ストライキ体制に突入している。

京都では、各私大においても学費値上げが発表されており、昨年末から私大における闘いがまきおこつている。同志社では一月十三日の全学学生大会で全学無期限バリケード・ストライキが打ち抜かれており、花園大学、竜谷大学においても無期限バリケード・ストライキが克ちとられている。こうして京都の地において全国に先きかけて学費値上げ阻止の先進的—大衆的決起がかちとられているのは、まさに昨年六月以来、我々が全京都学生連合会の旗の下に、全共闘運動以後の革命的学戦運動を維持し発展させてきたからに他ならない。我々は、この京学連の旗の下に各大学の闘い、とりわけ私立大と国公立大の強固な結合をかちとつている。我々京大C戦線・全学戦線は京学連の最先頭に立ち、一・一・一・二〇と二度の全京都学生統一行動をかちとり、一・二五には無期限ストで闘つている関西大学、大阪大学の学友を中心に全関西の学友を同大学館に結集し、全関西総決起集会をかちとつた。こうした各大学での広範な闘い、そして全京都・全関西での統一行動をふまえ、全国学費闘争

の一大突破口として同志社大学入試紛争闘争を同大全学闘争の先進的
学友とともに、我々は京大全連の部隊を率い、断固として闘い抜
いた。全国の私立大の闘いが、権力と一体となった当局のロククア
ウトー機動隊常駐により圧殺されているのに対し、同大全学闘争大
衆的決起を基盤に、全国学費闘争の火花となるべく、一切の犠牲を
恐れず闘い抜いた。

京大全学ストライキ、同志社決戦の全成果をふまえ、我々は京大
全連連の提起による二。一 全国学費闘争勝利—自衛隊沖繩派兵実
力阻止—集中的弾圧粉砕 全関西大集会に全ての労働者学生諸君が
結集されるよう訴える/全関西で学費闘争を闘っている学友、首切
り・合理化・賃下げに対決して「春闘」を闘わんとしている労働者
を総結集し、革命的左翼の昂良の部分を総結集し、この春の沖繩へ
の自衛隊派兵阻止の闘いを担いえる強固な戦線の構築に向けた第一
歩としようではないか!

我々はこの学費闘争のなかで、学生大衆を思いきって立ちあがら
せ、多くの学生を新たに政治生活にまきこんでいる。大衆的決起に
対し、我々は系統的な共産主義的を指導と教育を行なっている。そ
のことによつて、学費闘争を経済闘争一般から全人民的政治闘争の
一環へ、日帝の侵略反革命に抗して武装蜂起—労働者権力を樹立す
る闘いの一環へと発展させなければならぬ。

全国の労働者、学生諸君! この国公立大学学費値上げが、他な
らない沖繩の施政権返還・自衛隊の沖繩派兵の年である一九七二年
に行なわれようとしていることにはつきりと注目しようではないか!
この学生総体、そして革命的左翼に対してかけられた攻撃をはねの
けることなくして、沖繩への自衛隊派兵阻止の闘いもありえないこ
とを確認しようではないか!

我々京大C戦線—全学戦線を最先頭とする京都での闘いの昂揚を
受け、全国で学費値上げ阻止の闘いを燃え上らせよ! 派兵阻止は
学費闘争の勝利なくしてはありえないし、学費闘争の勝利はその全
国化なくしてはありえない。全国の学友諸君、一切を恐れずに値上
げ粉砕に進撃せよ! 同大、京大に引き続き、全国学費闘争の大爆
発を!

戦線報告・闘争方針 Ⅱ

全国学費闘争を牽引し、学生戦線の混迷を克服する中から、
ボルシェヴィキ派の革命的學生運動を構築しよう!

——レーニンの學生運動論

△はじめに▽

- はじめに
1. 学費値上げ攻撃の意図と背景
 2. 学費闘争における先進的活動家の思想的・実践
的混乱
 3. レーニンの學生運動論について
 4. 革命的左翼の分解—諸戦線の分断と、共産主義
的政治指導の欠如の下での先進的活動家の思想
的・実践的混乱とは何か
 5. 全共闘運動とその後の混乱の教訓をふまえ、全
国学費闘争の大爆発を克ちとる中から、ボルシ
ェヴィキ派の革命的學生運動を構築しよう!

現在、京大・同志社・関大・阪大をはじめ全国の国公立の各学
園のいたるところで学費値上げ阻止の闘いが、無期限スト・パリー
ードスト・封鎖・占拠等、あらゆる形態で闘われている。しかし、
我々は、この闘いの中においても、全共闘運動の豊富な経験、特に
その終息以降顕著になつた混乱が十分に教訓化されていないことを
認めなければならない。学生戦線は、現在の大衆的・全国的な学費
闘争の昂揚の中で、全共闘運動の終息—十一月決戦の敗北以降の、
とりわけ八派共闘の崩壊以後の混迷と分散化を克服しなければなら
ない。その為、現在、學生運動の政治指導—學生共産主義者に問
われている任務を、しっかりと把握する必要があるだろう。我々は、
レーニンの學生運動論はその基礎になりうると考えている。

京大・同志社の闘いを中心に全国学費闘争の爆発を牽引し、大衆
的決起と突出力を背景に、ボルシェヴィキ派の革命的學生運動を構築

し、中小・未組織労働者を中心とした鋭い力で、官公労、民間大企業労働者の闘いを含む戦闘的・階級的労働運動の展開をもちとつている労働戦線と結合しよう。現在、国際通貨体制の一切の矛盾を、大量解雇・減給・賃金カット、合理化・差別分断支配・職場秩序の強化、公共料金—諸物価の大巾値上げの集中攻撃として、労働者人民、とりわけ下層・被差別人民に押しつけんとするブルジョアジーに反対し、労働者人民の決起は「春闘」を中心に、民同の屈服をのりこえて進展しつづめるのだ。全国学費闘争の爆発を、「春闘」を中心に、それをのりこえる労働者の闘いと結合させ、日帝のアジア侵略・反革命の全面的開始の中心軸に自衛隊の沖繩派兵に体现される日帝による沖繩の侵略前線基地化・自衛隊の帝国主義軍隊としての完成を粉砕する統一した強固な闘いと戦線を構築しよう。「本土」—沖繩人民の階級的団結・大衆的決起・徹底した武装闘争で自衛隊の沖繩派兵を実力阻止しよう。学生戦線は総力で決起せよ！

1. 学費値上げ攻撃の意図と背景

現在、国立大三倍、公立大一、五倍、私立九〇数校における大巾値上げとかけられてきている国公立大学学費値上げの集中攻撃の意図と背景は何か。

インドシナ革命戦争を先頭とするアジア人民の革命闘争を強行突破すべく、日米反革命同盟の再編強化の下、アジア侵略・反革命を全面的に開始せんとしている日帝—佐藤政府は、死にもの狂いの権力再編—市民社会末端から中央にむけての国民統合を強行せんとしている。学費値上げ攻撃は、日帝—佐藤政府が、次の三点として指摘できる労働者人民総体への収奪—抑圧—統合の強化の攻撃として

「極めて高度な政治判断にもとづいて」かけてきたものである。

① 私学においては人民に対する直接収奪の強化。

国立大においては、私学学費値上げ、公共料金大巾値上げにむけた政治的イデオロギー攻撃—「受益者負担、独立採算制の原則」の貫徹としての側面を強くもつ。

公共料金の大巾値上げは、国際通貨・金融体制の大再編期での苦況を労働者人民、とりわけ下層・被差別労働者人民（中小・未組織労働者、日雇、臨時労働者、在「本土」沖繩人民、部落人民・在日アジア人民等）におしつけるべくかけてきている攻撃の一つ。大量解雇・減給・賃金カット、合理化等の攻撃とともにかけられている大巾なインフレ政策の中心環。人民からの二重収奪の強化。② 教育の帝国主義的再編—中教審路線の一環として。学費値上げと奨学金制度の「拡充」は、教育コースの多様化の中で、教育過程における学生の選別・差別・分断・管理の強化。学生運動に対する攻撃としてもある。

③ 革命的左翼、とりわけ最左派に対する徹底的な弾圧、組織破壊攻撃の一環としての学生戦線に対する壊滅作戦、挑戦。学園闘争を個別に分断し、強権的に封殺するか、各個に殲滅する。

この三点をからめて、「高度な政治判断」の下、かけられてきている攻撃に対し、経済的要求、教育過程での抑圧と帝国主義総体に対する漠然とした不満を基礎に結集する広範な学生大衆が、いかに日帝のアジア侵略・反革命への全面的対決—資本主義の総体的批判を、思想的・実践的に獲得するまでに発展するのかが問われているのである。

2. 学費闘争における先進的活動家の思想的・実践的混乱

革命的學生運動を構築する闘いの中で最も重要な点は、プロレタリアートの解放の事業の一環として、自らの学生戦線における活動を位置づけることである。現在の状況において、それは、インドシナ革命戦争を先頭とするアジアの革命闘争の前進に促え、日帝のアジア侵略・反革命に抗し、世界革命の主戦場を帝国主義心臓部において切り拓くべく、日本における武装蜂起を実現し、労働者権力を樹立する闘いの一環である。学費闘争も、そのように闘われなければならない。

現在、戦闘的・大衆的に決起している学友・活動家諸君の中に確かに存在する思想的・実践的混乱は次のようであらわれている。

① 学費闘争を学園の中にとじこめ、階級関係の全体顧慮の中で戦術が決定されず、学費闘争、学園闘争の「論理」から直接闘争形態がひきだされる傾向

② 学費闘争に決起してくる広範な学生大衆に対し、無媒介に抽象的「政治」を押しつけ、学生大衆の意識の発展を全活動の基礎としない傾向

この二つの誤った傾向は、相互補充の関係にあり、しばしば同一の活動家の中にも併存する。学費値上げ阻止の闘いを全人民的政治闘争へと発展させ、全人民的政治闘争と結合させる任務を設定できず、攻撃の意図を単なる「合理化」「帝国主義的再編」「国民統合」一般に流しこむことはもちろん、観念の中だけで、日帝の侵略・反革命と対決する全人民的政治闘争との「結合」や「としての闘い」

を主観することは反動的ですらある。

現在、学費闘争の中に現われているこの混乱は、全共闘運動、特にその終息以降顕著になつた学生戦線の混乱がまだ十分に克服されていないことの証左である。

3. レーニンの学生運動論について

現在の学費闘争にあらわれている全共闘運動の終息、八派共闘の崩壊以降の学生戦線の政治路線の混乱（それは又、必然的に運動の混迷を招来させている）の性格を鮮明にし、新しい学生共産主義者の任務—しかも六〇年代の運動至上主義的學生運動論とは違つた—を、我々がしっかりと把み取る為には、レーニンの学生運動論は、現在の我々にとつても非常に教訓的であると思う。

そこには、ロシア社会民主党の学生運動に対する戦術のみならずレーニンの階級闘争一般に対する戦術論—革命的現実政策（主義）の一端をうかがうことができる。

レーニンは、直接、学生運動について論評した政治論文を多くは残していないが、我々は、次の二つの政治論文『革命的青年の任務』（一九〇三年 全集七巻）、『学生運動と今日の政治情勢』（一九〇八年 全集十五巻）を中心に考察してみよう。

① 『革命的青年の任務』（一九〇三）について

レーニンは革命的学生の新聞『ストウヂェント』編集部の「革命的感情」では、学生の思想的統合をつくりだすことではできない。「この目的のためには、どこかこれかの社会主義世界観に—しかも「明確で全一的な」世界観に「立脚した社会主義的理想が必要である」という主張に賛意を表して、エス・エルの俗流的な「革命主義」

に反論を行なう。

エス・エルの主張はこうである。

「学生の中には政治的・社会的見解の点で非常に種々さまざまなグループが存在しており、また存在せざるをえない。だから、世界観の全一性と明確性を要求すると、これらのグループの一部を不可避的におしのけることになり、したがって心をあわせた活動のかわりに不和を呼びおこし、したがって共同的政治的攻撃力をよめめることになる。」「一般的な政治運動との連帯を宣言し、革命的陣営内における派閥的反目をまったく度外視せよ。」と。

レーニンは、次の様に反論する。

「現代の学生には、反動派、無関心な人々、学園派、自由主義者、エス・エル派、社会民主主義者の六つの政治的グループが存在している。……」このグループ分けは偶然的なものではない。その理由は、学生は「インテリゲンツィアのなかでもっとも敏感な部分であるからであり、またインテリゲンツィアがインテリゲンツィアと呼ばれるゆえんは、彼らがつとも意識的に、だれよりも決定的にだれよりも正確に、社会全体における階級利害と政治的グループ分けとの発展を反映し表現する点にあるからである。」（我々は、ここで、全共闘運動後、しかも七〇年代初期に、民族派学生運動が公然と一政治潮流として登場したことを想起し、その現在および将来にわたる階級関係全体との関連で、戦後日本における歴史的意思を認識しなければならぬ）

続けて、レーニンは「資本主義の発展がまだ比較的弱いロシア」での階級分解の不充分性―多様性に規定された、ロシアインテリゲンツィアの政治的分解の未熟という歴史的現実と、階級規定と階級意識、即ち、「階級区分」と「政治的グループ分け」が照応するの

は、「ただ政治闘争によつてのみ到達するのであつて、それはしばしば、長い、頑強な、幾年、幾十年をもつてはかられる闘争―あるときはいろいろな政治的危機となつて嵐のように発現し、あるときは立ち消えて一時的に停止するかのように見える―の結果である。」という指摘でもつて、学生の「六グループへの区分は……ロシア社会の階級区分に照応していないから」正しくないなどという単純な階級基礎還元論者に対して反論している。（このレーニンの注目すべき方法は、更に発展され、緻密化されて、『第二インターの崩壊』『帝国主義論』等の一連のカウツキー主義批判の諸論文にみることが出来る。）

従つて、エス・エルが、社会民主党を「分離と分裂の狂信者たち」ときめつけ、「一般的政治運動との連帯を宣言し、革命的陣営内における派閥的反目をまったく度外視せよ」という彼らの呼びかけが非論理的であり、何ら根拠がなく、実質上、社会主義の見地から「ブルジョア民主主義の見地へ後退せよ」という呼びかけにほかならない。」以上がレーニンのエス・エル批判の主な内容である。

そして、レーニンは「学生のあいだに於る活動を任務とする社会民主主義者」の任務を次の様に要約した。

「第一に学生のあいだに社会民主主義的信念をひろめ」マルクス主義、西ヨーロッパの「批判的」日和見主義、ロシアの小ブルのナロードニキ主義との間を綱渡りする『社会革命党』の「革命的社會主義とはなにか一つ共通点をもたない諸見解とたたかうこと」。

第二に、運動路線に於ては、学園運動（ちなみ、レーニンは学園運動を、「狭い範囲の職業的利益だけ、すなわち、国民経済または国家行政や地方行政のある部門の改善だけにとどめており、どこでも臆病に『政治』から遠ざかつてはいる』それと定義している。そ

の運動は、代々木「共産党」―民青の教育における差別分断を捨象

した全学園。全階層一様の「諸要求獲得運動」「文教予算増額運動」と何と類似していることか？ 代々木「共産党」―民青は、これに「選挙運動をつぎたすだけなのだ。」をも含めて、「学生のあいだの、民主主義的運動を拡大し、より意識的な、より断固たるものにしよ」と努力すること。」

従つて、第三に組織路線では、「政治的諸傾向の完全な分解は、けつして労働組合や学生団体の『分断』を意味するものではない。学生社会民主主義者は、「できるだけ多数の、できるだけ広範な『純学生』サークルや学習サークルのなかへはいつてゆこうと努力しなければならぬ。（本論からはそれが、このレーニンの学生運動論だけをとつてみても、レーニンを単なる「妥協の名人」と考えている諸君のレーニン主義の理解の浅薄さは、明らかだろう。我々は、一九〇三年のこの論文の内容や、ズバトフ式労働組合へのレーニンの態度、又、一九二〇年の『共産主義における「左翼」小児病』の中に、レーニン主義の赤い糸―革命的現実主義―政策をしつかりと把握しなければならぬ。）

② 『学生運動と今日の政治情勢』（一九〇八・一〇）
この論文は、一九〇五年革命後のテルミドルル期、ストルイビンの政治的行動、学園においては、一九〇五年革命時下、専制からかちとつた「学生自治」への攻撃という局面で、執筆され、学園闘争と政治闘争の關係、反動期における両者の關係に対するレーニンの見解が要約されている。

一九〇八年、反動期にもかかわらず、「広範な学園運動がまきおこつた。（学園運動のレーニンの定義については既に述べた。）
ある社会民主主義的學生は、この学生自治要求等の「原始的な学

園闘争の古い諸形態」に対して次のように考えた。

「われわれは、学生運動とは一般的に政治行動と歩調をそろえたものとだけ考えている。だから、われわれは、学園的行動には反対を表明する。」と。

レーニンのそれへの論評は、こうである。

「こういう議論は根本的にまちがっている。プロレタリアートと歩調をそろえた学生の政治行動をめざさなければならぬ、うんぬんという革命的スローガン（全共闘活動家の一部がたどつた傾向や中核派が一時期、自らの日和見主義を合理化するために提起した「第三次大学闘争論」を想起せよ―筆者）は、ここでは、ますます広範で、全面的で、戦闘的な煽動をおこなう生きた指針から、いろいろな運動形態のいろいろな段階に機械的にあてはめられる死んだドグマになつてゐる。」

「学園運動が政治運動をひくめるか、あるいはそれを細分するかあるいは政治運動から遠ざけるか、するような条件もありうる。

そのときには、社会民主主義的學生のグループは……このような運動に反対する……義務がある。」

「けれども……現在の客観的な政治的諸条件は、これとはちがつてゐる。学園運動は、すでに狭い自治に多少とも慣れた学生青年にかわる新しい『交代部隊』の運動の始まりをあらわしているのである。しかもこの運動は、現在、大衆闘争のその他の形態が存在しない情勢のなかで、広範な大衆がまだ依然として黙々と、じつと、ゆつくりと革命の三千年の経験を消化している鎮静情勢のなかで、はじまつてゐるのである。」

かくてレーニンは、学生社会民主主義者の任務を次のように与え

「『学園』の抗議者大衆にこの紛争の客観的意識を説明し、それを意識的に政治的紛争にするように努力し、学生の社会民主主義的グループの煽動活動を十倍にすることであり、また、彼らが三カ年の歴史からの革命的結論を身につけ、新たな革命的闘争の不可避性を理解し、専制の打倒と、憲法制定議会の召集という我々の古いけれどもいまなおまつたく現代のなースローガンがふたたび民主主義派の若い世代の討論の対象となり、これらの世代の政治的結集の試金石となるような方向へ、この煽動活動全体をむけることである。」

③ レーニンの学生運動論の要約
『革命的青年の任務』と、『学生運動と今日の政治情勢』との二つの論文で展開されているレーニンの学生運動論の中で、現在の我々にとつても教訓的であると思われる諸点を要約してみよう。

まず第一に、最も重要な点は、学生の様々な意識の分解は、「社会全体の階級利害と政治的グループ分けとの発展を反映し表現すること、しかも、インテリゲンツィアの中ですら最も先行的に、かつ社会全体の階級利害の分裂を必ずしも量的に比例して反映するのではなくることである。」
だとすると、我々はベトナム反戦闘争から始まつた六七年秋から七〇年にかけての、青年労働者、インテリゲンツィア、特に学生の巨大な闘いが、全ての階級、階層を把えつくし、かつ、より非和解的に、より血みどろに闘い抜かれるであろう将来の革命闘争を先行的に表現していると考えなければならぬし、又、学園においては全ての学生を政治的訓練にかけた全共闘運動後、民族派学生運動が公然と潮流として登場してきたことが、現在、及び未来の階級関係の中で如何なる意味をもっているのかをしつかりと理解しなければならぬ。

丸闘り主体の弱さは拡大再生産されて顕現する。

全共闘運動のバリケードが機動隊の手で暴力的に撤去されてから二年余の月日が経過し、再度、学費闘争を機にバリケードが構築されている今日、全共闘運動終息以降顕著となつた先進的活動家の思想的・実践的混乱は、試行錯誤的に、そして京都を中心としたこの間の運動の展開の中で克服されつつあるが、今なお十分には克服されてはいない。

① 自治会民主主義に基く運動（IIポツダム自治会運動）が、闘いのある局面で極端に転化するという現実から、単純に、クラス。自治会での政治活動を放棄する召還主義的傾向について——又、この傾向は「ポツダム自治会解体」論の実践上の必然的帰結でもあり、全共闘運動後の活動家の間で、最も広範に存在する混乱である。

レーニンが『革命的青年の任務』で述べたように、学生が「だれよりも意識的に、だれよりも決定的に、だれよりも正確に、社会全体における階級利害と政治的グループ分けとの発展を反映し表現する」以上、全員加盟制自治会の民主主義に基く、即ち、クラス決議等に基づく運動が、階級闘争にとつて極端となり、反動的になる場合もあることを、学生共産主義者は、しつかりと自覚しなければならぬ。

そして、全共闘運動は、その闘いの中で示しており、六八年六・一五安田講堂封鎖のようにクラス決定から自由な闘争委の政治的突出をその序幕とし、明らかに広範な学生を獲得したポツダム自治会運動を揚棄した性格をもつ運動だったのだ。

だが、クラスで自治委員になる基盤があるにもかかわらず、それを拒否したり、自治会組織を指導する基盤があるにもかかわらず、闘争委だけの活動に自己を限定し、自治会活動を拒否する一部の活

従つて、第二の重要な点は、全般的な学生層の「統一と団結」を語るのには実践的に反動的であり、自らがブルジョア民主主義者であることを吐露しているにすぎないこと。学生運動の任務は、まずなによりも、学園内における政治活動を通して、自己を堅忍不拔の社会民主主義者として鍛えあげ、「政治的に異種の諸グループのあいだにできるだけ意識的な、首尾一貫した分界線をもうけることに努力することである。」

第三に、かかる社会民主主義者としての自己の純化を最前提にして、全学生の組織——自治会や、「純学生」サークル、学習サークルへはいらなければならぬこと。

第四に、政治的昂揚期、反動期における学生運動の戦術形態——闘争形態・組織形態の多様性を承認すること。（レーニン『バルチザン戦争』等 参照） 闘争の普遍的な内容においては、一般的にいふならば、学園的課題の運動を政治的運動へとおしあげ、「プロレタリアートと歩調をそろえた学生の政治行動をめざす目的意識性の必要。」

我々は、このレーニンの学生運動論をふまえて、現在における先進的活動家の様々な思想的・実践的混乱を克服していかなければならぬ。

4. 革命的左翼の分解——諸戦線の分断と、共産主義的政治指導の欠如の下での先進的活動家の思想的・実践的混乱とは何か

闘いが昂揚すればするほど、そして、その闘いが急速に終息すればするほど、闘いの昂揚期にはさして実践上注意する必要もなかつ

闘家は決定的に誤つており、実践的には反動的ですらある。
一般的にいふならば、戦後日本の学園においては、一貫して学生共産主義者の政治的影響力は強かつたし、又、今日の学園においても、共産主義者が自治会組織を運営し、広範な学生大衆に政治的訓練を与えることが可能な現実的基礎があると考えるべきである。そして、広範な学生大衆に政治的訓練を与えるというこの限りにおいて、自治会組織は、ホルンエヴィキ派の革命的學生運動のために、徹底的に利用されなければならぬ。

特に、自治会が大学当局——民族派学生によつてタラシに運営されている大学や、又、自治会組織すら大学当局に認められていない大学では、民主主義的運動や、ポツダム自治会運動ですら、非常に革命的な質をもつはずである。
全共闘運動が、ポツダム自治会運動を揚棄したことを、ポツダム自治会組織に対して全共闘組織を対置したと誤解している「ポツダム自治会解体」論者、クラス、自治会からの召還主義的傾向に陥いつている活動家に対しては、我々は、次のように忠告してやらねばならぬ。

「君達のスローガンは、全共闘のスローガンとしても適切でなく又、現実的には、学生をブルジョア思想の影響の下に放置し、従つて、民族派学生運動のはびこる基盤を形成し、ブルジョア民主主義の物神崇拜者——民育や、民学同の学生大衆に対する影響力を拡大させている。」と。

実践の問題としては、この間の京大における全学的な無期スト体制の突破口を切り拓いたものが、一・一五からのC戦線、そしてCスト突による先行的なA号館占拠・解放闘争、期間外試験粉砕の闘いの突出力と、それを背景にしたクラスへの圧倒的な介入であつた

ことをつけ加えておけばよいだろう。十九日のC代議員大会には、史上最高の大衆的結集がもちとられ、無期限ストが大衆的に支持されたのだ。

② 「学生の全共闘から、労働者の（労学）全共闘へ」のスローガンにみられる傾向について

このスローガンは、一時期、一定の活動家の意識をこらえていた。これは、全共闘運動一六七年一七〇年春までの階級闘争の狭さを突破し、新しい昂揚を、より全人民的闘いとして準備せんとする問題意識としては評価できるが、学生運動のスローガンとしては誤っている。

全共闘運動のバリケードが撤去されて以来、東大においては、七〇年六月北病棟移転阻止闘争を契機として、地震研闘争―臨職闘争等、大学職員―労働者の闘いが大きく前進してきた。だが、学生活動家としては、労働者の闘いに呼応することができない学生戦線の弱さとして自覚されねばならない。

我々は、このスローガンが、中核派の第三次大学闘争論のようにマル学同中核派の日和見主義の隠蔽の為にそれとして機能してきたことを問題にせざるをえない。

七〇年六月以来の中核派の東大北病棟闘争や三里塚闘争、又、京大新病棟闘争にみせた日和見主義的方针は、目をおおいたくなるばかりであった。

全共闘運動の総括がなく、又、七〇年秋の段階における活動家の思想的混乱に真剣に答えることなく「入管決戦と入管実」を怒号してきた中核派の恣意的な「全共闘再建―第三次大学闘争」論は、又又政治技術的なのでもしかなかった。即ち、各大学における全共闘という名前のついた組織のデッチ上げ―全国全共闘の指導権獲得の

為以上の何物でもなかった。全国全共闘崩壊の基礎はこのようにしても準備されてきたのだ。

③ 全共闘の闘争形態、占拠・バリケードだけに固執し、権力闘争の必要だけを主張する傾向。

この傾向は、全共闘運動よりも、より精神的に武器を取り、より突出した闘いによつて、全共闘運動の階層的狭さを突破せんとする意欲において評価できる。

だが、「沖繩や坂軍や入管闘争を学生大衆に煽動してもしかたがない。要するに問われているのは権力闘争である。」と考えられる時、それは「革命的」空文句に終っている。

七二年「沖繩返還」を頂点にして、日米反革命同盟が再編・強化され、露骨に日帝ブルジョアジーが、侵略、民族の抑圧、反動を開始している時、我々は、この反人民性を徹底的に暴露し、闘いを組織することを抜きにして、全共闘運動以上の武装、占拠・バリケードは決して表現されえない。

「武装せる全共闘」のスローガンにおいてもこの傾向はあらわれている。現在の国家権力―政治警察による人民の闘いの強権的圧殺のもくろみに対して、機動隊の暴力を粉砕しうる学生戦線の武装はもちろん問われている。だが、バリケードが存在するか否かは、純粋に権力との力関係だけによつて決定されるものにはすぎないのだ。

我々が、味方の中で、重視し、回答を与えなければならぬ問題は、単純であるが―かつ、全共闘運動の最も本質の問題だが―何故バリケードが撤去されると、全共闘運動はその「闘い意志」を消失していつたのかという問題である。

バリケードが撤去され、六九年秋の攻防戦が敗北するとともに、多くの闘う学生が雪崩をうつて戦列から去つていつた。我々にとつ

て、最も悲しむべきであり、最も重視しなければならぬ問題は、この全共闘活動家が最も急進的に闘いながら「全共闘運動とは何だったのか」という疑問を抱いて、戦列から去つていくこの傾向である。

全共闘運動の形成と終焉は、バリケードの存在の有無によつて計られてはならない。

これは、全共闘運動における共産主義者の指導力の弱さの問題であるだろう。

「共産主義者は――『共産党宣言』は言う――労働者階級の直接当面する目的と利益とを達成するためにたたかうが、しかし、現在の運動のなかであつて、同時に運動の未来を代表する。」

全共闘運動における共産主義者の指導力の弱さとは、全共闘活動家の共通した現象であつた「直接当面する目的と利益とを達成するためにたたかう」という自己の実践の認識（その内容は「自己否定」とか「破壊の思想」とか様々に語られた）が、その経験的直接的に停つており、自己の実践が「運動の未来を代表する」「現在の運動として、即ちプロレタリア革命過程、歴史過程の総体的性の一契機として対象化されていないこと」に他ならない。

このことは、全共闘運動後の今日、更に拡大され、更に多様な形態で、活動家の中の思想的混乱として現われており、当然実践上の混乱をも招来させている。この問題に対する真剣な解答抜きには、「全共闘のより高度な武装」を実現しうる共産主義者の軍事指導が問題とされず、「武装せる全共闘」も革命的な空文句におわつてしま

④ 個人主義的・無政府主義的傾向について

全共闘活動家の中には、最も戦闘的でありながら、又、極めて個

人主義的、無政府主義的意識が濃厚に存在している。この傾向は、確かに学生の小ブルの性格という基盤に規定されており、又、全共闘運動の昂揚があまりにも大きく、諸党派が大衆に乗りこえられる事態がたびたび存在したことによつて、更にその中で、そしてその後ますます明らかになつた諸党派の政治路線の貧困によつて、この傾向は「党派不信」として倍加されている。

最も闘う意志をもつていながら、階級闘争に占める組織、党の存在意義を理解できない諸君に対しては、我々はねばり強く次のことを説得してやらねばならない。

「思想や理論は、組織を媒介してのみ実践に転化されること。従つて、組織、党は、革命の単なる技術上の問題では決してないこと。プロレタリアートは、自らの権力を樹立する為、党を生み出すなければならぬこと。等々。」（詳しくは『ボル通』創刊号、五号「プロレタリアートの階級闘争の戦術に関する覚書」参照）

六〇年代、多々語られた学生運動論は、一般に政治的危機の形成―全人民的自然発生性の存在↓学生活動家による政治的突出↓プロレタリアヘゲモニーへの移行↓全人民の闘いという論理構成は、学生共産主義者としての学生運動の任務の提出という面から行なうならば、決定的に不十分である。

これは明らかに、日本における革命的左派の創成期における限界即ち、日本共産党全学連フラク、それ自身が労働者階級の前衛党の任務を課せられたという歴史的现实を背景にもつている。

このような学生運動論の実践にもたらす誤りは、第一に、ある階級闘争の発展過程における学生突出の有効性という戦術を、永遠に固定化する傾向に陥ること。

だが、我々は、ロシア革命運動の果たした先駆的役割、又、中国革

命における一九一九年五・四運動、一九二五年五・三〇運動における学生運動の果した役割、又最近では、全世界の、特に帝國主義国における「スチューデント・パワー」の力を否定するものではない。我々は、もつともつと、世界の革命運動の中で、学生共産主義者が發揮した英雄的精神を学び取らねばならない。だが、このことはある階級闘争の發展局面で学生運動の突出からプロレタリア・ヘゲモニーへの移行という戦術(戦術である)を永遠に固定化することではないのだ。

第二に、このような学生運動の戦術論は、数年間しか学園で政治活動を經驗するにすぎない学生生活家を、無条件に讚美し、その地位を固定化する傾向に陥いる。従つて、全ての任務が、デモ等、八運動Vだけに限定され、自己を共産主義者へと昂めあげる様々な作業、将来の全人民的な闘いを担い切る為の必要不可欠な能力を獲得する為の作業等が忘れられてしまう。

5. 全共闘運動とその後の混乱の教訓をふまえ、全国学費闘争の大爆発を克ちとる中から、ボルシエヴィキ派の革命的な学生運動を構築しよう!

以上のような視点と教訓をふまえれば、我々の任務は鮮明になるだろう。

① 広範な学生大衆を学費値上げ阻止闘争に決起させ、この闘いの中で鍛えあげ、彼らの革命的積極性を培い、發展させることである。あらゆるクラス・サークルに介入し、宣伝し、暴露煽動し、政治生活に多くの学友を参加させねばならない。この闘いの徹底した大衆

的な闘いへと準備させるべく、優れた学生共産主義者へと、プロレタリア革命戦士へと鍛えあげていくことである。大衆的決起は、系統的な共産主義的政治指導と政治教育を要求しているのであり、指導的な部分の堅忍不拔の共産主義者としての純化を前提に、大衆への提起もありうることを確認せねばならない。このことをぬきにして、何かしら闘争戦術を駆使することによつてのみでは、学費闘争を發展させ、勝利することは決してできないことを胆に銘じるべきである。

④ 最も戦闘的でありながら、極めて個人主義的・無政府主義的な傾向と、断固として闘い、組織と団結こそが唯一の武器であることを、実践の中から確認することである。そのなかから、大衆路線と軍事路線を堅持し、結合・發展させ、武装蜂起―労働者権力樹立を組織しうる地下労働者党の建設、現在の諸戦線の分断を止揚しうる最左翼のヘゲモニーの下での革命的統一戦線の形成への第一歩を踏み出すことである。学生の狭い階層運動の小ブル的性格に基礎を置き、諸党派の政治路線の貧困が倍化した「党派不信」、自由主義は絶対に克服されねばならない。

政治警察の徹底した弾圧攻撃に対する大衆的反撃を組織すると同時に、権力の弾圧網をかくぐり、人民の怒りを闘いに、闘いを蜂起に組織する思想と団結を支えられた強固な組織を建設せよ!
全国学費闘争を牽引し、ボルシエヴィキ派の革命的な学生運動を構築せよ!

諸戦線の分断と混沌に終止符を打つ革命的統一戦線を最左翼から再建せよ!

性こそ、それとの結合の中で活動家が成長することができ、全共闘運動の革命的な成果と教訓を新しい世代の活動家・学友が共有することができ、ボルシエヴィキ派の革命的な学生運動構築の巨大な潮流と基礎を形成することができるとだ。

② 学費闘争を全人民的政治闘争へと發展させるべく、具体的な行動を提起することである。学費闘争に決起してくる学生大衆の意識の發展を、経済的要求、教育過程での抑圧と帝國主義総体に対する漠然とした不満から日帝のアジア侵略・反革命と対決する全労働者人民の決起―明確な政治的要求に転化・發展させねばならない。全共闘運動が六七年十・八羽田闘争の豊かな政治的衝撃力の波及の中で、七〇年安保闘争―十一月決戦へむかう全人民をまきこんだ政治闘争の一環として闘われたこと、しかし、その結合の質が自然成長的なものであつたが故に、権力との緊張関係の煮つまり↓敗勢の中で急速な分解をよぎなくされたという教訓をふまえなければならぬ。

学費闘争から、中教審路線粉砕の闘いを担い、ブルジョア教育秩序・帝國主義大学に対する実践的批判を獲得しよう。そして、公共料金の大幅値上げに対決する闘いを、大量解雇・減給・賃金カットの攻撃の粉砕と同時に闘い抜かんとしている戦闘的労働者との結合も具体化しなければならぬ。これを担いければ、学生戦線の再建の中から、日帝の侵略・反革命の全面的開始の中心軸―自衛隊の沖縄派兵をもつてなされんとしている日帝による沖縄の侵略前線基地化・自衛隊の帝國主義軍隊としての完成を、「本土」―沖縄人民の力で粉砕する闘いへの強固な戦線を構築することができるだろう。

③ 大衆的決起と結合した鋭い闘いの中で、自己を、多くの学友を持續的な政治活動にひきこみ、将来のより非和的、より全人民

ボルシェヴィズム通信 増刊号

☆3月10日 発売予定☆

定価未定

特集 ◇自衛隊の沖縄派兵阻止闘争をいかに闘うか
資料 ◇沖縄関係 ◇四次防関係

「佐藤政府を倒せ! 武装闘争と
大衆路線を結合・發展させよ!」

—ニクソン訪中・世界革命闘争の新局面とわれわれの任務—

佐野茂樹

定価 150円

ボルシェヴィズム通信 第5号 1971.9.18 発売中

レーニン研究会理論機関誌

定価 200円

主 張 「米中会談」をめぐる新しい世界革命の前進と、日帝心臓部におけるわれわれの重大な任務

論 文 プロレタリアートの階級闘争の戦術に関する覚書

闘争報告・方針 三里塚闘争・沖縄闘争

国際共産主義講座 I 中国革命とわれわれ

寄 稿 革命運動の総括と展望(1) 佐野茂樹

労働戦線からの報告 山岡一雄

— B4版 120頁 —

ボルシェヴィズム通信 第7号

☆4月10日 発売予定☆

定価 200円

特 集 ◇中国共産主義運動とわれわれ

- ・中ソ論争
- ・文化大革命
- ・第一次国内革命戦争
- ・米中会談

第二次ブンドの労働運動論の総括

沖縄への自衛隊派兵阻止に向けて

戦線報告・闘争方針 III

沖縄への自衛隊派兵実力阻止

日帝の侵略―反革命の最初の破産をかちとれ！

はじめに

一九七二年は全世界人民の革命闘争の更なる前進が帝国主義の侵略と反革命の策動を全面的に挫折に追い込み、主戦場を帝国主義心臓部に切り開く新たな発展段階への移行期として幕を開けた。

このような歴史の転換期にあつて、当然の事であるが、日本階級闘争も血みどろの飛躍をどうしても遂げなければならぬ年を迎えている事は是非とも銘記しておかねばならない。

日帝は本年の沖縄施政権返還と自衛隊の派兵により名実ともに帝国主義としての侵略反革命を全面的に開始せんとしている。確に日帝は日米反革命同盟の依持強化のみ自らの延命を見出さざるをえないし、その再編強化の過程にこそより一層の矛盾を深めている。

しかし、帝国主義国家権力の中核でありながら敗戦帝国主義としての政治的脆弱性を背負ってきた自衛隊が、沖縄派兵と四次防により帝国主義軍隊として完成する事は戦後日本を固める重大な権力再編である。これに向けた日帝の国内再編は不可避に未曾有の規模であらゆる領域での階級闘争を激化させたし、昨年の沖縄協定をめぐる闘いは文字通り激闘として闘い抜かれた。

戦後日本階級闘争の総決算として今年の沖縄への自衛隊派兵実力阻止を中軸とした闘いは画期的な飛躍を我々にせまっている。沖縄人民は戦後一貫した苦闘の中から日米帝に根底的に対決する政治的質を持ち始めている。

あらゆる本土主義を排し沖縄人民と団結して日帝による沖縄の侵略前線基地化を阻止してゆくことは日本共産主義運動飛躍のカギであり、自衛隊派兵の実力阻止をもって日帝の侵略反革命の最初の破産をかちとって、後進国革命戦争にゆだねてきた世界革命の主戦場を日帝心臓部に是非とも持ちこまねばならない。

自衛隊の沖縄派兵をめぐる闘いは、沖縄人民のゆるぎない圧倒的進軍の前に牽引されてきている。制服自衛官の糾弾の闘いは想像をこえる規模へ発展するに違いない。

この沖縄人民の闘いに結合せよ！大胆に自衛隊に対する闘いを荷う時がきている。この闘いは帝国主義国家権力の中核にせまる闘いである。問題はリアルに提出される必要がある。帝国主義軍隊への攻撃は人民の武装力の問題であり、我々が克ち取ってきた共産主義的政治的質と結合した武装闘争の問題となっている。それが故にこそ主観主義的「武装闘争」を揚棄しよう。大衆の政治意識の発展はい

つても我々の活動の基礎である事を銘記しなければならない。勝利の確信を我が手につかみ、大胆に進撃せよ！

日本における隆起労働者権力樹立への大道は我々の前にあるし七二年の激闘は必ずやそれへと二大金字塔になるであろう。

七〇年代の世界反革命戦略

A 戦後世界支配体制の破産

七一年の二つのニクソンシ・ムックターニクソン訪中計画の発表（七月十六日）、新経済政策の発表（八月十五日）、そして、帝国主義の戦後世界支配体制の破産、新たな七〇年代世界反革命戦略への転換を決定的に示している。

戦後世界支配体制（IMPERIAL体制）の確立―第二次大戦のきわだった特徴は何よりも次の点にある。それは、帝国主義国内の革命運動の圧殺を前提として、中国革命戦争の勝利的前進、アジア人民の抗日闘争及びソ連赤軍のドイツ帝国主義の侵略粉砕による東欧諸国の「人民民主主義革命」という戦後革命の波から、世界資本主義市場を各国帝国主義の独自利害よりも優先して防衛すること、すなわち世界革命を阻止し、帝国主義の延命をはかるものとしてあったものである。それは経済的には日帝独帝との帝国主義間戦争に勝利した米帝の圧倒的な優位の下に、「ドル金」というIMPERIAL体制、「自由多角無差別貿易」というGATT体制を軸にした世界統一市場の維持である。また政治的、軍事的には、国内の完全雇用政策、労働者の上層の買収等の階級調和政策を基礎に、①米帝の核威嚇を背景に圧倒的な軍事力によって米軍を「世界の憲兵」として全世界に派遣し、②各国帝国主義との反革命同盟③後進国民族

ブルジョアへの経済・軍事援助による買収を通じて、侵略を押し進めようとする「新植民地主義」によって、NATO・SEATO・日米安保等の反革命軍事体制を構築することであった。

さらに、六〇年代になってからは上の条件に加えて国際共産主義運動の分裂―中ソ対立を利用し、米ソ平和共存体制の確立、中国封じ込め策動によって一九五〇年朝鮮戦争、一九六〇年南朝鮮四・一九革命闘争、アルジェリア・キューバ革命、そしてベトナムと続いた後進国民族解放闘争―世界革命の巨波を押しつぶさんとしたのであった。

だがこのような戦後世界支配体制は崩壊を必然的なものとして内在的に規定されていた。なぜなら、第一に、至上命令であるはずの統一市場の維持は米帝の他の帝国主義国に対する力の圧倒的な優位を不動の条件としていたにもかかわらず、米資本主義の極度の腐朽性の進行、経済危機と、西独日帝の急速な抬頭（皮肉なことには米帝の圧倒的な経済が、軍事力による戦後世界支配の維持を最大の条件としていた）の中で帝国主義の矛盾が蓄積されていったからである。さらに第二にソ連を平和共存体制に抱きこみ、後進国民族解放闘争の圧殺をほかりながらも、先進国階級闘争緩和策による後進国への矛盾の集中によって、後進国の矛盾の世界革命戦争への転化を促進せざるをえなかったことである。しかもこの民族解放闘争の前進は第一の条件の成熟により一層柏車をかけたのである。

特に中国を大後方としたベトナム―インドシナ革命戦争の前進は、戦後支配体制の崩壊を決定的にした。そのみならず帝国主義延命の最後の条件―帝国主義国内の城内平和―に動揺を与え、帝国主義心臓部の階級闘争の激化をも引きおこしたのである。

B インドシナ革命戦争の勝利

一九五四年、ディエン・ビエンフーでベトナム労働党に指導されたベトナム人民軍の手によって殲滅されたフランス帝国主義の後釜として米帝は、このベトナム人民の闘いが全インドシナに拡大することを恐れ、ベトナム南部への侵略を本格的に開始した。ゴ・ディン・ジエム政権のデッチ上げと、それに対する大規模な軍事的・経済的援助も、しかし革命闘争の炎を消すことはできなかった。「特殊戦争」―買収した民族ブルジョアジーの政権の下で、武器などの全ゆる戦争手段を与え、米軍軍事顧問の指導の下に、人民の闘いを圧殺しようとする戦争（一九五九―六三年）「局地戦争」―大規模な北爆と数十万の米軍の投入による戦略は、いづれもベトナム人民の英雄的な闘いによってみじめな破産を投げた。一九六八年一月テト攻勢、一九六九年六月南ベトナム共和臨時革命政府の樹立、一九七一年四月ベトナム民主共和国、南ベトナム解放民族戦線カンブチア民族統一戦線の首脳会議における「反米共同闘争強化」の発表、一九七一年米・サイゴン政府のラオス侵攻作戦の完全な破産と、インドシナ革命戦争はとどまることを知らない。

インドシナ革命戦争は世界革命戦争の最前線である。ポー・グエン・ザップ將軍の次の言葉はそれを明白に示している。「わが党は偉大なるロシア十月革命により開かれた人類の新しい時代に、そして世界においては資本主義から社会主義へと前進する過渡時代に、ベトナム革命を指導するという歴史的な任務をになつて誕生した。その歴史的な環境で、ベトナムでの最初の共産主義者であるホー・ジ・ミン主席を先頭とするわが党は、マルクス・レーニン主義をわ

が国の具体的な条件に創造的に適用して、正しい革命路線、すなわち、資本主義的發展段階を経ずして、社会主義革命へと前進する民族民主主義人民革命路線を打ち出した。党はわが国の民族解放戦争を全く新しい道へと進めた。」（ポー・グエン・ザップ一九六九年

二月二二日、人民軍隊創立二五周年記念での演説）

レーニンが「帝国主義論」において明らかにした、独占資本主義としての帝国主義の五つの指標の最後のもの「世界の領土的分割」（植民地）は一九一〇年代に完了し、第一次大戦は、「世界の再分割」をめぐる強盗同士の戦争であった。これ以後、後進国は資本主義国への成長の道を閉ざされ、後進国民族解放闘争は帝国主義との対決を不可避とした。植民地、半植民地民族解放闘争は世界革命の大きな一翼を担うものとなった。しかしこのことは、植民地半植民地民族解放闘争が民族ブルジョアジーからプロレタリアートの手で成し遂げなければならないことを意味するのであった。「国を救い民族を解放するにはプロレタリア革命以外に道はない。」（ホー・ジ・ミン）すなわち帝国主義心臓部での革命闘争と植民地半植民地民族解放闘争の結合、すなわち排外主義に転落した第二インターにかわる第三インター（コミンテルン）の世界党としての強固な確立が必要であった。一九一七年レーニンはロシア革命を勝利に導き世界革命の砦としてのロシアと、コミンテルンを誕生させたものの、スターリン主義の発生、コミンテルンの変質、先進国革命の敗北という事態に至った。その中で唯一世界革命の潮流を受けついできたものは、中国共産党を先頭とするアジア諸国の民族解放闘争であった。中国共産党は無意識的ではあったが、実践的にスターリン主義と闘いつつ、中国革命戦争を勝利に導き、さらにプロレタ

リブ独裁下の階級闘争を闘い抜き、文化大革命によつて、革命の根拠地としての中国を築きあげてきたのである。ベトナム労働党（インドシナ共産党）とベトナム人民の闘いはこの闘いを受け継ぎ、中国を大後方に、日帝・仏帝を叩き出し、米帝の滅亡の道を準備しつつある。ベトナム人民の闘いは、帝国主義と闘う世界人民に勇気と力を与え、南米でも、パレスチナでも、アフリカでも「第二、第三のベトナムを」を合言葉に帝国主義を崩壊へ追い込んでいる。現代過渡期世界は、民族解放闘争の永続戦争への発展をより強く規定している。それは①中国朝鮮など、「労働者国家」が革命の根拠地としてあること。

②新植民地主義による帝国主義の買収を受け入れた民族ブルジョワジーの「墮落」であり、主体的には中国革命戦争などの経験などを正しく総括した共産主義者の強固な指導であることは言うまでもない。さらに帝国主義心臓部での革命闘争が結びつきつつある。ニヤンザン・ベトナム労働党機関紙（七一・七二〇）は次のように述べている。

「わが人民の勝ちとつた偉大な勝利は、我々の闘争の現代的正義性から生じたものである。我々の闘争はそれ自身三つの革命的激流の一部分をなし、歴史の発展法則に合致しており、全世界に生起している革命の戦闘的攻勢態勢の創造と、三つの革命的潮流の恐ろしいような発展に貢献している。」三つの階級闘争は単なる総和にとどまらず、重層的に連開し、世界革命戦争を形成している。

③ 帝国主義の七〇年代世界反革命戦略

インドシナ人民の闘いは米帝を決定的な危機に追いつめた。ベト

ナム戦争につきこんだ多額のドルが、米帝のドル危機を一層強め、失業率の増加、慢性インフレとともに、黒人解放闘争、反戦運動、爆弾テロの続出、軍隊の腐敗、反乱等々、米国内の階級闘争の激化をもたらしたのである。

米帝のマクナマラ戦略から、六九年ニクソン・グアムドクトリンへの戦略の転換は、このような危機を見通し、それを何とか回避しようとするものであった。ニクソン訪中計画もまたその延長線上にあり米帝の七〇年代世界反革命戦略の一環を構成しているのである。米帝の七〇年代世界反革命戦略は基本的に次の点にまとめられる。

① 在アジア米軍の削減と、核の恫喝を背景にした機動戦型反革命体制の強化。

これはベトナムで「ベトナム化」という形で進められているように、地上軍の削減による経費の縮少をはかり、後進国民族解放闘争に対しては、「反共政権」へのテコ入れをもって対し、空軍力・海軍力の増強によって対し、何時でも米地上軍の大量投入を可能にしようとするものである。アジアからの後退でなくて、新しいやり方でベトナム戦争を遂行しようとするものではないことはわりまでもない。ベトナムでは地上兵力は十三万九千まで減らされるわけであるが、一方昨年十二月二十六日からの連続北爆のように空軍による攻撃は強化されている。そして緊急事態にそなえて、沖縄・グアム等の軍事拠点を維持し、フォーカスレナ作戦・フリーダムホルト作戦など演習に余念がない。

② 各国帝国主義との反革命同盟の強化

アジアにおいては、七二年沖繩返還を軸とした日帝との反革命同盟の再編であり、日帝のアジア反革命の役割の増大を促すものであ

る。ヨーロッパではNATOの強化であり、昨年十二月米帝はヨーロッパ加盟諸国の防衛分負担金の増額を要求し、認めさせている。

また十二月二十八日のニクソンとブランド西独首相との会談においてニクソンが「西側の強力な同盟関係を守り、北大西洋条約機構（NATO）を強力に維持し続けるために行動することが米国の政策である。」と述べたと報道されている。（七一年十二月三〇日付朝日新聞）また、二十九日の共同声明で在欧米軍がNATOとの全面協議なく一方的撤兵をしないと声明している。

③ 米ソ平和共存体制の強化、「米中平和共存体制」の準備。

米ソ平和共存体制およびNATOとワルシャワ条約機構との緊張緩和は一層進められている。米ソ間の「戦略兵器制限交渉」、ソ連西独不可侵条約、西独ポーランド条約、九月ベルリン四ヶ国協定（ソ米英仏）さらに「全欧安全保障会議」の動きが「東側」でも「西側」でも強まっている。そして今年五月のニクソンの訪ソなど米ソ平和共存体制は強化されている。

ここでソ連共産党の果している反動的な役割を見逃すことはできない。ロシアにおける帝国主義に包囲された過渡期社会建設を断ち切られて生まれたスターリン主義をさらに右翼的に修正し、カンボジア・インドル政権の支持、インドへの進出など、後進国民族解放闘争・革命戦争を対外進出の犠牲にし、「平和共存」の取引きの手段にしてきたことは、ソ連指導の誤り一般から社会帝国主義へ成長転化していることを示している。

一方、今年二月ニクソン訪中における米帝の意図は、インドシナ革命戦争の大後方としての中国に対する破産した「中国封じこめ」政策に代えて「米中平和共存体制」に抱きこみ、後進国民族解放闘

争を庄殺することをねらったものであり、他方台湾をあくまで擁護するという二面政策なのである。

ニクソンの「外交教書」で、「外交の基本原則として、『力の政策』『パートナーシップ』『交渉』を強調しているのは上の①②③に該当するものである。

十二月六日、トリュード・カナダ首相・十二月十三・十四日ボンビドー・仏大統領・十二月二十・二十一日ヒース英首相・十二月二十八日ブランド西独首相・一月六・七日佐藤という一連のニクソンによる首脳会談は、一つには国際通貨体制の手直し・貿易・資本の自由化をめぐる各国帝国主義の利害の調整であり、もう一つには、七〇年代世界反革命支配体制の構築に向けた帝国主義同士の打ち合わせであることは明らかである。

インドシナ戦争を先頭とする世界革命闘争の前進の中で、米帝が世界支配を維持してゆくためには、各国帝国主義との反革命同盟が不可欠となっており、また各国帝国主義は曲りなりに、米帝との反革命同盟の強化による反革命世界支配体制の中でしか、独自の利害を追求し、生き延びることができない。E.C.O.の各帝国主義にしても日帝にしても、現在においては、米帝との軍事力の差はあまりに大きい。

七〇年代戦略への転換を余儀なくさせたドル危機はさらに深刻化している。

八月ニクソンの新経済政策「ドル金交換一時全面停止、十％輸入課徴金制度の採用、物価賃金の九十日間凍結など八項目」は事実上アメリカ経済の破産宣告であり、同時にIMF・GATT体制のそれこそ最後の崩壊を意味するものである。

金準備の激減、七一年の貿易収支が七八年ぶりに赤字に転落したこと、高い失業率、それを打開せんとする低金利などインフレ政策にもかかわらず、不況が続きさらにこれまで米帝が統一市場の破壊として非難してきた保護貿易主義が米国内でも高まっていること、巨大な産産複合体の形成（国防費の三分の一以上がロッキード、ゼネラルエレクトリックなどの軍需産業に流出）と、戦略転換による軍需産業の危機。これらの事実が米資本主義が腐朽性と寄生性を強めていくことを、如実にものがたっている。ニクソンの新経済政策もまた昨年十二月十ヶ国蔵相会議でのドル切下げ、円マルク切上げという平価調整も、これを阻止することができない。

二 日帝の七十年代反革命戦略

A アジアの戦後処理

日帝に勝利した米帝の戦後処理の特徴は、強力な米軍をアジアの各拠点に配置し、日帝をアジア人民の防波堤として形成すると同時に、民族解放闘争に対して買収した民族ブルジョワジーによる「反共政権」の存在を許し侵略を強化するというものであった。

戦後日帝の成長―復活過程は一貫して、米帝の圧倒的な軍事力と経済力をもとにした戦後アジア支配体制のもとで、即ち米帝との反革命同盟（安保）のもとで可能であったことを示している。しかし米帝にとつても、日帝の復活は、中国及び朝鮮・インドシナ・フィリピン・インドネシアなどにおける各国人民の闘いに対決するにあたって不可欠であったのである。一九四五年、日帝の無条件降伏の後、中国朝鮮ベトナムなどにおいて、日本軍を米軍及びそのカイ

アの比重は米帝とは比べものにならないほど大きい。アジアへの侵略、反革命の全面的な開始こそ日帝の生き延びる道である。

米帝の戦後世界支配体制の破局―戦略転換の中で、日帝もいわゆる「日米共同防衛線」としてそれに従いつつ、七〇年代のアジア反革命戦略を確定することは緊急のことであった。六九年十一月日米共同声明以後、特に顕著となった日帝の傾向はそれの具体的推進でありその内容は次のように整理できる。

- ①七二年沖繩返還を軸とした、日米反革命同盟の再編強化。
 - ②①のもとに日「韓」台反革命体制を中心とした日帝によるアジア支配圏の確立。
 - ③①、②を具体的に保障する自衛隊の帝国主義軍隊としての完成（四次防）
 - ④国内の急速な帝国主義再編、革命闘争の圧殺と、強力な国民統合の推進による国民総動員体制の構築。
- それでは以上の四点について詳しく見てみよう。

B 日帝の反革命同盟の再編強化と日帝のアジア支配

日帝は、戦前の「大東亜共栄圏」を夢見つつも、「復興」したとはいえ総合的な力は余まらにも小さく、「ドル圏」という統一市場を維持し、米帝との反革命同盟のより強化のもとで、独自利害を追求していくことを余儀なくされている。

それは一九七〇年十月十日の「防衛白書」でも次のように確認されている。「わが国の防衛力と、日米安全保障体制に基づく米国の軍事力によって、日本防衛の万全を期するという体制である。われ

ライ軍の到着まで各国人民に対して降伏することを阻止し、逆に治安を命じたという事実は、米帝が日帝の植民地支配機構を利用せんとしたということにとどまらず、アジア人民の闘いに対して戦後の米帝と日帝との反革命同盟の結成がいかに帝国主義にとつて重大なことであったかということを如実に物語っている。（勿論それに対して中国の八路軍、朝鮮人民は日本軍を武装解除しベトナム人民は「八月蜂起」をもって応えたことは云うまでもない。）何よりもサンフランシスコ講和条約において日帝ブルジョアジーが沖繩を米帝に売り渡したということはその何人も否定できない証拠である。本来なら「屈辱」であるはずの領土の割譲が日帝の存在と復活にとって生命線であったのである。沖繩はその地理的条件からして、戦後南朝鮮・台湾・南ベトナム・タイとともに中国包囲網の重要な一環であるばかりか、米軍のアジアにおける反革命軍事網の中枢に位置し、核基地が置かれベトナム侵略戦争での最も重要な出撃拠点となったし現在においてもいや将来においてもそれは変わらないだろう。

このように、沖繩を売り渡し、安保同盟という米帝との反革命同盟を維持すること、その核のカサと包囲網の下でのみ日帝の驚くべき復興が現実可能であったし、一九六五年日韓条約締結以降商品輸出だけでなく本格的に開始されたアジアへの資本投下―アジアへの侵略もそれに支えられていたのである。それゆえに一九五〇年朝鮮戦争からベトナム戦争においても、日本は米軍の全ての行動を支持してきたのである。

したがって、インドシナ革命戦争の勝利は米帝を泥沼におとしいれただけでなく、より強力に日帝を動揺させた。日帝におけるアジ

われは核兵器と攻撃的兵器を持たない以上、日米安全保障上、国際情勢に大きな変更のない限り、日米安保体制は必要であると考えて「さ。」

しかし、日帝の米帝に対する相対的地位向上は反革命同盟の再編を招かしてきたのである。それが、七二年沖繩返還を軸とした、日米共同防衛線の実質化であることよりいってもない。

米帝が意図している、七〇年代アジア反革命体制は次のようなものである。

米帝は、在韓、在ベトナム、在タイなど米地上軍の削減、在日空軍、及び第七艦隊の縮小、沖繩を、機動戦型反革命体制の要として維持―強化する。そして一方、日帝に対して、軍事力の増強、防衛費の負担の増額によって、「アジアの防衛」の主要な役割を果すことを要求する。コナリー財務長官は一九七一年六月、ミュンヘンでの国際通貨金融会議で「日本は自由世界防衛のためにもっと防衛資金を負担すべきだ。」と発言、米兵器の購入と、在日米軍経費にみあった米国中期債の購入を要求している。さらに一九七一年七月来日したレアード米国防長官が「自衛隊の米第七艦隊任務の一部肩代わり」を要請したという報道（後、否定されたが）もそれを裏づけている。実際、第七艦隊及び在日米軍の縮小の動きは急速に強まっている。

これに対して、日帝は、単にその要求をのむという形ではなく、独自のアジア支配をねらう意味でも、積極的である。アジア各国は対外貿易が日本に大きく依存しているのみならず、さまざまな政府、「民間」を通じて、ひもつき援助によって、生殺与奪権を日帝に握られている。とくに、台湾、「韓国」の対日貿易は、全貿易の四〇

多以上をしめ、米を抜いて第一位となり、大規模な軍事、経済「援助」によって、日、「韓」、台反革命体制はますます強化されている。

「韓」国へは、在韓米軍の撤退と無償援助の打切の中で、昨年八月、日「韓」定期閣僚会議に於いて「無制限援助」が確認され、一方、台湾に対しては、中国国連復帰—台湾追放後も、佐藤はたびたび「友好関係」を強調している。また、「南ベトナム」サイゴン政権に対しては、昨年九月一六〇〇万ドルの「援助」がなされ、十月には、「ベトナム経済協力調査団」が派遣されるなど、本格的にテコ入れが画策されている。「韓」国、台湾、「南ベトナム」はいずれも、朝鮮、中国、インドシナを貫く、反帝統一戦線に対する「反革命軍事拠点」であり、これらの維持と強化は、日帝にとって、そのアジア支配にとって死活の問題なのである。

日米共同声明に於て「アジアの開発途上国」に対する「援助」は米より日本の「主体的役割」であることを明らかにした佐藤は七〇年十月、国会で「七五年G.N.P.の一割援助」をうたいあげ、七一年九月に発表した「円対策八項目」の一つに「対外援助」の増額をうたっている。しかも、これらの「援助」がほとんど日本商品を買うための資金というひもつきの「援助」であることは、たびたび指摘されている。

「ASPAC」の開催、東南アジアを対象として「円決済同盟」(その領域では貿易、資本取引を円で行うもの)の検討、など「円経済圏」への道を開き、当面は「ドル圏」にとどまりつつも、日帝独自のアジア支配体制の構築をめざしつつある。「韓」国、台湾の安全は日本自身の安全にとって緊要である。「

ある。日米帝の反革命同盟の再編は、日帝を軸とした「P.A.T.O.I. 太平洋・アジア条約機構」構想へと発展している。

反革命同盟の維持が帝國主義存立の絶対条件でありながら、その物質的基盤ともいべき統一市場の維持が、帝國主義間の独自利害の衝突が一層先鋭化することによって破壊されつつある、ということに、帝國主義者に解決できない矛盾が存在するのである。

一月六・七日、サンタレメンテでの佐藤—ニクソン会談は、資本貿易の自由化、I.M.F.の立て直しなど、日帝、米帝の各独自利害の調整とともに、七〇年代アジア反革命体制構築へ向けた「うちあわせ」を意図している。この会談で注目されるのは、「沖繩返還」の期日の決定、日米ホットラインの設置とともに、日帝及び米帝の中国に対する政策が、①中国を平和共存に抱きこみ、②台湾へはテコ入れを強化する、という二面政策に一致したということである。

「日米双方は極東の緊張緩和のために、対中関係の正常化を図る必要がある」という点で一致した。しかし、福田外相によると、これには、①日米関係や友邦との関係を犠牲にしない②台湾を含む他のアジア諸国に重大な関心を払う、との二条件がつらついているとされている。「しかも「今後たがい緊密な連絡をとっていくこと。」が確認されている。(一月八日付朝日新聞)

C 四次防と国内再編

四次防(七二—七六年度)は、これまでの防衛力整備計画から較べると決定的に違う。それはいわば、「攻撃型」への飛躍であり、自衛隊の本格的な帝國主義軍隊としての登場である。総額五兆八千億にのぼる四次防のねらいは、次の事実にも明白である。

という日米共同声明の有名な言葉、「アジアの安定という問題について主役を果すのは日本であり、米国はむしろ側面的な協力をするということにだんだんなっていくであろう」(六九年九月、佐藤)「日本の防衛範囲は、東は南島島、南は沖繩から西南諸島、西は尖閣列島を結ぶ東京を中心とした半径一〇〇〇カイリの範囲」(七一年五月、中曾根)等々の発言、さらにマラッカ海峡防衛論だけでなく、海峡の国際化の主張、マレーシアの領海十二カイリ宣言への抗議、水路の国際調査の費用負担など具体化していることなど、「アジアの盟主」としての日帝が登場しようとしていることを示すものである。

したがって、日帝の七〇年代アジア反革命戦略は、先に述べた米帝の要請を基本的に受け入れつつ、反革命同盟のより強化のもとで、軍事力を飛躍的に増強し、帝國主義軍隊を完成させ、独自の支配体制確立を進めんとするものである。沖繩への自衛隊派兵—沖繩の侵略前線基地化は、その最重要の絶対的な一歩なのだ。自民党の各派閥が「ポスト佐藤」をめぐる争いながら、「沖繩協定」の批准、及び関連法案(自衛隊基地確保のための土地強奪法など七法案)の採決にあたって見せた「団結」はそのことをはっきりと、物語っている。

しかし、ここで確認しておかなければならないことは、アジアに於る革命戦争の前進によって、日帝と米帝との反革命同盟はますます強化される方向にある、ということである。日、米、「韓」の三國軍による大規模な「合同演習」や、「沖繩返還」にあっても、米軍の基地機能は逆に強化されていることに示されており、中曾根らの「安保政定論」—駐留米軍なき安保もまたその方向に沿うもので

六九年八月六日、統合幕僚会議が有田防衛庁長官に報告した「昭和四十四年度長期戦略見積」で「将来戦の謀略は、朝鮮半島や台湾海峡での武力紛争の波及および間接侵略型の国内紛争であると分析し、米国の極東戦略は、これまでのように紛争に積極的に介入する態度を変更し、自国の国益を中心に考えるであろう。そこで日本は局地的紛争に独力で対処しうる体制をこれまで以上に積極的に進める必要がある、としている。」(七〇年一月三日付朝日新聞、及び藤井治夫著「自衛隊の作戦計画」参照)

日帝の七〇年代、アジア反革命戦略を、実質的に保障する、自衛隊の帝國主義軍隊の完成を図っているのは裏にはっきりしている。朝鮮労働党機関紙「労働新聞」が「日本軍國主義者の四次防の目的は、極東地域の『制海権』『制空権』を握り、単独で『局地戦争』『全面戦争』を戦うことのできる侵略性の武装力をそなえることであるが、それはまず第一に朝鮮に侵入するためのものである。」(七一年八月六日)と正しく指適している通りである。

自衛隊の全日空機の衝突、「ドルショック」の影響で、四次防の繰延が、あるいは縮少の動きがあつて七二年度の予算大蔵省原案で削られたものの、「復活折衝」では文字通り「復活」した。このことは日帝ブルジョアにとって、四次防が絶対のものであることを示している。四次防は先の「長期戦略」に備える第一歩である。

従つて四次防は次の三点を中心に装備が強化されている。

- ①陸上自衛隊の機械化—戦車四二〇輛、装甲車二七〇輛の増強。
- ②海上自衛隊における艦艇の大型化—大型ヘリコプター六機搭載の八千トン級護衛艦二隻、三千トン級の対地、対艦ミサイル搭載艦二隻、三千トン級揚陸艦など、これによって特にアジア水域の制海

権の確保、兵力の輸送及び船団の護衛をめざす。

③航空自衛隊の強化—戦闘機、F四Eファントム1五八機、航続距離一三〇〇キロ以上に及び新型国産輸送機三〇機など独力で制空権の確保と、地上部隊の急速な空輸をねらうファントムは核弾頭も装備可能で、F一〇四Jの七倍以上の爆弾を搭載でき、航続距離は実に三七〇〇キロにも及んでいるのである。「航空侵略に對しては、さらに防空迎撃、攻撃能力を強化し、相当の期間、航空を確保しうる体制を整える。」(六九年九月「七〇年代長期防衛」参照)

以上のように、四次防衛は「専守防衛」などでは決してなく、事実上は対外侵略の意図を赤裸々に示している。さらに四次防衛で注意すべき点は、兵器の国産を基本としており、すでに六九年度の武器の輸入は二〇〇億円足らずであったのに対して、国内調達率は二七〇〇億円に達している。兵器の国産は帝國主義軍隊の完成にとって必須の条件である。

四次防衛から五次防衛へと、自衛隊の帝國主義軍隊化は着々と進められている。現代の帝國主義軍隊の指標は①核武装②海外派兵③徴兵制④治安出動であるが、それぞれ次のように促進されている。

①核武装　すでに独力で核兵器を製造できる潜在能力はあり、「小型の核兵器が、自衛のため必要最小限度の力以内のものであつて、他国に侵略的脅威を与えないようなものであれば、これを保有することは法律的に可能といふことができる。」(「防衛白書」)と核武装の合法化を進めている。一九七一年七月来日したレアード国防長官に随行した米国防総省の高官が「米ソ間の戦略兵器制限協定が成立すると米国の核力は縮小傾向をたどり、その穴埋めに日本は一九八〇年代初めに防衛用核兵器を装備することになる。かり

に米ソ間で戦略兵器制限交渉が合意に達した場合、日本は中国の核の脅威にまともにはさらされることになり、必然的に核装備をすることになる。……」と述べたと伝えられる。核装備は長期的にはアジア支配をめざす日帝にとっては不可欠である。

②海外派兵　四次防衛自身が、自衛隊の侵略の軍隊化であることは先に述べた通りであり、沖繩への自衛隊派兵は海外派兵の第一歩である。また、佐藤は「邦人の安全」のためには自衛隊派遣もあつてゐることを示唆し、昨年十月西村防衛庁長官は、「アジア、太平洋の天災地には自衛隊を派遣すべきである。」と述べている。

③徴兵制　防衛白書の発表にあつた後、原案にあつたはずの「自衛隊の憲法上の限界として徴兵制をとらない」という一節が抜けてゐるのは、象徴的である。また自衛隊適格者名簿が各市町村でつくられてゐるといふいくつかの事実もある。そもそも、陸上自衛隊は幹部と下士官の育成に重点がおかれ、「徴兵制」の実施によつて一挙に、強力で大量の軍隊が出現するといふわけである。

④治安出動　治安出動は自衛隊の当初からの最大の目的の一つであり、六九年十月、富士山のすそ野で行なわれた治安出動訓練をはじめ、「災害演習」の名の下に何度も行なわれている。四次防衛の計画の一つには、治安維持専門の六万人の警備連隊の創設もある。

七〇年代の侵略・反革命の遂行にあつた後、国内の侵略・反革命体制—國民総動員体制の構築は次の三点において進められている。

①新全国総合開発計画を基調とした国内の帝國主義的再編—人民からのより強力で巧妙な収奪の強化、企業合理化—生産性向上、教育の帝國主義的再編、交通、運輸、通信手段の整備など。

②排外主義の鼓舞、國民総番号制などによる、民族統合、國民

統合。

③破防法、刑法改悪などによる革命闘争の圧殺、入管法—入管体制による在日被抑圧人民の闘争への弾圧、帝國主義的労働運動の育成。特に③についてふれるならば、Aで述べた米帝の戦後世界支配体制の上での日帝の急速な復興は次の二つの階級支配の特徴を規定した。

第一は戦後革命の、米軍による暴力的圧殺(マッカーサーの「一ゼネスト中止令、レッドパージ、共産党の合法化など」と、「高度成長期」における超過利潤による労働運動の右傾化、帝國主義労働運動の育成、及び上からの「農地改革」—米軍による大地主からの土地収奪、小作農の解放—と、「食糧制度」—政府による米の買上げ—による農民の保守化、以上を通じた階級対立の緩和—國民統合に成功したこと。いわゆる戦後民主主義の定着、第二に米帝との帝國主義間戦争に敗北したにもかかわらず、戦前の、中国、朝鮮人民への差別にとどまらず、「鬼畜米英」、天皇の神格化というような、熱狂的な民族主義、排外主義の育成—民族統合を困難にしたことである。

特に、第二の点は、「サラリーマン自衛隊」といわれる、自衛隊のイデオロギー的な脆弱性を規定している。合憲、違憲論争や、その名称自体が、精神的には、いまだ「日本軍」として登場できないことを示している。

沖繩への派兵に際しても、沖繩出身隊員をもつてするほどの気の使いようなのである。この脆弱さがあるからこそ、佐藤はただただ「国を守る気概」を説き、防衛白書は次のように述べるのを忘れてはくさず。

「眞の愛国人は国家の危急に際して、身をていし、国を守るといふ熱意がなければならぬ。」

天皇までも動員した、民族主義、排外主義の鼓舞は、日帝ブルジョアジーの緊急な課題であり、入管法、入管体制の強化、教育の帝國主義的再編などを通じて、急ピッチで進められている。

三 世界革命闘争の輝しい前進と

帝國主義心臓部での死闘への移行

A インドシナ革命戦争の前進と中国—朝鮮にいたる一大反帝統一戦線

一・二で見てきた七〇年代帝國主義の世界反革命戦略も決つて帝國主義を救うものではない。その破産の徴候は、すでに、以下の五点において著しい。それは第一にインドシナ人民を最先頭とする民族解放—革命戦争の果しない前進であり、第二に革命の根拠地としての中国過渡期社会建設を担う中国共産党—中国人民を中心とした反帝統一戦線の前進であり、加うるに第三に帝國主義間の矛盾の激化、第四に革命戦争の前進に直面している「反共軍事政権」の危機、そして最後に世界革命の主戦場を帝國主義心臓部に持ち込むべく旧コミンテルン系共産党の腐敗をのり越えて登場した革命的左翼を中心とした心臓部の労働者人民の闘いの激化である。

帝國主義の七〇年代世界反革命戦略をすでに破産させつつあるのは、何といつても、世界革命闘争の前進であり、その最前線を形成するインドシナ革命戦争と更に中国—朝鮮に至る偉大な反帝統一戦線の前進である。

インドシナ人民は、昨年二月、米空軍の支援をうけた「南ベトナム」軍によるラオス侵攻作戦を破綻に至らしめ、十一月の新たなカンボジア侵攻作戦をも粉砕し「乾期攻勢」の中でラオス解放軍は、ジャトル平原、ポロベン高原を完全制圧した。

「ラオス侵攻作戦」「カンボジア侵攻作戦」は、いずれも、地上軍は「南ベトナム」軍が主力で、B52による爆撃、ヘリコプターなどによって米空軍が支援するという「ベトナム化」政策の典型であり、その失敗はニクソンドワトリンの破産を宣告するものなのである。「ベトナム化」の基礎はあくまで、サイゴン政権の安定、「南ベトナム」軍の自立強化であるが、サイゴン政権は安定どころか危機を深め「南ベトナム」軍の士気は低く脱走投降が相ついでに始末である。

しかもそれだけではおさまらず、米軍の士気の低下は増々ひどくなっている。在ベトナム米軍兵士の間、麻薬常用者(国防総省の統計でも一昨年四〇%、昨年は六〇%近い)、脱走者、反戦兵士が急激にふえ、「ゴラル・シト」の水兵の反乱、反戦署名の拡大(在インドシナ米軍中四四名にも登っている)、フランギング(上官襲撃・七〇年一月以降四五名の将校の爆殺が伝えられている)等が相次いでいる。

十一月二〇日、北京訪問中のファン・パン・ドン首相は「アメリカ帝国主義はいぜんとして好戦的だが、固く二面的である。一方で彼等は世論をなだめるために一歩一歩米軍を撤兵させ、一定の戦費の削減を余儀なくされている。しかし、他方ではサイゴンからの軍を気遣いのように増大して『ベトナム化』をすすめる、南ベトナムにおけるアメリカの侵略戦争を遂行している。

由は中国共産党の歴史を見ていただければおわかりでしょう。元来領袖と話し合うのがわれわれの伝統なのです。…ニクソン訪中については過去一六年間、ワルシャワでアメリカと大使級会談が続けてきている。大使級と話し合ってトップと話し合っているならぬというのではないでしょう。ニクソン自身も訪中したいといふ、娘の新婚旅行も中国にしたいなど言っている。これは原則を破ることでないのです。それだけに、ニクソンが来るからと言って話がまとまるとは決っていない。まともならなくてもわれわれの方は一向に困らなすのです。」(七一年十一月十日美濃部との会談において)と述べられているように、台湾及びインドシナからの米軍撤退・チェン政権放棄をのめないこのニクソンが醜い姿をさらけ出すことは間違いない。

B 帝国主義間の矛盾と「反共軍事政権」の危機

ニクソンの新経済政策が矛盾を蓄積してきたIMF体制の危機の爆発であり、昨年十二月十八日、十ヶ国蔵相会議での「平価調整」も一時的な手直しでしかないことは先に述べた通りである。ドルと金の交換は停止されたままであり、米の資本収支、貿易収支の赤字を打開する策は立っていない。しかも、「平価調整」による打撃をうけたヨーロッパ諸帝国主義は七三年拡大Bの成立をはかるとともにブロック経済・Economic Circleの成立をはかるとともに、私・西独・英などは成長率の軒なみの低下、スタグフレーションなど国内危機をかかえるだけにその傾向はますます強く、Economic Circle内部でも対立は深まっている。

また、日帝は「円決済同盟」を検討し始めており、牛肉・オレンジ

同時に彼らはカンボジア・ラオスでニクソン・ドクトリンの適用を急ぎ、ベトナム人民同志、インドシナ人民同志を闘わせる計画を実行している」と指摘し、アメリカ侵略者と全面的勝利まで闘う決意であると述べた。(十一月二二日アカハタ)

インドシナ人民はベトナム党勸告はどの指導の下で英雄的な闘いをすすめるべきかを推進している。

またインドシナ革命戦争の大後方であり、朝鮮とともに巨大な反帝統一戦線を形成している中国人民の闘いを大きく平価しなければならぬ。中国政府はたびたびベトナム人民支援を表明しているが、十一月二四日北京でのファン・パン・ドン首相の歓迎集会で周恩来首相は再度次のように確認している。

「中国人民は毛主席が『七億の中国人民はベトナム人民の力強いうしろだてであり、広大な中国の領土はベトナム人民の信頼できる後方である』と指摘したことを永遠に忘れない。われわれは毛主席のこの教えを断固として守り、全力を尽してベトナム人民とインドシナ人民の抗米救国戦争を支援する。インドシナ三國人民が引き続き闘い、祖国の土地から米國侵略者の影をなくすまで中国人民はあなたたちが徹底的な勝利を勝ちとるのを支援するであろう。かれわれはあらゆる可能な措置をとる準備をしており、民族的犠牲を払うことを惜まず、世界にどんな情況が起ころうとも、われわれの断固たる立場はゆるぎはしない。」(七一年十一月二四日毎日新聞)

「ニクソン訪中」、中国の国連復帰は、あらゆる中国封じ込め策動が破産したことを示しており、アジアの反帝統一戦線の力強い進撃を示している。中国を平和共存体制にまき込みとするニクソンの意図も、周恩来首相がいじみくも「ニクソン訪中を受け入れた理

ジ・電算機などの貿易の自由化、対米輸出の制限を要求する米帝との「経済戦争」は白熱している。このように帝国主義間の利害の対立は、輸出競争から市場の分割をめぐる傾向を深めており「統一市場」は崩壊しつつあり反革命同盟を脅かしている。

一方、大規模な援助と「先進国」への輸出に頼ってきた「後進国」とりわけ東南アジア諸国は、「先進国」の不況、米帝の「対外援助」縮小、輸入課徴金の設定等で決定的な打撃をうけた。その上、在留米軍の一部撤退、「米中接近」に直面した「韓」国・台湾・「南ベトナム」・タイなどの危機の深さははかりしれない。

ドルショックをまともに受けた「反共のトリゲ」―「韓」国では深刻な不況、物価の急上昇、失業者の増大など、「援助」と外資に全く依存してきた経済の危機が表面化している。それを背景に、ソウル郊外の広州大団地移住者の暴動、学生の反乱、財閥の焼打ちなど、南朝鮮人民の決起が巻き起っている。これに対して朴は十月十五日「衛戍令」、十二月六日「非常事態宣言」、さらに二七日「国家保衛法」の強行可決・施行と暴力的圧殺をもって乗り切らんとしている。

タイでも同様に、不況が深まるとともに、对中国交を要求する動きが強まったのに対して、タノム首相は、戒厳令をしき、議会を閉止し軍部による独裁へ移行した。

「南ベトナム」でもインフレが高まり昨年十一月十五日ピアストルが大巾に切り下げられ経済危機が深まっている。また、「農村平定計画」は完全に失敗し、それどころか「南ベトナム」では、米國とチュウ政権に対する都市地区の大衆運動の強化がきわめて重要な成

功を収めた。」(十二月十九日ニヤンゼン)

このような「反共軍事政権」リアジアにおける反革命拠点の危機は、そのまま、帝国主義のアジア支配の危機なのである。

C 帝国主義心臓部の闘争

帝国主義階級緩和政策も

ドル危機・IMF体制の

崩壊は、各国帝国主義の経済危機を深刻化させた。それは不況とスタグフレーションだけではなく、失業率の増加として表われた。とくに、アメリカはひどく、昨年十一月の失業率は六%で四百八十万人に達している。特に、黒人の失業率は二〇・七%の倍り、白人の五・三%の二倍にあつてゐる。また、二〇才前後の青年及び、ベトナム帰還兵の失業率が高い。

これを背景に、昨年一月、ニューヨークでは三万人の警官ストなど、労働者の闘いは拡大している。また、昨年七月、太平洋海岸の港湾労働者はストで決起し、ニクソンは輸出の促進のため、タフトハートレー法を発動中止命令をださなければならなかった。一方、反戦運動も再び高まりを見せており、ベトナム帰還兵による「自由の女神」占拠闘争、リンカーン記念堂占拠など続出している。

イギリスでも、昨年、失業者は戦後最高の百万人近くに達し、労働者の闘いは活発化し、アイルランド解放をめざすアイルランド共和国軍のゲリラ闘争が続いている。

フランスでも同様に、インフレ、失業率がひどく、六八年五月革命以後、フランス共産党の腐敗を乗りこえようとする。新左翼による闘争は注目される。

米における、ブラック・パワーなど、フランス新左翼、西独SD

など、帝国主義と城内平和を取り結んでいる。旧コミンテルン系共産党の腐敗を批判し、乗り越えようとしていた革命的左翼は、帝国主義心臓部における階級闘争の激化を帝国主義打倒へ率いていく歴史的任務をもって登場したのである。

インドシナ革命戦争を先頭とする世界革命戦争の前進は帝国主義心臓部においても、蜂起し労働者権力樹立の現実性をもたらししている。すなわち、現時機が帝国主義の最後の息の根をとめるべく、その主力を心臓部の労働者人民が荷なう八帝国主義の要塞の正規の攻囲段階に突入している、その現実こそが帝国主義心臓部の激闘であり要因である。

戦線報告・闘争方針 IV

西成―釜の労働者の冬の闘い

反戦連合・南大阪地区

全国で最も献身的に、革命的に闘っている同志の労働者・学生の方さん！
釜の労働者として、大阪市西成におけるこの間の活動の報告をしたと思います。

「ボルト通」第五号の山岡一雄氏の報告にもあつたように、南大阪の階級闘争は、全国のその縮図として、最も典型的にその姿を表わしている。中小企業労働者の闘い、未組織労働者の闘い、在日朝鮮人人民の闘い、部落人民の闘いと、その問われている内容も、最も鋭く、帝国主義・資本主義の矛盾として体現している。

昨年の八三里塚・沖繩の闘いの過程や、更には、沖繩への自衛隊派兵を含む今年の政治過程は、日本帝国主義―佐藤政府のむきだし攻撃と、それに立ちむかう労働者人民の激闘として、暴力的対決として現われてきている。なかんずく、侵略と反革命の飛躍をせまられている日帝としては、戦後「民主主義」の幻想も一切なげうつた、あからさまな、暴力そのものの姿を、日本全国の労働者人民の前に、更に鮮明にしてゆくだろう。

我々は、この帝国主義の攻撃を、地域末端で、最も抑圧され、苦悩し、なおもこれと闘っている先進的労働者・学生との結合をはかり、そして共に闘ってゆかねばならない。その意味においても、昨年末から今年にかけて、問題となつた二つの闘いの報告をしたと思います。

1、組合(全港湾西成分会)が克ちとつた年末一時金闘争
2、地域の労働者・学生が集まつて行なつた釜ヶ崎越冬対策

△相対的過剰人口や、産業予備軍に、いつでも資本蓄積の規模及び勢力との均衡を、保たせておく法則は、ヘファイストスのくさびがプロメテウスを岩に釘づけにしたよりも、もつとしつかりと労働者を資本に釘づけにする。それは、資本蓄積に対応する貧困の蓄積を条件づける。だから一方の極における富の蓄積は、同時に、反対の極での、即ち、自分自身の生産物を資本として生産する階級の側での貧困労働者、奴隷状態、無知、道徳的墮落の蓄積なのである。(マルクス『資本論』)

「ドルショック」「円切り上げ」のもつていゝ意味を再度とらえておく必要があるだろう。高度成長政策で日本の労働者からしぼりと、米国のベトナム戦争政策の巨額のドル撤布を、ベトナム特需という形で露骨に吸収し、百数十万ドルの外貨準備として、使い道のない、「ためるためにためる」その巨大な過剰資本を形成していつた日本資本主義は、アメリカの経済混乱、アジアでの米帝の敗勢局面の中で、より多くの搾取と収奪のため（国内の五分の一以下で保障される朝鮮・台湾の労働力、アジア各地での原料資源獲得のため）アジアに巨大な資本投下を企つてゐる。そして、これらの植民地的支配を維持、貫徹するためにも、国内の産業再編・労働力の再編を急速に、あらゆる部門で行なつてゐる。

昨年度から顕在化してきた日米間の経済関係の「悪化」、貿易自由化の推進の中で産業構造の変化等々の過程で、「ニクソンショック」「円切り上げ」を看板にした資本家階級による攻撃が露骨におこなわれてゐる。ユニチカ五〇〇名、三井東洋一五〇〇名の大衆解雇、日立、コロンビア等の新規採用の中止、軽工業、オモチャ食品、繊維企業の倒産等、大量の失業者群が形成されてゐる。それとともに、レイオフ採用、配転、出向、残業規制、諸手当の削減、一時金の切り下げ、スピードアップ、労働密度の増大がなされ、職場内における権利の抑圧として、労働者に激しくのしかかつてゐる。

これらのことは、「一日使い捨て労働力」として利用されてきた西成の労働者の生活に、直接の影響を与えるものである。《産業予備軍は、産業の好況期には、自由に利用でき、続いて必らずやつてくる恐慌によつて、街頭にほうり出される。それは、資本に対する労働者の生存闘争において、つねに彼らの足にまとわりつくおもり

々々個々の労働者がかかえてゐる矛盾を解決しなければならぬ。労働者階級のかかえてゐる矛盾を解決しなければならぬ。

(1) 西成分会（全港湾建設支部）の冬期一時金闘争

夏期、「ソーメン代」としてはじめて画期的な一時金として、一人一六〇〇円（約二五〇〇人分）が獲得された。これは、いかなる組織形態も与えられず、完全に、行政からも、企業からも、見殺しにされてきた労働者が、自らの生活と生命を守るために立ちあがる方法を見出したものである。この経験を生かして、年末、大阪市・府と交渉をかさね、更には二台のバスをつらね、二二〇人の釜の労働者自身が、建設業協会と大林組に、大衆団交を行なつた。毎日数千の労働者を雇つてゐる建設業協会（大手の建築業者二八〇社が集まつて作つてゐる）が、失業保障も、労災保障もせず、ピンハネ業者を入れ、釜の労働者を使つてゐるのに、一時金をはらうのは当然であり、大林、鴻ノ池、竹中等の大業者がたつた二〇万出せば、釜の労働者（手帳所持者）は一万の手当になるといつた。正当な論理である。これに対し、協会は返事をのばし、回答を渋つた。大阪市が、労働者一人に二五〇〇円払う旨伝えてきた。年末がせまり労働者の生活が窮迫してゐることを考え、組合はここで妥協した。この闘いは、確かに多くの不充足性はありつつも、やはり、労働者自身が闘い取るという貴重なものを残し、更に今年の夏期、冬期一時金の獲得への道もひらかれてきた。昨年末の一時金は、十二月二十九日、三〇日の両日、組合の手で三〇〇〇人近い労働者に支給された。

であり、労賃を資本家の欲望にかなつた低い水準に抑えつけるための調節器である。V（エンゲルス「反デューリング論」）
求人バスの少ないため、常に毎朝、数千の労働者が、毎日「アブレ」てゐる。ピンハネ手配師は、労働条件を書いた紙を掲げないため、労働者は、「いくらもらえるのか」「どの場所で働くのか」「何時から何時まで働くのか」「食事、アジ代がつくのか」も知らないまま、バスに乗るのかわせまられる。行政センターは、この不法を黙認する。契約違反はいつも行なわれてゐる。

土方のような、建築関係の「シンдой」仕事、穴掘り等々が、朝の五時にバスに乗り、八時五時まで働いて、なんと二二〇〇円、一八〇〇円の仕事五〇人の求人もちまち満員となる。二二〇〇円で、ドヤ代（一畳二五〇円、三畳三五〇〜五〇〇円）を払い、食費を出したら、残額は？ 建設関係の仕事は肉体的にシンドク、連続的に働くことはきわめてキツイ。そこで仕事を休む、（仕事が少ない）アブレる、生活はすぐさま破綻してしまふ。それに、西成労働者二〜三万のほとんどが単身男子であるが、ここで家族をもつと、《労働者が最良の場合にかせぎうる剰余は、せいぜい彼の子供四人につき二人が餓死しなければならぬ程の額》（マルクス『経哲手稿』）ということが現実化する。（今年一月三日、ピンハネで、ミルク代までとられて乳児が死亡）

だが、われわれは、貧困の中に貧困しきみない小ブル民主主義者になるのではなく、はつきりとマルクス主義者として、その中に、旧い社会をくつがえす革命的、破壊・建設的な側面があることを、未来を孕み、模索している部分があることを自覚しなければならぬ。ブルジョア支配を打ち倒し、新しい労働者権力を打ち建てる我々の任務の一環を、この労働者の海の中で行なわねばならぬ。我

(2) 釜ヶ崎越冬対策

大阪では、毎年三〇〇〇人（その大半が南大阪で）の餓死。生きたおれがでる。年末年始にかけて、西成を中心に数十人がそうなることにに対し、行政を行なうものはなんら対応をとらない。

年末・年始は仕事がないので、金を持たない労働者が多く、「青カン」（野宿）を強いられる。ドヤも、かせぎどきとあつて、五日ないし十日分まとめて払う人間しかとめないで、「青カン」する労働者の数は二〇〇〜三〇〇人近い。

これに対し、西成に働く労働者、医師、看護婦、学生が集まり資金をため、越冬対策実行委員会を結成し、テントをはり、たき出しをし、食事を配給し、病気のひとには手当をした。夜間は、パトロールをし、青カンをしている人の世話や、病人の看護等々。

行政（中央厚生相談所）は、「生活のできなない人間に対して世話を用意する」といつつも、十二月三日になると、事務所を閉め「あとは警察へ行つてくれ」とか「我々も労働者だ。休むのがあたりまえだ。」との言葉をもつて一切の対応を拒否し、逃亡してしまつた。

また、救急病院に指定されていた阪和病院は、その労働者の対遇のひどさ（階段からつきおしたり、着替を与えなかつたり、精神病院行きの桐喝をかけたたり、ガードマンを使つて患者の対応をさせたり）に、労働者が相次いで逃げ帰つて来るという仕末であつた。

実行委員会は、このような、あまりのひどい大阪市行政に対する抗議を行ないつつ、「ひとりでも釜ヶ崎から餓死者をださない」を合言葉として行なわれた。十二月三〇〜一月四日のセンターの開館ま

での間、様々な行事を盛り込み、昼夜を分かたず活動を行ない（この間不幸にも三名の死者がでたが）一定程度の成果をあげた。実行委員会に結集した労働者、学生は、このような運動を、今後も行なうとともに、大阪市の、決定的にひどい、不十分な行政に対し、闘いをくむことにしている。

戦線報告・闘争方針 V

刑法改悪 — 保安処分粉砕 /

I 刑法改悪 — 保安処分新設の意図と背景 II 刑法改悪 — 保安処分を粉砕せよ /

法制審議会特別部会は既に刑法改正と保安処分新設を決定し、三月より総会審議が開始されんとしている。日帝—佐藤政府は、保安処分の単独立法化も辞さぬと、なみなみならぬ決意を表明している。以下、刑法改正—保安処分新設の意図と背景を暴露し、今日の保安処分粉砕全国共闘会議と保安処分粉砕闘争の発展に向けての我々の見解を示していきたい。

I 刑法改悪 — 保安処分新設の意図と背景

① 保安処分は単に「精神障害者」「アルコール中毒者」を対象としているのではない。既に彼らに対しての保安処分体系はほぼ完全にしかれており、立法化によって、全領域における保安刑が、全人の郷土防衛隊の設立、防災訓練と、住民のあらゆる機会をとらえての治安活動への動員が意識的に行なわれている。

② また、企業保安処分—産業精神衛生が帝國主義労働運動の生成とともに導入され、生産性向上にもなりあらゆる諸矛盾の予防的処置と、職場不適応者の排除が意図されている。

③ 要するに、今次刑法改正—保安処分新設は、平時における帝國主義的革新刑事政策であり、体制にとって危険かつ不必要な人間を排除、拘禁、更には外科的療法を用いての個人的抹殺が目的である。

④ 六七年一〇・八羽田闘争以降、三年間の激闘は、赤いプロレタリア国際主義に導かれた市民社会深部からの人民の暴力を聞いてつた。六九年一月決戦の敗北以降、労働者人民の闘いは、様々な歪曲、混乱、退行を含む複雑さをもたらしながら、死闘への移行を自然成長的に歩んでいる。その自然成長性は、その国際性にも、その大衆性にも、その暴力性にもあらわれている。この死闘に、強力な国内反革命—市民社会の反革命的統合でもって「勝ち抜く」こと。ここに、日帝—佐藤政府の刑法改正—保安処分新設の真の意図がある。

⑤ 七二年は世界革命闘争の帝國主義心臓部での死闘への移行を待ちとるべき年である。世界革命闘争の炎心たるアジアに対する侵略・反革命遂行に「命をかける」日帝—佐藤政府の国内反革命—市民社会の反革命的統合は、昨秋、とりわけ議會会主義左派、社共の、日帝沖繩「返還」路線への思想的屈服（帝國主義民族への包摂）と、官僚、警察専制への全面的降服（権力再編へのはてしなない「左」からの補完）—革命派の暴力的圧殺として進行的に。加えて、戦後市民社会の紐帯—「平和と民主主義」を暴力的に解体し、様々な差別構造で労働者人民を分断支配し、労働者人民を排外主義で統合せんと

民に対して、地域末端まで貫徹せんとしている。「将来再び禁錮以上……おそれがあり」「保安上必要を認められる」（第百十條）だけで、終身収容—終身刑が可能になる。

② 「犯罪その他、これに準じて考えられる反社会的行為への国家的処置」（「改正」刑法準備草案理由書）を規準とする保安処分は明確に治安体制の一大完成化としてある。戦前の治安維持法にもまさるとも劣らない。戦後の破防法—政防法を中心とした治安刑事政策の中心環が、刑法改正—保安処分新設である。「組織には破防法人には保安処分」と言われるように、革命家の抹殺をねらうものである。昨秋、三里塚—沖繩闘争に対する権力のフレームアップ、不当逮捕、長期拘留等の集中的弾圧は、明確に革命的左翼の組織解体をめざしている。また、騒乱予備罪、火炎ビン取締り法の新設、公安三課—戦前の特高の新設を行なわんとしている。

③ しかし、すでに「保安処分」的政策—刑事政策は着実に進行している。精神衛生法体制を軸として、精神医療の一層の隔離収容主義を強め、精神病院の収容所化分類収容を押し進め、更には犯罪生物学者らの精神病質者概念の拡大適用により、「危険な常習犯」は反体制的だと国家よりらく印を押された全ての人々に対する、弾圧抑圧刑法として「発展」することは確実である。「精神病質者」の「私宅監置から、病院という社会施設への監置」を目的として地域精神衛生網がはりめぐらされ、更に地域管理体制の強化がなされるとしている。奈良五条山病院、鳥山病院、大阪和泉丘病院等は、その中枢センターである。また、八月天皇来広の際、強制入院の数が急増した。関西を先頭に個人カードが形成され、国民総背番号制の導入でもって、国家の支配が直接的に個人まで貫徹せんとしている。また、警察—機動隊—自警団、防犯協会の組織化、船田中の提唱す

◇ われわれは、全国各地で、われわれと共通の問題意識をもって、闘いを組織している青年労働者・学生が多数存在していることを確信しています。これらの諸君との連絡・交流及び相互批判等を行なうことを通じて、更なる闘いの前進をはかってゆきたいと思ひます。

この通信欄を、そのための一礎石として大いに利用されんことを訴えます。

◇ 宛先：京都市左京区東竹屋町 京都大学熊野寮B棟307
レーニン研究会

氏名： _____ 年令： _____ 才

住所： _____ TEL _____

職業： _____ 所属団体名 _____

×××通信欄×××

※ 次ページもご利用ください。

している。
⑧ 刑法改正―保安処分新設は単に現代帝国主義あるいは過渡期世界における刑事政策としてあるのではない。七二年自衛隊の沖繩派兵―世界革命の新しい前進に対する日帝の直接対決、日帝による沖繩の侵略前線基地化―を軸に、権力再編、「国民的統合」の飛躍的強化の中にこそ、日帝―佐藤政府のなみなみならぬ決意がある。

II 刑法改悪―保安処分を粉碎せよノ

今日、十二・五慈悲医大における保安処分粉碎全国共闘会議の結成大会をめぐって、若干の混乱がある。そこで明らかにしたのは党派闘争による大衆運動の破壊として現われる、革命的左翼の極度の政治指導の貧困である。ブルジョア国家・社会諸機構の中核―末端の様々のところからわきあがる人民の闘いは、増大するばかりである。だが、革命的左翼が、この階級闘争の前進的要素を、党の確立、党組織と指導の展開、党性と結合した大衆の闘いへと導くうえで、墮落と後退、混乱、危機への転化、無原則の横行に陥っていることに危機の眼目がある。その実践上のあらわれは、主要には、一方でのテロリズム、暴動主義への傾斜、他方での経済主義への譲歩である。前者に圧倒され追隨していく部分には、とりわけ帝国主義的経済主義と召還主義の害毒がはびこり、党派闘争主義がまんえんしている。三年間の激動がつけつけた八革命の軍事の問題を、蜂起―労働者権力に至る「計画された戦術」として、一貫した党的活動全般の中でどのように位置づけ、展開していくかをめぐって、混乱は発生し、全面化してきている。軍事無政府主義、軍事観念論にもとづく政治闘争遂行上の恐ろしい主観主義、冒険主義がまんえんし

ている。大衆の中の長期の困難な党的活動と、大衆自身の経験を媒介とした権力への接近を、軍事的恫喝、衝撃、号令のみで置き換えんとしている。
このように混乱・危機を闘うこと、かつことが、革命と党のための現在の核心である。
われわれは、その第一歩として、保安処分粉碎闘争を、最先頭で闘い抜くつもりである。

中国革命とわれわれ・2

高田 宏・山本次郎

第二章 「中国革命の原動とコミンテルン」

第一節 中国革命の源流

第二節 新しい革命闘争の始まり

・19年「五・四運動」

第三節 コミンテルン中国支部と中国

共産党の建党

第二章 「中国革命の原動とコミンテルン」

中国の大都市の周囲には、工場の高い煙突が畑の中に長々とその影をおとしている。だがその畑はいまなお木製の犁でたがやされている。海港の埠頭には巨大な定期航路船が荷下しをしているが、その荷物はムチで追いたてられる人の背で運搬され、原始的な荷足船で奥地にはこぼれている。街の大通りでは大型トラックが、役獣のようにくくりつけられた人間にひかれる荷車のわきをごう音をたてて追い抜いていく。迷路のような路地の裏には、男、女、子供たちがいまなお手と簡単な道具だけで商品をつくっている町工場、家内工場がならんでおり、街の一角には巨大なビストンが上下し、巨大な壱車がりなりをあげて回転している大工場がある。鉄道は広大なこの八国Vの諸地方を横切って走っているが、それらの諸地方の内部は、ただ人間の足と一〇〇〇年もまえから存在する運河によっ

つなげられていた。海岸からアジアの中心までひろがる、この広大な平原の疲れた土地の上には、都会を中心に村落にもこのような対照がひろがっていた。中国の八生活の型はこわされ、ずたずたにされ、正常でなくなつた。世界をおおいつつあつた生産・運輸・財政の近代的形態は、中国の過去の着ふるされ、すりきれて糸もあらわな木綿の下の地に重ねられた化繊のようなものだつた。化繊は、そのわずか一部分が木綿の中に織りこまれていたにすぎなかつたが、そこから、相方の八はつれが広がっていた。中国の古い織物は約八十年前に、ヨーロッパ資本主義がその商品・鉄器・食欲・思想をもつてこの八国に侵入したときに、すでにくずれつあつた。この衝撃の結果は悲惨であり、革命的であつた。ひきおこされた諸々の闘争は、しだいに積みかさなり、勢いをまし、この八国とその八国民を新たな解決の方向に押し流してきてきた。そしてこの奇妙な対照の織りなす広大な、疲れきつた社会には、五億に近い被抑圧人民の生き抜くための闘争が包含されていた。それは中国革命の原動力であつた。

新しい中国の革命闘争——それは、一九一九年「五・四運動」にはじまつた——はこのような舞台をもち、その発展とともに舞台を回していった。以下、このような中国社会に造り上げられる歴史過程を概観し、この対照を外見にとどめることなく社会的に分析し、中国革命の原動力を階級的に規定する作業にとりかかつてみよう。さらに、コミンテルンが、この中国革命の原動力をどのように把握し、いかに中国の共産主義運動を形成・指導していったのかを、過渡期世界におけるマルクス主義の創造的發展を認むとする苦悶と挫折の記録として確認したい。これは、プロレタリア世界革命をめぐる激闘に突入した当時のコミンテルン（ロシア共産党）の限界——実践的

・組織的制約に規定された——が挫折から敗走へ、敗走から反革命的収約へ転化する過程のはじまりであり、当初は、このコミンテルンの限界性を規定していた芽ばえはじめたばかりの中国共産主義運動が、革命闘争の具体的実践の中で、コミンテルンの「指導」を乗り越えていく過程の準備でもあるのだ。

第一節 中国革命の源流

a・ヨーロッパ資本主義の触手が中国の海岸線を捕えはじめる以前に、中国の封建社会とそれに寄生していた満州人の王朝は腐朽し、くずれつつあつた。農民は地主には地代を、商人には利ざやを、高利貸しには利子を、国家には労力と物品と貨幣で税を支払っていた。十七Cから十八Cにかけて、商品経済の浸透と、人口の爆発的増加の結果、中国農村の自給的経済は分解していった。この傾向は中部で著しく、土地は大地主の手に集中し、自作農が小作に、小作が雇農に転落し、さらに土地との結合を断たれ、生産関係から排除されていった。この過程は大むね次のように進行していった。商業資本と安価な商品の農村への流入は農民の昔ながらの自給自足に終わりをつけさせた。農民は生存のためには商品を生産しなければならなかつた。だが、その所有地の小ささ、生産手段・技術のおくれ、交通の未発達のため、農民は破滅寸前にみちびかれた。かれらは余剰を生みだすほど十分な生産ができなかつたばかりか、肥料代ばかりでなく、つぎの収穫期までのかれの生活に必要な食料・種子代・地代・道具の使用料を支払うために、反対に負債をおわざるをえな

かつた。そのためかれらは自分の収穫ばかりか土地までも担保にいられて金を借りた。その利息は三〇%以下ではない。しばしば六〇、七〇、九〇%にも達した。破産的な課税の負担と、かれの支配者となつた軍閥による貧欲な搾取は、かれをしていつていつて深く深く負債のなかにおいやり、その土地を高利貸しや徴税人の御意のままにしてしまつた。農民は自分のわずかな収穫を、もっと速く市場に出して利益をあげることは考えられないから、商人によつて自由自在にまき上げられた。一年間の辛苦の結果はまがいなく、余剰では

なく新しい負債となつた。そして負債は次の年も、更に次の世代までも農民を追いかけ、土地を奪い、小作人に転落させた。小作人は、地主に収穫の四〇%から七〇%を地代として支払わねばならなかつたうえに、封建的な慣習として特別負担金や贈物、無償労働を提供する等の義務を背負っていた。小作人は、しばしばより不安定な雇農に転落し、最後には土地からたたき出された。大地主は多く不在地主として都市に住み、地方官吏、商業資本家・高利貸を兼ねているか、血縁的・金権的関係をもつて結託していた。土地から「自由」となつた者は、飢餓に苦しむ農村では流民、乞食、匪賊となつたり、地主の私兵・軍閥の兵隊をふくれ上らせたり、会党とよばれる秘密組織を組織したりした。雇農を最下層とする農民を救いのない慢性的な貧窮と隷属の下にしばりつける。大地主（彼等は郷紳、郷商と呼ばれていた）やその代理人を頂点とした封建的な生産社会権力関係の支柱としての暴力装置の役を地主の私兵ははたしており、会党は性格はさまざまであつたが、農村に密着し、雇農小作をまきこんだ、互助組織としての性格と、宗教的・政治的・秘密結社の性格を兼ねていた。数百万は都市に流れていき、ルンペンとしてたむろし、苦力としての牛馬のようにこき使われ（労働力は牛馬を維持するよ

安上りだつた）新しく移入され、生まれてくる工業に最も安価な吸収しつけない労働力を不断に供給する源泉となつていった。さらに一部は華南から海外へとながれ出していた。農民・流民の暴動・打ちこわしは後を断たず、貧困と失業からの解放の要求は莫大なエネルギーを持っていた。

そして、すでに危機にあつた中国の経済的・社会的構造は頂点においてもヨーロッパ資本主義の侵入のもたらした腐食作用の影響に急速に反応した。銀の流出と工業製品の流入は、農村の家内工業を一掃し、流民・都市貧民は急増した。しかし、十九Cなかばに広東を中心にして興こつてきたマニファクチャー生産は解体され、外国貿易で巨富を手に入れた一部の商業資本、官吏はその富を産業資本に転化せず、土地の集中・高利貸の資金とした。彼等は帝国主義の中国侵略・分割の野望と任力の下で、商品の後からやつてきた資本投下・資本貸付と結びつき、買弁資本家として、日清・日露の強盗戦争をへてようやく発生しつあつた民族資本を圧迫し、中国の封建的関係の維持に利害を有する勢力へと発展するのである。地方における財政権と私軍をもつて地方権力として割拠していた軍閥は、彼らを通じて、帝国主義の中国分割の道具と化していき、中国人民の革命闘争の前に立ちたかかってくるのだつた。

b・中国人民の戦いはアヘン戦争・広東周辺での反英闘争（一八四一—一八五八）、四一—四九年にかけての一〇〇回以上の農民蜂起（華南中心）から太平天国農民戦争へと発展し、農村で政治権力をにぎつた農民は、土地の没収と分配を開始し、中国の封建的・生産関係を変革する芽ばえを示した。しかし、その指導者達は、ヨーロッパ資本主義の「開化性」、「自由・平等・博愛」の理念を、現実的に中国で彼等が行なつたアヘンと銃をもつての野蠻な侵入よりも信用してし

まった。反封建は反帝と結合しえなかつた。米英帝國主義と軍閥がこれを圧殺した。

さらに、一九〇〇年には義和団とよぶ宗教的秘結社に「指導」されるという様相を呈しつつ、民族的反帝國主義の大反乱が山東省を中心につきおこった。そのスローガンが「排滿興漢」から「扶清滅洋」に変わったように、ここでは反帝は反封建の視点をもちたなかつた。清朝はこの闘いを利用しようとしたが、帝國主義の軍事的圧力の下に、さらに売國的な議定書をとりかわした。清朝末の諸「改革」は、人民の革命的決起に依拠せず、これに敵対するものであつたが故に、王宮の門から一步外に出ると、そのまま外堀に流れこみ、そこで腐つてしまつた。人民の思ひきつた起ち上りに依拠した革命以外に解決の道はない事は明らかであつたが、政治指導は政治的・組織的に未形成であり、指導的階級も未成熟であつた。

一九〇五年・一九〇八年の米日商品に対する商人・資本家・労働者のポイコット闘争の波を受け、鉄道会社の利収のアメリカ資本への売り渡しに対する闘いを契機として、一一年一〇月に革命の火ぶたは切られた。しかし、この辛亥革命も同盟会を中心とした革命派の事前壊滅と蜂起した兵士達の政治能力の未熟性と人民の決起に対する指導の完全な欠除のため、政治的統合力を立憲派（ブルジョワジー上層と「開明的」地主の利益を代表し、人民の決起をのそんではいなかつた）に奪われ、農民を中心とした人民の決起も個別に解体される中で、帝國主義・それに結託した軍閥の支配の下に敗北して行くのである。革命は清朝を打倒したが、統一国家の外観すらなくなつた。中国はその政治支配の手先を諸々の軍閥に求めた帝國主義列強の社会の露骨な分割の野望に直面するのだった。封建的関係はほとんど変革されなかつた。

親方一徒弟制度、農村から買いたたける安価原料農作物等々、そして、帝國主義は、中国社会の資本主義的発展・中国産業資本・中国市民階級の発展を望みさせ、奇型化した。

ようやく、産業資本家としても登場しつゝあつた中国の財産ある市民たちも、農民を解放することはできなかつた。彼等は、新しい経済的利害関係をもつたはつきりした都市の階級としてではなく、古い支配階級から勃興し、無数の糸によつて農民の封建的収奪と結びついていたのだ。彼等はただ、かれら自身の利益のために外国資本・外国商品の特権とそれに結びついた若干の封建的関係とだけ対立しており、外国勢力の侵入を制約できる強力な統一国家を求めてはいたが、外国勢力の完全な放逐を求めるところには外国の競争者から独立してはなかつた。彼らの主要な部分は帝國主義の圧力の下に、一転・二転・三転して外国資本または帝國主義者に管理される資本の操作のためのブローカーをかねる買弁資本家になつてしまつた。

しかし、このことは、中国における革命・土地革命・民族国家という世界史的にはブルジョワ的・民主主義課題の実現にはじまる永続革命の見とおしの限界を意味するものではない。

貧困の失業からの解放を求める人民のエネルギーは、農村における貧農・雇農を中心とし、手工業者・流民をまきこんだ暴動・打ちこわしの連続的爆発として、軍閥・地主の封建的支配に対決し、都市においては、都市貧民を中心に中小ブルジョワジーインテリをまきこんで帝國主義の侵略・強盜政策と買弁資本・軍閥の支配に対決していった。直ちに暴力的形態をとり、幾百万の血を流しながら、中国被抑圧人民の決起・中国革命の源流は、中国革命の永続的貫徹力と指導力を自らものとしつゝあつた。プロレタリアートの一国における政治権力をにぎるまでの成熟とそれに依拠した共産主義的政治

0・ヨーロッパ資本主義の侵入以降、ますます激しく解体していく農村を中心とするプロのたむろする都市においても中国の被抑圧人民の要求は土地の分配に終局的にはいきつたのであつた。しかし、農民は経済的・心理的に地方化され制約されており（これはとくに、文盲と迷信と貧窮の數億の人民をもつ巨大な「國」、地方地方が分離し、習慣・言語が省ごとにちがひ、町と町、村と村のあいだですらちがひ中国についていえることがあつた——）もつともこの条件は、帝國主義・軍閥間のたえまない戦争とともに中国の中で小さな赤色政權の地域が周囲を白色政權にとりかこまれながら長期にわたつて存在する可能性と必要性的基礎的な条件を形成する。土地に対する当面の要求が異なる多くの層の中から下層中農・貧農・雇農・流民を政治的に組織する（全国性をもつて）試みが存在しなかつたので、農民は政治の舞台で指導性をもつて行動することはできなかつた。さらに、単純な土地の再分割と再分配は、それで放置されると再度の土地の集中がもたらされる程、中国の農村は疲弊していった（このことは革命中国で実際に進行した）つまり中国の被抑圧人民は土地革命にはじまる首尾一貫した永続的な革命を求めており、それを担ひうる勢力もしくは指導を求めていたのだ。

ヨーロッパのブルジョワ達は、中途半端ではあつたが自國で行なつた歴史的役割を、この國ではなそうとは決つてしなかつた。彼らは自國においても腐朽性を増しつゝあつたが、ここでは寄生性と腐朽性を露骨に認められた。帝國主義は、商人・地主・官吏・軍閥をかれら自身の使役に適応させ、工場・鉄道・鉱山の運営が巨大な超過利潤を確実に手にいれるように、この「國」の社会組織全体にはびこつていく封建的性質を利用し、恒久化した。

封建的土地所有関係から生み出される無限の低賃金労働力・苦力治播導用コミンテルンの中国への介入として、中国プロレタリアートの登場！成熟とそれに依拠した「共産主義的」インテリゲンチヤの登場として。

第二節 新しい革命闘争の始まり — 一九一九年「五・四運動」

a. 一九一四年、帝國主義諸列強は、世界を再分割し勢力範囲を争奪する強盜戦争に突入した。第二インターナショナルの敗北、ヨーロッパ各国の社会民主主義政党的合法主義・日和見主義の敗北、その下でのヨーロッパ各国プロレタリアートの敗北は「革命が戦争をおしとどめる」ことを不可能にした。その結果としてのこの「戦争は、資本家階級に、膨大な利潤とあらたな略奪（トルコ・中国・その他）、幾十億のあらたな注文、ひきあげられた利率の新公債というすばらしい見せしめをたらした。戦争はプロレタリアートを分裂させ墮落させることによつて、資本家階級に、これよりもつと大きな政治的利益をもたらしたのである。」（レーニン「第二インターの崩壊」）第二インターナショナルの崩壊、合法主義・日和見主義の社会排外主義への転化は、「戦争が革命をひきおこす」ことを非常に困難にした。このような世界的なプロレタリアートの敗北の中で、しかし、レーニン・ボルシエビキに指導されたロシアのプロレタリアート・人民は、帝國主義戦争を國內戦に転化した、勝利を勝ちとつた。そして、中国への「あらたな略奪というすばらしい見とおし」の下に戦われたこの戦争は、当然、中国に対する帝國主義的地位を弱めはしなかつたが、しかし、経済的な側面においては、侵略の手を一時的に弱め、中国の民族産業によりいつそ発展する機会を与えた。

この二つの事態は、中国人民の決起・中国革命の源流に、中国プロレタリアートの登場・成熟と共産主義的政治指導をもたらす基礎をきずいたのだ。

大戦中、中国市場にはヨーロッパの商品が非常に減少し、とくにドイツの商品はほとんど姿を消すような状態になった。大戦のさなか、外国商品の重任が相当に軽減されたことは、この時期の中国各港にたいする出入商船のトン数にも示されている。それは大戦前の一九一三年を一〇〇とすると、十四年は一〇五であったが、十五年には九七に減り、十六年には九四、十七年には九三、十八年には八六に減っている。他方、日米両帝国主義の中国に対する侵略の強化は、相互に対立を含みつつ、より露骨になった。一九一二年から十八年にいたる、アメリカの対中貿易指数は二倍近くに上昇し、日本のそれは二倍半以上になった。とりわけ日帝は、十四年九月十一月、山東省でドイツ軍と戦火を交え、十五年一月十八日に、辛亥革命の未熟性を利用し、権力をにぎり、反動的支配を行っていた北洋軍閥袁世凱に対し、二ヶ条の要求をつきつけるほどであった。対華二ヶ条といわれるこの要求は「滿州」における支配的地位の確立と山東省におけるドイツの権益の継承、さらに袁世凱中央政府に対する監督権の獲得を王を内容とする懇らつなものであった。

要するに、この時期には、日米両帝国主義がこの時ばかりと拡大した侵略に圧迫され、また軍閥間の戦争の被害をうけたものの、結局はヨーロッパの帝国主義諸国の圧力が減少したため、紡績・製粉電力・マッチなどの部門で民族産業が発展したのであった。大戦中におけるこの中国民族産業の発展が、一時的なものであり、また、軽工業にかぎられたものであったとしても、この発展が中国の社会構造にあたらえた影響は大きい。なぜならば、大戦前の中国では、財産

同じく、胡華が「中国革命史講義」の中に提出している推計によると、「十九年には工場労働者約七〇万、香港や上海租界内の外国資本の工場の労働者約三二万、鉱山労働者約五九万、鉄道労働者約一四万、海員約一五万、通信労働者約三万、総計約二〇〇万」とみつもられている。中国のプロレタリアートは、人口全体（当時約五億）から見れば少数ではあった。しかし、その大部分が少数の産業の中心地に集中していたことや、一つの工場における労働者の数は比較的多かった事実から判断すると、この二〇〇万、三〇〇万のプロレタリアートはきわめてよく集中され、プロレタリアートにとって唯一の闘争武器である組織性の社会的基礎を有していたし、動揺する民族ブルジョワジーに比しても貫徹力、影響力、統率力をもてる階級であったらう。

「帝国主義・ブルジョワジー・封建勢力の三重の圧迫」の現実とは次のようなものであったらう。かれらは決して近代の様式を採用しはしなかった。五ノ三〇事件（一九二五年）のきつかけとなった日本資本の内外綿紡織工場でおこったストライキは、日本人の監督が十二才の少女工が十二時間労働のつかれで「こっくり」をしたのを見てなくった事に対する抗議からはじまった。このストライキの第一の要求には「労働者を殴打しないこと」が出されており、つづいて「賃金の支払を延期しないこと」「理由なくして労働者を解雇しないこと」などが要求されている。これを見ても、労働者がどんな状態におかれていたかがわかる。もちろん、外国人労働者と中国人労働者は極端な差別をうけていた。同じ技術程度でも、イギリス人労働者は中国人労働者の七倍の賃金をとっていたし、一九二二年に瀋州における日本の領事が報告している数字では、同じ産業の一般の労働者で中国人は日本人の三分の一の賃金であった。外

ある市民たちの主力は買弁資本と官僚資本であったが、大戦後には、産業資本がその中心の力にむかって成長してきたからだ。そして、民族産業のこのような成長は、戦後ふたたびおしよせてきた外国資本の攻撃に対する抵抗の力を育てていた。こうして、階級としての民族ブルジョワジーとプロレタリアートが、第一次大戦を経て成長をとげた。

この民族産業の発展、資本主義国民経済の形成過程の一定の進展の結果生じた「新しい階級関係と新しい階級要求」については、中国の歴史研究者胡華は述べている。

「中国の民族資本主義のよりいっそうの発展とともに、中国では、新しい階級関係と新しい階級要求がよりいちだんと明確になり、またつよまつてきた。第一は、中国プロレタリアートの陣営が強大にできたことである。十分に正確な統計はないが、当時の産業労働者はおおよそ二五〇万ないし三〇〇万にのぼっていたと、一般的に推計されている。上海、天津、青海、武漢等の産業の中心地にあつた労働者は、それぞれ一〇万ないし数十万に達し、プロレタリアートの根拠地になった。中国の産業労働者は、新しい生産力の代表者であり、帝国主義、ブルジョワジー、封建勢力の三重の圧迫をうけ、民族解放民主革命をもっとも徹底的に要求するものである。同時に、民族ブルジョワジーの力もある程度発展した。彼等は、自己の企業の利益のためにも、統一的な国内市場のためにも、外国資本による支配を排除し、軍閥による混乱をなくすことをぞんだ。したがって、彼らも、ある程度までは、民族の独立と民主的改革を要求したが、確固たる立場をもたず、労働者階級とのあいだの矛盾と力の弱さのために、革命と反動のあいだを動揺したのである。」

（「中国新民王主義革命史」）

国資本がこのような低賃金と苛酷な労働条件で労働者をこきつつかつていながら、中国の資本家がどんなことをしていたかは想像にかたくない。なぜなら、帝国主義の政治的支配の圧力により、税金その他の面で特権をもっており、機械設備、規模の点でも有利な外国資本に対して競争をいどんだのだから。「こうして、外国資本の産業であろうと中国資本の産業であろうと、労働者の賃金は自分一人がたべるのがやっとならうという状態であった。労働時間は普通が十二時間で短いところで一〇時間、長いものは一五時間から一七時間という状況であった。資本家たちは、こうした奴隷的な賃金と労働条件を維持していくために、いつでも、中国の封建勢力と握手することを忘れなかった。労働者がストライキをすると、すぐにおしよせてくるのが軍閥の軍隊である。かれらの前には、民主主義とか人権というものは一切通用しない、袁世凱の時代にだされた『治安警察条令』では、ストライキは安寧秩序を乱す犯罪とされていた。もちろん、労働者を保護するどんな社会保障制度もなかった。そのうえ、工場でも鉱山でも親方制度が広くゆきわたつていて、親方のもとで雇われた労働者は、その期間（一般には三年ぐらゐ）には、家族と会うこともできないし、死んでも家族に通知されなかった。江西省の安源の炭坑では、事故によつてつきつきに労働者が死んだが、その見舞金は馬一匹の値段の四分の一であつたから、事故がおきたときは、親方は馬をいそいでつれだしても、労働者を救い出すことは急がなかった。」（「中国現代史」）

又、典型的な中国のプロレタリアートは、当時、農村から出たばかりであり、その家族がまだどこかの農村で生活に追われて死にもぐるいになつているといふ者も少なくはなかつた。かれらは、肉体的には土地からきりはなされているが、心理的にはまだある程度

土地にしばりつけられていた。かれらのもつとも気になつた理想には自分の土地にかえることも含まれてはたさる。かれの家族の土地を所有する地主が都会における彼の工場主の父・伯父または従兄弟だつた、ということはないことではない。ともあれ、このようにして、中国人民の歴史の舞台にプロレタリアートは登場した。b・ロシア革命の風が中国におよぼせるまえ、中国では、都市において民族ブルジョワの要求を背景に新しい思想・文化運動がブルジョワ・小ブルジョワインテリ・学生によつて、プロレタリアートへの同情と初步的な「共産主義」思想を含みつつはなばなく展開されていた。

その旗手の役割を果たしたのは、一九一五年九月に上海で発刊された雑誌「新青年」であつた。「新青年」は、啓蒙思想家として知られていた陳独秀編集の雑誌として発足したが、翌年かれが北京大学教授になつてからは、同大学の図書館主任であつた李大釗や、翌々年アメリカから帰国して北京大学教授となつた胡適らと共同して編集し、そのほか文字者魯迅などの応援をえて、全国の青年知識層に大きな影響を与えた。「新青年」の立場は、陳独秀が創刊号の「青年に敬告する」で主張した「奴隸的、保守的、退嬰的、鎖國的、虚文的、空想的」であることを排して「自主的、進歩的、進取的、世界的、実利的、科学的」であれという標語によく表現されている。この立場から、「新青年」は備教思想を鋭く批判し、デモクラシーと科学主義を高唱した。また胡適らによつて文部革命や白話運動、「(国語で文章を書くこと)が提唱され、魯迅は「狂人日記」「孔乙己」「薬」などの作品をつうじて、権力に盲従する旧思想にたいする批判をおこなつた。当然これは単なる思想運動ではなく社会変革と国家建設の指針と呼びかけであつた。「青年に敬告する」は呼び

稿もしたようだ。この影響のもとに、十八年ごろから、各地に青年の自主的な思想団体がめばえてきた。なかでものちに多くの革命指導者を生んだものに、十七年から十八年に毛沢東等が中心になつて湖南省で組織した新民学会や、天津で周恩来らがつくつた觉悟社などがある。また刊行物としては「新青年」のほか北京、上海、湖南、成都などでなれ、文字団体もつきつきと創設された。又、教育家の努力で、多くの(数万名といわれる)青年・学生がアルバイトをしながら学校へ通う半労半学の留學生が、フランスを中心にヨーロッパ・アメリカ・日本へと渡つていった。この中からも、ヨーロッパの労働運動・革命運動・革命理論の影響を受けた多くの革命指導者が生み出された。

この新しい思想・文化運動の担い手達は中国で、ヨーロッパ各国で、十七年ロシア革命の偉大な砲声を聞くことになるのである。そして、ベルサイユ会議の悲報を。

c.このように、青年・知識層の思想的高揚と民族ブルジョワ・プロレタリアートの成長を背景に歴史的な「五／四運動」は斗われた。中国革命は、そして、この新しい革命闘争の始りをつける斗は、中国の社会状態と歴史的環境の土壌からたちあがり、その凝縮としての階級利害の摩擦・対立と相互作用によつてかたちづけられた。しかし、中国内の出来事がその内容において純粹に「中国的」でありえた時代はすでにかなり以前に過ぎ去つていた。中国社会の危機と崩壊は、資本主義がその世界性を表現する過程、ブルジョワが自らに似せて世界を改造せんとする過程からめとられており、中国革命の原動力は、その中から、それとの対抗を通じて形成されてきた。十四／十八年の世界戦争の戦後処理をめぐるベルサイユ会議が「五／四運動」の契機であつた。そして、資本主義の腐朽

かける。「われわれは新しい時代の精神を新しい環境と新しい社会に適応させるように建設しなければならぬ。われわれの理想社会は、正直・進歩・積極・自由・平等・創造・美・善・平和・協調・勤勞の社会であり、多数のものにとつて幸福なものでなければならぬ。われわれは、虚偽・保守・消極・制任・不平等・頭迷・醜惡・害惡・戦禍・残忍・怠惰・悲惨にみちみちたこの世界が粉碎され、姿を消すことをぞんじてゐる。」

「社会における青年の役目は、人体での新鮮活発な細胞に等しい。新陳代謝は、陳腐朽敗の細胞を……絶えず新鮮活発な細胞に代える。……社会で新陳代謝の道がうまく働けば、その社会は隆盛し、陳腐朽敗の分子がその社会を充たせば、社会は滅亡する。では、この基準によれば、わが国の社会は隆盛しているのか？それとも滅亡せんとしているのか？私は思うだに忍びない……。」

「このような病氣はただ嘆きの言葉だけでなおすことはできない。それはただ若く、そして若い故に勇氣あるものによつてのみ療治することができるとだ。……われわれが生きのこるために若さをもたなければならぬ。ここにわれわれの社会の唯一の希望があるのだ。」「ただ私が、感涙をもつて望むのは、新鮮活発な青年諸君が自覚をもち、そして、奮闘を開始されんことのみ……。」

その影響は驚くべきものであつた。創刊号はまたたくまに売り切れ、何回か増刷しなければならなかつた。筆写されたり、壁に貼り出されたり、写しが郵送されたりし、どの号もちぎれるほどに読破された。読者の一人はのちに、「それはまるで一陣の雷撃のような衝撃をもつて、寝苦しい夜の夢の中にあつたわれわれを自覚めさせたと回想している。毛沢東もこの雑誌の熱心な読者であり、又投

性と寄生性の結果としての世界戦争がその背景をかたちづくつたと同様に、資本主義の世界史的な没落と死滅への第一歩であるロシア革命は決定的な影響を中国革命に及ぼした。その第一歩が「五／四運動」である。

一九一七年一〇月、ロシアにおいて隠いとられたプロレタリアートによる国家権力の獲得は、腐朽し、寄生せる資本主義・死滅しつつある資本主義の帝國主義の世界支配の一角を切り崩し、現代が、資本主義から社会主義への、階級社会から無階級社会への、人類の「前史」から「正史」への世界史的な過渡期であることを実践的に宣言した。一国におけるプロレタリアート独への過渡、「労働者国家」といまだ世界的な権力である帝國主義の併存が資本主義政治権力の運動の特殊性と世界労働者、人民の革命闘争の新しい「陣型」を総体として規定しはじめるのは、二〇年代末から三〇年代にかけてであるが、十七年ロシア革命は、帝國主義列強の干渉戦争と世界的な革命闘争の高揚を、直接的にもたらした。

ロシアにおいて、労働者、農民がツァーリの支配を打倒し、自ら国家権力をにぎり、帝國主義列強の干渉戦争に革命戦争で対抗し、勝利した事実は、全世界の労働者、人民を大きく勇氣づけた。一九一八年、一九九年のあいだに、ドイツ・オーストリア・ハンガリー・フィンランドで革命闘争が国家権力をめぐつて激しく闘われた。強盗戦争で肥えふとつた日本帝國主義の心臓部においても「米騒動」として人民は決起し、朝鮮における反日独立蜂起(「三／一」万才事件)そして、トルコ・インド・エジプトの民族独立運動が激列に闘われた。ヨーロッパ、特にドイツ・ハンガリーにおける革命の敗北は、連続的な世界革命への道からの後退をよぎなくしたが、ロシアを先頭とした全世界人民の革命闘争の高揚は、中国人民、とりわけ新文

化運動を展開していた都市青年知識層を大きく勇気づけた。

ツアアの専制支配と広大な農業地域をかかえる国、ロシアの革命は、中国人民を勇気づけ、「世直し」—現状にかわる新しい社会・国家の建設への展望をより現実的にした。それは「庶民の勝利」として受けとられた。

又、ウイロンソンによって、ロシア革命からのショックと恐怖を含みつつ高唱されていた「諸国民の平和的協力」「弱小民族の援助」「民族自決」の理念の帝国主義的野望の本質がベルサイユで、世界各地で、そして中国で現実の諸事件によって、中国人民にあらわになってきた時、革命ロシアは、帝制ロシアが中国におしつけていた一切の不平等条約を取り消し、完全な政治的平等の上に九つ友好関係を結ぶことを宣言し、申し出た。中国、とりわけ都市では、再び増大しつつあった帝国主義の圧力を感じていた民族ブルジョワ小ブルの計算高い眼も、転滅されるどころかますます苛酷になる「三重の圧迫」としかり増大しつつある自らの力を感じていたプロレタリアートの眼も、そして、新しい文化・思想運動の中で輝いていた青年知識層の眼も、革命ロシアに引きつけられることが多くなつた。デモクラシーの理念とそれをもたらしてくれたヨーロッパの現実の行動の間で決つて越えられない溝、民族ブルジョワの弱さと動揺の中で混乱し、辛亥革命の権力を軍閥に奪れて苦悩していた中国「国民革命」の精神が、新しい文化、思想運動の担手たちが、デモクラシーの現実態を中国の社会変革と国家建設の未来像をツアアを打倒し、干渉戦争を粉砕し、政権を維持し「カラハン宣言」を発した革命ロシアに求めたとしても決つて不思議ではない。中国の革命的青年知識層に対する初步的な「共産主義」思想の影響は飛躍的に強まり、それは文献的には非常に困難な状況の下で、マ

させるのである。

d. 第一次帝国主義世界戦争の戦後処理をめぐるベルサイユの強盗会議において、戦勝国となった勢力をもつて中国の代表(孫文の指導する広東軍政府の代表も含まれていたといわれる)が要望していた「対策二ヶ条」のとりにけし、全般的な主権の回復は問題にもされず、山東省の利権は、帝国主義的とりひきの道具にされたあげく日本への移譲が決定され、帝国主義的戦後体制—ベルサイユ体制の確立へと進んだ。「対華二ヶ条」の押しつけ以来、シベリア出兵時における(十八年五月)日華共同防敵軍事協定—「内モンゴル」から「外モンゴル」にかけての日本軍の自由行動、中国地方当局の協力・情報提供—の締結等強化される日帝の中国侵略、ベルサイユにおいて暴露された段祺瑞政府の「売国」外交と日・米・英・仏伊帝国主義の戦後処理における強奪を結託をまのあたりにして、中国人民は、辛亥革命の敗北をのりこえ歴史的な反帝国主義闘争を爆発させた。

最初にベルサイユ条約の調印に反対して起ちあがったのは、フランスにいた留学生たちであった。ついで、五月四日、北京の学生五〇〇〇余人が、天安門に結集し、示威行進をおこなない、「外は国権を奪還し、内は国賊をこらしめよ」「平和条約の調印を拒否せよ」「二ヶ条を廃止せよ」「山東の利権を奪回せよ」「日本商品を買わない」「イコトせよ」等のスローガンを高唱した。デモ隊は親日派の売国官吏の処罰を要求し、その邸宅をとりまき、引きずり出して詰問し、なぐり倒した。激昂した学生達は邸宅に火をかけて退去しようとしたが、北洋軍閥政府が派遣した武装警官隊によって多数が逮捕された。この弾圧に抗して、更に闘争の輪はひろがり、五日以降、北京の学園はゼネスト状態にはなり、「中学校以上の学生連合会」も成

ルクス・レーニン主義に近づきはじめる部分を提示した。ロシア革命は「ボルシェビズムの勝利」としても受けとられた。

李大釗は、十八年十一月号の「新青年」に「庶民の勝利」と「ボルシェビズムの勝利」という二論文を発表したが、そこで連合国の勝利とロシア革命の勝利を結びつけてつぎのように書いている。

「ドイツ軍国主義に対する勝利は……人道主義の勝利であり、平和思想の勝利であり、自由の勝利であり、民主主義の勝利であり、社会主義の勝利であり、ボルシェビズムの勝利であり、赤旗の勝利であり、世界労働者階級の勝利であり、二〇世紀の新しい潮流の勝利である。」

「ボルシェビズム——この言葉はロシア人が創造したものではあるが、しかし、その精神は、二〇世紀全世界人類の人々の共同の自覚した精神である。」

これは、明らかにこの戦争と革命の性格に対する認識の混乱を伴っており、ヨーロッパの指導者が書けば明確な裏切りなのだが、この文章はロシア革命とボルシェビキの紹介と宣伝として大きな役割をはたした。

このようにして、ロシア革命は、中国の革命闘争が、民主主義(民族解放)—社会主義の永続革命として、帝国主義の世界支配を打ち砕き、世界プロレタリアートを打ち立てるプロレタリア世界革命の有機的一環として、それへの意識性をもつものとして成長する客観的基礎を与え、主体的基礎—プロレタリアートのヘゲモニーを実現する実践的環、共産主義的政治指導の萌芽を形成した。これは、より主体的には、コミンテルンの中国革命への介入、コミンテルン中国支部としての中国共産党の建党へと結実されるのだった。このロシア革命の砲声が轟いていた時、ベルサイユ会議の悲報が中国人民を憤激

立し、全国への打電と街頭宣伝にのりだした。全国各地の学生がこれに呼応した。六月にはいと、学生の圧倒的な決起宣伝と大弾圧を前に、上海をはじめその他の都市で商人・労働者がぞくぞくとストライキに決起しはじめた。この「五・四運動」の全国的規模の、全人民的反帝闘争への発展は、反動政府の譲歩をからとった。七日には拘留中の学生が釈放され、一〇日には三人の親日要人の免職が発令され、二八日にはバリの中国代表が講和条約の調印を拒否するにいたった。このニュースは全世界にわたって、各国政府と人民に大きな衝激を与えた。

この闘いは、そのスローガンにも明らかのように、明確に反帝闘争として闘われ、中国人民に大きな政治的教育をおこなない、民主主義(民族解放)—社会主義の永続革命の初期における主要な任務—反帝・反封建に対する自覚を発展させた。中国プロレタリアートの、人民の闘いの舞台への登場、また自己の組織はもたなかったが、政治ストライキとデモンストレーションという形態での登場は、この階級の政治的成熟を飛躍的に前進させた。この全人民的な(この運動は都市を中心にしており、農民の圧倒的な決起はみられなかった)政治闘争の中で、共同の大衆行動を通じて、「共産主義」思想の影響を受けた青年知識層・学生とプロレタリアート都市貧民の合流がからとられ、中国革命に対するプロレタリアートのヘゲモニーを形成する芽えを示したのだ。この闘いの成果を踏まえ、それはコミンテルン中国支部—中国共産党の形成へと前進していく。

第三節 コミンテルン中国支部—中国共産党の建党

a. 反封建的、半植民地的大中国において、人民の闘いと結合し、

そこにプロレタリアートのヘゲモニーを打ちたて、これを指導できたのは、「マルクス主義」のいかなる潮流であったのか。この問題は、表面的に考えられるほど単純ではない。当時、中国の知的世界では「ボルシェビズムの勝利」は、レーニン主義の勝利を意味しなかつた。中国の「共産主義者」達が、とりわけ中国共産主義運動の指導的位置に立つ世代が、その思想形成の時期に吸収したマルクス主義の文献は中国においてきわめて少なく、不備であつたし、ヨーロッパ留學生は、さまざまな色あいの修正主義とマルクス主義を区別しえなかつただろう。毛沢東を例にとると、彼の自伝的な陳述によると(エドガー・スノー「中国の赤い星」)彼のマルクス主義への信念を確立させるのに決定的であつた三冊の書物は、「共産党宣言」とカウツキーの「階級闘争」およびカーカップの「社会主義史」であつたという。組織的に中国共産主義運動に介入したコミンテルンも初期においては、マルクス・レーニン主義の基本的文献の紹介中国語訳を制限したといわれている。そして、コミンテルンの指導の実践から学んだものは……中国の共産主義者達が、コミンテルンの指導のシグザグと中国革命闘争の具体的実践の中で、マルクス主義をいかに豊富化し、創造的に発展させ「修正」したかは、後に検討することにして、最初の問題にもどらう。

植民地政策を大國主義的に弁護したベルンシュタインを中心とする修正主義や、「われわれは、エジプトを軍事的に占領しなければ、たんなる経済的要因だけの力では、エジプトとの貿易はあまり増大しないだろうと考える、なんらの根拠もたない。」「資本の膨脹は」「帝國主義の暴力的手段によつてではなく、平和な民主主義によつて、もつともよく達成されるであろう」と説教し、帝國主義國プロレタリアートと植民地人民を「なくさめ」、更に、「今日の戦

命の現実性にもとづく民族、植民地問題における革命的現実主義の原形をみることが出来る。

「アジアの解放をもたらしヨーロッパ、ブルジョワジーの支配をほりくずしつある中国人民の革命的闘争の世界的意義を確認し、中国の革命家共共和主義者を歓迎し、ロシアのプロレタリアートが中国の革命的人民の成功を深い感動と完全な共感をもつて注視していることを証明し、ツァーリズムの侵略政策を支持するロシア自由主義の行為を非難するものである。」

「孫逸山(孫文)の代表する革命的ブルジョワ民主主義は、中国『革新』の道を、ただしくも、政治改革と土地改革における農民大衆の最大の自発性・決断・勇氣にもとめている。中国に上海の(よ)うな大都市の)数がふえるかぎり、中国のプロレタリアートもまたふえるであろう。彼らはおそらくなんらかの中国社会民主労働党を組織するであろう。そして、この党は、孫逸山の小ブルジョア的コーストピアと反動的見解を批判しながら、かならず彼の政治綱領と土地綱領の革命的民主主義的核心を注意ぶかくとりだし、まもり、発展させるであろう。」

「アジアのめざめとヨーロッパの先進的プロレタリアートによる権力獲得闘争の開始とは、世界史の新しい時代をあらわしている。」「全ヨーロッパの支配勢力、全ヨーロッパのブルジョワジーは、中国における反動と中世とのいっさいの勢力と同盟をむすんでいる。そのかわり、若いアジア、すなわちアジア幾億の勤労者は、すべての文明諸國のプロレタリアートという信頼できる同盟者をもつてゐる。ヨーロッパの諸民族とアジアの諸民族とをともに解放するプロレタリアートの勝利は、世界中のどんな刀もこれをばはむことにはできないであろう。」等々。

争は、帝國主義の生みの子であるばかりでなく、ロシア革命の生みの子でもある」(「ロシア革命(一九〇五年革命のこと——筆者)は、東洋諸民族の民族的渴望に、新しい強力な刺激をあたえ、ヨーロッパの諸問題にアジアの諸問題をつけくわえた。これらすべての問題は、この戦争中に、はげしく名のりを上げ、人民大衆とプロレタリア大衆の気分にとつて、とくに決定的な重要性をおびている。ところが、他方、支配階級のあいだでは、帝國主義の傾向が優勢である」などとただ第一次大戦が「純粋な」帝國主義戦争ではなく、「祖国擁護」のスローガンでこれを支持することができるといふ結論をデッチ上げるためにのみ民族解放戦争をもちだすカウツキーはもろろんのこと、「この野ばなしの帝國主義の時代には、もはや、どんな民族戦争もありえない。民族的利益は、勤労人民大衆を、その不倶戴天の敵である帝國主義に奉仕させるための、欺瞞の手だてに役だつてすぎない」として一切の民族解放戦争を否定したローザの思想も植民地人民、中国人民の闘いと結合することはできなかった。

レーニンは、早くも一九〇〇年に「イスクラ」に「中国戦争」と題する小文を発表し、ヨーロッパ特にロシアの資本家の中国政策(義和團議定書)批判している。彼は「中国革命についで」(十二年一月)、「中国の民主主義とナロードニキ主義」(七月)、「革新された中国」(十一月)、「中華民國の大成功」(十三年三月)「アジアのめざめ」(五月)、「おくれたヨーロッパとすんだアジア」(五月)等の小文において、中国を中心に具体的「アジアのめざめ」に注目しながら、民族、植民地問題の重要性を説いている。我々はこの、後にコミンテルン第二回大会「民族および植民地問題委員会の報告」に結実するレーニン主義の一つの柱、世界革

中国人民の闘いと成熟しつつあつた中国のプロレタリアートは、帝國主義の植民地をめぐる強盗戦争に対して内戦で反対し、民族解放闘争をプロレタリア世界革命の同盟者として位置づけ、民主主義(民族解放)を農民とともに徹底して追求することが社会主義革命への転化の準備だととらえたレーニン主義と結合したのである。コミンテルン中国支部は中国共産党の建党がその現実化の第一歩であつた。

b. 中国におけるこの結合の試みと苦闘を観る前に、少し長くなるがコミンテルン第二回大会の「報告」「テーゼ」にいたるレーニン主義・コミンテルンの政治的・組織的内容に触れおく必要があるだろう。

第二インターの崩壊に直面したレーニンは十四年十一月早くも第三インターナショナルについて述べている。

「日和見主義に征服された第二インターナショナルは、死滅した。日和見主義をたおせ。『投降者』を一掃しているだけでなく、日和見主義も一掃した第三インターナショナル万才。」

「第三インターナショナルは、資本家政府を革命的に襲撃するため、政治権力の獲得と社会主義の勝利をめざして、あらゆる國々のブルジョワジーにたいして国内戦をおこなうために、プロレタリアートの勢力を組織するという任務に当面している!」

しかし、このように第二インターからの分裂と新インターナショナルの早期創設の呼びかけは、ヨーロッパ各黨の國際主義派、反日和見主義派の多数派を獲得することができなままに、十七年一月のロシア革命を迎えることになるのである。革命後の激しい国内戦、干渉戦争に対する革命戦争の時期に、西ヨーロッパの革命とロ

シア革命の結合の緊急性を前に、第三インターナショナルコミンテルンは創設された。戦争状態という困難な条件下で、ヨーロッパの革命的潮流の党的未成熟を確認しつつ強行されたこの組織建設は、あるべき状態からみれば、あらゆる面で不十分性を持たざるをえなかった。コミンテルン創設の時期についての戦術上の意見の相異がローザとレーニン、スバルタス・ブントとロシア共産党の間にはあつたわけだが、結果論からいえば、後のコミンテルンのありかたに變化を与えるような相異ではなかつたと判断できるだろう。又、レーニンは、コミンテルンの政治的・組織的確立のために、精力的な、最大限の活動をしてきているし、第二回大会にむけその活動をさらに強化している。

コミンテルンは、十九年三月の第一回大会で採択されたその「政綱」において、自らの創設の理念を明らかにしている。

「新しい時代が生まれた！資本主義の分解、その内部崩壊の時代が。プロレタリアートの共産主義革命の時代が。」

「あらゆる国における革命運動の増大、資本主義国家の連合がこの運動を絞殺しようとする危険、ウイルソンの国際連盟に忠誠をつくすために結束しようとする社会裏切り主義者諸党の企て（ペルヌの「黄色」インターナショナル）、最後に、プロレタリアの行動を調整すべき絶対的必要——これはみな、真に革命的な、真にプロレタリア的な、共産主義インターナショナルの建設に導かねばならぬ。いわゆる国民的利害を国際的革命的利害に従属させるこのインターナショナルは、諸国のプロレタリアートの相互扶助を具体化するであろう。」

「資本の帝国主義的陰謀を打倒せよ！

国際的プロレタリア・ソヴェト共和国万才！」

れているとするトロツキーの発想のリフレインがみられる。これは、ヨーロッパ革命の現実性と緊急性（実は指導の危機）、後進国・植民地における共産主義運動のほぼ完全な空白状態、そしてコミンテルンの組織的現実から判断すれば不可避なものであつたであろうが、今から考えれば明らかに先進国革命主義の偏向をはらんでいていえるだろう。しかし、ここには、「現在ですら、もっとも発展した植民地の闘争は、民族解放の闘争以上のものであり、明らかに社会的性質をおびつつある」という表現にみられるように植民地における民主主義（民族解放）社会主義の永続革命の潜在力の存在が確認されているし、白人だけの組織であり、かつて一度も植民地問題をとりあげたこともなく、先進ヨーロッパの白人プロレタリアートの解放だけを最終目標においていた第二インターの水準（綱領）組織（戦術のあらゆる面での）からの決定的飛躍がある。コミンテルンは、いまや帝国主義に寄生され、帝国主義を支えている植民地の問題をその第一回大会でとりあげ、プロレタリア革命・プロレタリア永続革命の中で決定的な環となる先進国プロレタリアートの闘いと植民地解放闘争の結合の問題、その関係をあきらかにし、全世界の労働者、人民に提示しえた。たとえそれが、ヨーロッパのプロレタリア革命だけにイニシアティブをもたせたとしても、このことはインターナショナル史上、画期的なことであつた。大会には、トルコ、トウルクスタン・シヨルシア・アゼルバイジャン・ペルシアの他に、中国・朝鮮からも代表がオブザーバーとして参加していた。（もっとも彼らの大部分はロシアに亡命中の革命家であつたが）彼等は議決権を与えられていなかったとはいえ、この「宣言」にこめられたプロレタリア国際主義の精神を感じた。植民地問題は、第二回大会で正式にテーゼとして打ちだされ、一九二〇（二二年）に、後進国、

そして、そこで第二インターではついにふられなかつた植民地民族の反帝闘争について述べている。

「一方、黄色社会—愛国主義インターナショナルに対抗して、国際的プロレタリア共産主義は帝国主義世界体系の究極的崩壊を促進するために、搾取された植民地民族の反帝国主義闘争を支援するであろう。」

ロシア共産党・ヨーロッパ・アメリカからの代表は、当然にも、ハンガリー・バイエルン・ドイツにおける革命の勝利にその関心・期待と活動の中心点をおいていたので、「支援する」という内容でしか触れられてはいないし、ヨーロッパ・北アメリカでのプロレタリア革命と植民地民族の解放との関係においても、「全世界のプロレタリアートに対するコミンテルンの宣言」（トロツキー起草）の次の文にみられるように、先進国におけるプロレタリア革命がイニシアティブをとつてはじめて植民地の真の解放は可能だと考えられていた。

「植民地の解放は、首都労働者階級の解放と関連して、初めて可能なのである。安南・アルジェリア、およびベングルの労働者と農民だけでなく、じつにまたペルシャおよびアルメニアの労働者と農民も、イギリスやフランスの労働者がロイド・ジョージとクレマンソーを打倒して、国家権力を掌握した時のみ、独立的存在の機会を得るであろう。」

「アフリカおよびアジアの植民地奴隷よ！ヨーロッパのプロレタリア独裁の時期は、また諸君自身の解放の時期であるだろう。」

さらに、解放された植民地が社会主義へ移行するのは、解放されたヨーロッパの援助にかかっているとするのであつた。ここには、後進国ロシアの社会主義化は、先進ヨーロッパの革命のみに賭けら

植民地における共産主義運動の芽ばえ、共産党の結成を急速におしすためなのである。

ヨーロッパ革命の予想以上の「おくれ」に直面したレーニンは、十九年十一月末—十二月の東方諸民族共産主義者組織の第二回全ロシア大会で、「現在もっとも重要な点は、帝国主義に対する東方諸民族の関係と、これら諸民族の間の革命運動とである」とのべ、ヨーロッパを中心とした世界革命の一環として被抑圧民族の反帝闘争をとりあげる必要のあることを示した。「……社会主義革命は、たんにそれぞれの国の革命的プロレタリアが、自国のブルジョワジ—にたいしておこる闘争となるだけでなく、また王としてそりなるものではないであろう。そうではない。この革命は、帝国主義に抑圧されているすべての植民地と国々、すべての従属国が、国際帝国主義にたいしておこる闘争となるであろう」とまで表現する背景には、コミンテルン創設期の彼の考え、すなわち後進国ロシアと結合した先進国での連鎖的な革命の成功という考えに対する大きな転換があるとみなければならぬ。が、彼は、先進国の革命だけが後進国の革命を完成しうるといふ従来の考えを捨ててはいない。彼の結論はこうだつた。

「もちろん、最後にはすべての先進国のプロレタリアートが勝利するほかはなく、われわれロシア人がはじめている仕事を、イギリス・フランス・ドイツのプロレタリアートが打ちかためることである。だが、彼らは、すべての被抑圧植民地民族、まず第一に東方諸民族の勤労大衆の援助がなければ、勝利をおさめることはできないのであろう。」

二〇年七月、バイエルン・レーテ共和国の崩壊、ハンガリー・ソヴェトの危機を前に、ドイツ・イタリアにおける革命運動のゆっく

りとした前進の中で、朝鮮・中国・インドネシア・アルメニア・トルコ・インド等における反帝民族解放闘争の革命的昂揚の報告を受けつつ、コミンテルン二回大会は開催された。明らかにコミンテルンの組織は拡大強化しており、各国における共産党の成立は激しい勢いで進んでいた。

しかし、コミンテルン代議員の九〇%がロシア人とヨーロッパ人でしめられており、ヨーロッパ中心、植民地国、従属国の弱体、そしてロシア共産党の圧倒的優位はこの二回大会でも変化しなかった。メキシコからは三名（議決権は二）が参加した。インド・中国・オランダ領インドからは各二名だったが、共に議決権はなかった。朝鮮からは一名しか参加しておらず、アフリカの代表は皆無だった。この大会が民族・植民地問題のテーゼを採択する大会になったには、植民地、従属国代表の出席はあまりにも少ないと言わざるを得なかった。

困難な状況の中で強行した組織建設の自然発生性を克服する系統的活動が十分に効果を及ぼす前に世界革命はより困難な状況にぶつかるのだった。

この大会で採択された「民族および植民地問題にかんするテーゼ」そしてそれにむけたレーニンによる「報告」は、それ以降のコミンテルンの活動の指針としてきわめて重要なものであった。「報告」の中でレーニンは、しつとも重要な基本思想として抑圧民族と被抑圧民族の区別をあげ、第二の指導的を思想として、「帝国主義戦争後の今日の世界情勢のもとにおいては、諸民族の相互関係、諸国家の世界体系が、ソヴィエト運動とソヴィエト・ロシアを先頭とするソヴィエト諸国家にたいする少数の帝国主義民族の闘争によって規定されている」とし、第三に後進国におけるブルジョワ民主主義運

戦術指導が問われている時に、この「テーゼ」「報告」の解釈をめぐる、形而上学的な、しかし激しい論争がスターリン・トロツキー間を中心としたかわされたという事を踏まえ、より詳しくこの問題を追求してみたい。もちろん、さらに無内容な解釈を提起することによって論争の当否を判断するためにはけっしてなく、当時のコミンテルンの到達点を確認するためである。

レーニンは植民地・被抑圧民族の解放運動にソヴェト組織の形態を与えようとし、「農民ソヴェト、勤労者ソヴェト」という考えを主張する。レーニンは、この結論をほかならぬツァーリズム支配下の植民地、トルクスタンその他のような後進地域のソヴェト建設活動からひきだしていた。

「半封建的隷属状態にある農民でも、ソヴェト組織の理念をりつぱにわがものにして、それを実地に実現しうことは、まったく当然である。商人資本に搾取されるだけでなく、封建領主と封建的を基礎の上に立つ国家からも搾取されている被抑圧大衆が彼らのおかれている条件のもとでもこの武器、この種の組織を適用できることもまた、あきらかである。ソヴェト組織の理念は、簡単である。そして、これは、プロレタリア的諸関係に適用できるだけでなく、封建的ならびに半封建的な農民諸関係にも適用することができる。この領域における我々の経験は、いまのところまだあまりに大きくはないが、しかし、植民地諸国の若干の代表の参加のもとにおこなわれた委員会の討論は、農民ソヴェト、被搾取者のソヴェトが、資本主義国にとって有用なだけでなく、前資本主義的諸関係をもつ諸国にとっても有用な手段であることを共産主義インターナショナルのテーゼ中にぜひ指示しなければならぬ」ということ、農民ソヴェト、勤労者ソヴェトの観念をいたるとこ

るあらゆる場所で、後進国においても、植民地においても、宣伝するところは、共産党およびこれから共産党をつくらうとしている分子の無条件的な義務であるということ、また彼らは条件のゆるすかぎりのところで勤労人民のソヴェトをつくりだす試みを行います。おこなわなければならないということ、まったく反駁の余地のないままでにわれわれに証明してくれた。

残念ながら、我々は、トルクスタン等におけるソヴェト建設活動の具体的な現実についての資料を手にすることができないし、又、レーニンが、「ソヴェト運動は全東洋を通じて、アジア全土にわたる、一切の植民地民族の間にはじまっている」(二回大会開会演説)という時、彼はどのような現実の運動を指しているのか、又、「農民ソヴェト」「勤労者ソヴェト」とは具体的にどのような運動・組織を想定しているのかについては不明である。

地区的に組織された労働者人民が武器をとり、工場・職場のみならず地域を制圧しつつ連合し、市民社会を統合する新たな国家権力としての様相をもちながらも、ブルジョワ国家組織を完全に解体できず、二重権力の状態を一定期間維持すること。この運動・組織に対する革命党の指導と統一戦線、その我々が一般的にもっているソヴェトのイメージは明らか都市のものであるし、この二重権力の状態は、二月蜂起の階級的組織性と貫徹力・統合力の不十分性の結果なのである。さらに、

「すべての植民地および後進諸国において、われわれは、たんに自主的を闘士のカイドルや党組織を結成するばかりであってはならず、またたんに農民ソヴェトを組織するための宣伝をただらにここない、これらのソヴェトを前資本主義的諸条件に順応させることとに努力するばかりであってはならない。共産主義インターナシ

動の問題を強調し、とりあげている。

第一、第二の項にみられるように、レーニン植民地小委は、過渡期世界の端緒におけるプロレタリア世界革命の問題を正しく提起し、

「五、世界の政治情勢は、今やプロレタリア独裁を日程にのぼし、そして世界政治の全事件は必然的に中心点、ロシア・ソヴィエト共和国に反対するブルジョワジーの闘争に集中されている。ロシアソヴィエト共和国は万国の進歩的労働者の間のソヴィエト運動および革命的プロレタリアートと共同するほか、かつ世界帝国主義に対するソヴィエト政権の勝利におけるほか、彼らの救済はないことを苦い経験で確信した植民地、および被抑圧民族の間の民族解放運動。この双方を周囲に糾合している。

六、ゆえに、われわれは現在、たゞ諸国の勤労人民を結束する必要の承認もしくは宣言だけに、とどまるべきではない。われわれの政策は、一切の民族および植民地の解放運動と、ソヴェト・ロシアとの密接な同盟を実現させることでなければならぬ。この同盟がとる形態は、各国プロレタリアートの共産主義運動もしくは未開発国や後進的民族間の革命的解放運動が到達した発展段階によって決定されよう。」(テーゼ)

しかし、この政治理論が、植民地・後進国における革命闘争の具体的な実践に、コミンテルンがほとんどかかわっていない段階で提起されていることから、当然そこには、より実践的な第三項において、あいまいが残り、コミンテルン創設のいらいヨーロッパ先進国の革命のみに全力を集中していた多くの代議員に混乱をもたらしたことは否定できない。後に、中国革命のきわめて実践的・具体的な

るあらゆる場所で、後進国においても、植民地においても、宣伝するところは、共産党およびこれから共産党をつくらうとしている分子の無条件的な義務であるということ、また彼らは条件のゆるすかぎりのところで勤労人民のソヴェトをつくりだす試みを行います。おこなわなければならないということ、まったく反駁の余地のないままでにわれわれに証明してくれた。

残念ながら、我々は、トルクスタン等におけるソヴェト建設活動の具体的な現実についての資料を手にすることができないし、又、レーニンが、「ソヴェト運動は全東洋を通じて、アジア全土にわたる、一切の植民地民族の間にはじまっている」(二回大会開会演説)という時、彼はどのような現実の運動を指しているのか、又、「農民ソヴェト」「勤労者ソヴェト」とは具体的にどのような運動・組織を想定しているのかについては不明である。

地区的に組織された労働者人民が武器をとり、工場・職場のみならず地域を制圧しつつ連合し、市民社会を統合する新たな国家権力としての様相をもちながらも、ブルジョワ国家組織を完全に解体できず、二重権力の状態を一定期間維持すること。この運動・組織に対する革命党の指導と統一戦線、その我々が一般的にもっているソヴェトのイメージは明らか都市のものであるし、この二重権力の状態は、二月蜂起の階級的組織性と貫徹力・統合力の不十分性の結果なのである。さらに、

「すべての植民地および後進諸国において、われわれは、たんに自主的を闘士のカイドルや党組織を結成するばかりであってはならず、またたんに農民ソヴェトを組織するための宣伝をただらにここない、これらのソヴェトを前資本主義的諸条件に順応させることとに努力するばかりであってはならない。共産主義インターナシ

ヨナルは、先進諸國のプロレタリアートの援助によって、後進諸國は資本主義的發展段階をすどおりにソヴェト制度へ移行し、そして一定の發展段階をへて共産主義へ移行することができるという命題を確立し、それを理論的に基礎づけなければならぬ。それにはどんな手段が必要であるか、—— これをもってしめすことは不可能である。それは実践上の経験がわれわれにおしえてくれるであろう。」

第三の、後進國のブルジョワ民主主義運動の問題に関しては、「後進諸國の住民の大部分は、ブルジョワ的資本主義的諸國の代表者である農民からなっているために、いっさいの民族運動はしかありえないことは、すこしのうたがひもいれない。プロレタリア政党内、(およそそういうものが後進國に生じうるものとして)、農民運動に一定の關係をもたらず、それを實際に支配しなくとも、これらの後進諸國において共産主義戦術と共産主義政策を實行することができる、と考えるならば、それはユートピアである。」米印の部分に挿入「ブルジョア民主主義運動で」

として、農民運動を重視し、民族ブルジョワシイに関して、
「非常にしばしば—— 大多数のばあいにそうだといつてもいいが—— 被抑圧諸國のブルジョワシイは、民族運動を支持してはいるが、同時にまた帝國主義ブルジョワシイと協調して、すなわち彼らとあいたずさえて、すべての革命運動と革命的諸階級を相手に闘争してゐる。」

としてその二面性を指摘している、そして、ブルジョワ民主主義運動という表現が現実の植民地における改良主義的運動と革命運動の區別をぬぐいさつてしまふ危険性を考慮して「民族革命的」という

表現を提起し、

「共産主義者としての我々は、植民地諸國のブルジョワ的解放運動が現実的に革命の場合にだけ、またわれわれが農民および広範な被搾取者大衆を革命的精神で教育し、組織しようとするのを妨げない場合にだけ、ブルジョワ的解放を支持しなければならぬし、また支持するであろう。」

とし、
「もしこれらの諸条件がないとすれば、これらの諸國において、共産主義者は、第二インターナショナルの英雄たちの属している改良主義的ブルジョワシイにたいして闘争しなければならぬ。」と規定した。

インド代表のM・N・ロイは、補足テーゼにおいて、レーニンよりもはるかに明確な形で植民地の解放闘争がヨーロッパ帝國主義の打倒のカギであると主張し、近年インドに起こつた急速な産業的發展が、中産階級の民族主義運動とはまったく独立に被抑圧者間の革命運動と出現させており、また、植民地諸國における土地のない農民の斗争が共産主義活動の大衆的基礎を供していることを大いに強調した。さらに、植民地人民は、

「資本主義的發展によつてではなく、階級意識の發展によつて、先進諸國の自覚したプロレタリアートの指導のもとに、共産主義と結合されるであろう。」

とのべた。

つけ加えておくと、コミンテルン・ロシア共産党はドイツ三月行動の敗北で決定的となつたヨーロッパ革命の挫折とクロンシュタットの反乱にみられる革命ロシア国内の矛盾に直面した。「攻勢理論」から「統一戦線戦術」への大転換を決定し、議論がドイツ三月行動

の評価に集中してはいたが、コミンテルン三回大会(二一年六月、七月)は、ヨーロッパ革命のみ注目する先進國共産党と植民地の革命こそがヨーロッパ革命のカギであるとする後進國共産党の対立の場でもあつた。レーニンの二回大会での「テーゼ」の實行をめぐつて、コミンテルンの方針に対する批判がトルコ共産党からだされ、ジュノビエ議長はできるだけ早くこの討論をきり上げようとした。これに対してロイは抗議し、本大会での植民地問題のとりあつかいは、全くの日和見主義であり、第二インターナショナルの大会を彷彿させると弾劾した。結局、第三回大会の植民地問題に関するテーゼをほとんど前進させることなく閉幕せざるをえなかつた。

このように、若干の混乱とあいまいさを残しながらも、このような政治理論にもとづいて、コミンテルンは植民地各國の民族革命運動の指導を模索しはじめ、各國にコミンテルンの支部として共産党を組織しはじめた。

コミンテルン中国支部、中国共産党もそのようなものとして組織されたのだった。

七・二六三三里塚、一・二番地点農民放送塔

死守闘争 被告団よりのアピール

出獄にあたっての

決意表明

七・二六三三里塚闘争戦士

全国の革命的な労働者、学生の皆様さん！
まず、この間の国家権力の狂気の弾圧下
一青年行動隊に対する不当なデッチ上げ逮捕等々もろともせず、日本階級闘争史上不滅の偉業を堅持している三里塚の農民、労働者、学生に再度敬意を表します。

そしてまた僕自身としても、昨日の七月一・二番地点・農民放送塔撤去の闘いに、断乎とした闘いを行なった自負と誓りを再度新たにし、敵権力が不当にも僕にかけられたデッチ上げ起訴、四ヶ月半の長期拘留という攻撃を自らの思想をかけて粉碎し、今出獄してきたことを明らかにしたいと考えます。

す。

六年間の長期にわたる、反対同盟を中心とした闘いに、六八年の革命的左翼との結合の中で、全人民の政治課題として帝國主義のあらゆる人民支配を暴露し、これを追いつめる一大岩となってきた。そしてなかならず六九年の革命的左翼の闘いの敗北後、戦線の後退局面にあってもそれを堅持し、更には、北総台地一帯の人民の結合を克ち取っていくという実態的な闘争の中で、革命的左翼に対するさまざまな問題を提起してきた。「あれは農民の闘いで小ブル運動で労働者の闘いでない」と、うそぶく「新左翼」も、それを言うことで、自らの日和見主義を全人民の前にさらけ出すことになったし、内ゲバとして表現された党派闘争主義は自らの体内に孕んだ小ブル性も、この三里塚の地では止揚する道も指し示めされている。

我々は七〇年代の階級闘争を担う主体として、六九年の敗北を対象化し、それを総括し、全国の闘う労働者・学生に生き残った問題提起を行なってきた。この七月の闘いにおいても、労学連として結集した労働者、学生、なかならず、九月闘争の突破口を確実に切り拓いたことである。このことは、「農地死守」をかかげることで、一・二番地点攻防戦の中で問われている意味、そして七一年の日本の階級闘争の全体性の中でなにが問われているのか、まったく提起しえず、古い闘争方針・闘争形態に固執している部分への、まさしく生き残った批判であつたと思ふ。

六・一七以後の爆弾闘争、不滅の九・一六三三里塚における機動隊殲滅戦、日本の階級闘争は新たな質を孕み胎動している。帝國主義者と日本労働者人民との闘いはますます激しくなりつつある。帝國主義も、反革命の飛躍を問われている。沖繩をめぐる権力再編（一自衛隊派兵）を軸として、アジア人民と日本人民に、どう猛な抑圧・弾圧を加えるために……。

全国の誠実で戦闘的な労働者・学生の皆さん！全ゆる戦線で反撃しなければならぬ

い！三里塚を普遍化せよ！三里塚を自らのものとせよ！我々は、帝國主義の攻撃に対して最先頭で闘い、蜂起し労働者権力樹立に向け、断固として進撃するつもりです。共に闘わん！

戦線復帰宣言

七・二六三三里塚闘争戦士

昨年七月二六日、三里塚一・二番地点農民放送塔死守闘争において、その最先頭で闘いぬき、残念ながらも囚われ、家裁からの逆送、起訴により、四カ月におよぶ獄中闘争を貫徹し戦線に復帰したことを宣言したい。

残念ながら昨秋の九月三三里塚闘争、一月沖繩闘争に加わることではできなかったが、九月一六日朝「機動隊員死亡」のニュースに東拘内は拍手と異議なしの声にどよめいた事を報告しておきたい。

昨秋闘争は、確かに七〇年よりは一步前進した。それは九月三三里塚闘争であり、権力の重包囲網をくぐりぬけての一一・一九北大阪武装制圧闘争であり、一月闘争であった。

六七年一〇月八日、佐藤のベトナム訪問

を阻止すべく、石塊とゲバ棒、ヘルメットで闘いぬいた羽田闘争以来、革命的左翼の街頭実力闘争は未だ力強く持続している。まさにその激闘の中で数万におよぶ逮捕者や、数多くの起訴者や負傷者、そして死者を出しつつもその生命力を失なっていない。

その闘いは主に、青年労働者・学生によって担いぬかれたと言え、やはり全ての階級、諸階層にその影響を及ぼした事は否定し得ない。

単に現象的に見ても、代々木共産党の五一年綱領にもとづく武装闘争がわずか数カ月散発的に展開されたことをはるかに上まわっている。

ただ我々に欠落しているのはそれらの膨大なプロレタリアートのエネルギーの奔流を一方所に集中し、一身に体现する司令部である。

そして、やはり、日本革命の勝利は、ひとえに、革命的左翼の中での色あいを強めるのか、今後長期にわたる持続的な闘いの内に決定されるのは動かせない事実である。

六九年秋期安保決戦は、革命的左翼の総力を結集した一大政治決戦であつたし、全

国学園闘争の各個撃破されたその総決算であつただろう。

そこにおいて反戦派労働者は、職をなげうち郵便車で炎炎ピンを輸送し、職場政治を行ない闘いぬき、闘う学生は総力をあげて蒲田に結集した。

確かに、その後の我々の前進は、七一年九・一六三三里塚闘争、一月沖繩闘争、一連の爆弾闘争として示されている。だが、膨大なノンセクトをも結集して闘いぬくその密集力と社会的波及力の拡がり、ブルジョワジーとの対決点の総体性において不十分である。

それゆえ、六九年七月の赤軍派の発生以降・党派闘争の激化、七一年六月の全国全共闘の解体として今なおも続く党派闘争の激化を生み出した。その中で多くの学友・青年労働者が「闘う意志」を持ちつつも戦列を離れて行った事実がある。

我々は、七〇年六月京大教養部におけるストライキ闘争の中で、政治的訓練を受け、七〇年九月に登場して以来一貫として闘いぬいている。そして、革命的左翼の最良の部分によって、蜂起し労働者権力を樹立するプロレタリアートの党を獲得せねばならない。自明のことではあるが、革命とは、

プロレタリアートの共同事業であり、プロレタリアート階級の事実である。

我々のなすべき事は、日本革命を貫く正しい戦術の道の確信であり、あくなき歴史的使命感と、自己犠牲と献身性である。

それこそが、政治警察の破防法体制下で、革命を防衛し、組織を防衛し、活動家を防衛し、勝利しぬく道である。

全国の青年労働者・宇友諸君・日本革命の事業は我々の任務であり、諸君の任務でもある。プロレタリア革命を貫く赤い糸は一筋である。ともに闘いぬかん。

一九七一年一月二七日

△編集後記▽

▽『ボルシェヴィズム通信』第六号の発行が予定より大幅に遅れ、多くの読者の皆さん、友人諸君に多大な迷惑をかけた事を、まず、深くお詫ひします。

▽われわれは、日本革命運動史に輝しい一ページを加えた九月三里塚第二次強制収用阻止闘争、そして一〇・一月の沖繩返還協定批准阻止闘争を軸とした昨秋の一大攻防戦を、全国の革命的労働者・学生・農民と共に断乎として闘い抜いた事を報告すると同時に、わが会に対して権力―政治警察が全ゆる手段を駆使し（デッチ上げ不当逮捕、家宅捜査、長期拘留、マスコミを総動員したデマ・フレームアップ等々）組織壊滅攻撃をかけている事に対して、われわれは、いかなる弾圧をものねのけて、勝利の日まで日本労働者人民の最先頭で闘い抜く事を宣言したい。

▽昨秋の沖繩「協定」批准をめぐる闘いで明らかになった事は、侵略・反革命の最初の破綻を死にもぐるいでのりきった日帝―佐藤政府の反動・抑圧の強化に対して、多くの労働者人民が―限界性をもちつつも―立ち上がり、社共の議会主義路線、帝国主義への思想的屈服、官僚・警察専制への全面的降服への進行の中で、階級闘争の新しい基盤・内実・型態・主体が問われているという事であり、かつ、いっそう自覚的にこれに立ち向かうべき革命的左翼の「幼年期」的体質があらさまになったということだろう。

▽革命的左翼の指導の危機―われわれは、一刻も早くこれを克服し、七一年の闘いの諸系列の中に萌芽としてあるへ革命の未来―現在にあっては、あまりにも弱々しく、分断され、計画性のない細線であるが―を統合しうる堅固なボルシェヴィキ党を建設するという任務に向かわねばならないだろう。わが会は、まさにそのような闘いの一翼を今までも最も主要な課題として理論―実践的に担ってきたし、今後も最先頭で前進しようと思う。

▽月の米中談話を軸として、全世界は様々な流動化を生みだしている。わが会は、観念的反スタ主義の克服の作業として、国際共産主義運動の総括を若干行ってきたが、更に広く、深く追求する為に、次号「第七号」は中国共産主義運動に対する我々の評価・見解を明らかにしたい。また、三月中旬には、「自衛隊の沖繩派兵阻止闘争」を闘うための『ボル通』号外を発行する予定です。なお、本号の戦線報告・闘争方針Ⅲの続きも掲載する予定です。

乞御期待！

発行日 1972年2月10日

編集 レーニン研究会「ボルシェヴィズム通信」編集委員会

発行所 レーニン研究会

京都市左京区竹屋町京都大学熊野寮B棟307

TEL (075) 771-6291

定価 250円

佐野茂樹著・発行

〈武装蜂起の党〉宣言

現在の革命運動の危機の特有の性格を明らかにし、〈帝国主義・権力の要塞の正規の攻囲〉にむかう実践と理論の結合を提起する。

書きおろし五〇〇枚／附録・獄中論文選

近日刊／価未定

八木健彦著・発行

我々の緊要の任務と赤色共産党への道（仮題）

日本革命運動の現在の歴史的総括をふまえ、綱領・組織・戦術の全般にわたった革命運動の革命を追求。著者は共産主義者同盟赤軍派。大ボサツ被告、二年三カ月をこえる長期未決勾留中

全文書おろし

価未定／近日刊行